目　次

同窓会総会風景
香川県立三豊中学校校歌
香川県立三豊高等女学校校歌
香川県立観音寺第一高等学校校歌
ご挨拶　……守谷　公男……6
母校の現況報告　……若宮　道雄……8

「母校創立百十周年を目指して」特集

観一高同窓会の概況と創立百十周年にむけて
……三宅　昭二……14
観一高同窓会資料館部会報告その一　…脇　剛司……17
大阪府の高校教育に関わって　……小山　正辰……25
子ども達に平和を渡したい　……安藤　桂子……28
〈母校の思い出など〉
創立百十周年を迎え、あの時代を想う
……向　常善……31
観一で学んで　……出口　修身……34
母校の思い出　……清水　茂昭……38
サイモン&ガーファンクル　……竹下　和良……41
気の医学　その七　……齊藤　良夫……44
支部ホームページの報告　……小野　喬啓……47
岩倉　寿画伯個展見学記
岩倉　寿画伯展　……細川　利久……51
岩倉　寿画伯の個展を見て　……佐藤　益子……53
「岩倉寿画伯展」鑑賞記、のつもりが…
……大西　和明……54

連載特集

観音寺と琴弾八幡宮の情報の話　…脇　剛司……58

追悼文

故藤田廣志氏（日本学士院会員、大阪大学名誉教授）
藤田廣志先生を悼む
……（大阪大学教授）森　博太郎……72

父の残してくれたもの
……（藤田廣志　長男）藤田　直也……75
故近藤正治氏
近藤正治君を偲ぶ　……岩津　真人……79
近藤正治氏略歴　……東洋炭素(株)……82

エッセイ

ユダヤ民族（下）巻　……小林　多聞……84
随筆三題　……合田　重隆……96
(一)人生あれこれ
(二)錦松
(三)バラ園と妻と油絵
故郷の山吟行記　……東　忠……101
師影それぞれ　……穴吹　義教……105
ある三豊中学生の回想　……小菅　亘恭……110
豊浜もしもし談義　……穴吹　義教……132
石鎚登山の想い出　……西山　久子……151
（沢渡会）こんぴらさんで会食　……渡里　典子……154
「仁尾カルタ」草稿　……鴨田　英作……157
人生二毛作「しぼんでたまるか！挑戦記」
（高嶋睦徳さんの紹介記事・四国新聞）……159
平成二十二年春　生誕百年を迎える
「大平記念館」に居て（その二）　…加地　淑久……162
在岡山半百歳　―「水道工事屋」の日々―
……片山　泰弘……169
隣の席の人　……新田タエ子……172
古本屋三十年　第七回「与謝蕪村」…中尾　隆夫……176
「文楽」を観ましょう　……荻田　清……188

文芸コーナー（漢詩・短歌・俳句・川柳）

漢詩三題　……高嶋　睦徳……192
移ろい　……河田　光子……194
ガンという奴　……岩田美代子……194
世相　……内海　善子……195
夢　……鈴木マチコ……195
ひな祭り　……西原　ゆき……196
防風掘る　……清水　正子……196
コスモス（悼　長野美枝様）……藤田八重子……197

喜寿の春 ……田中千鶴子……197
夏帽子 ……森　晴美……198
花の昼 ……三好　昭美……198
初霜 ……冨士田浩子……199
家族 ……河田みどり……199
川柳風「幸せの自分史」 ……出口　修身……200

同窓会報告

三中四十回生、最後の同窓会を終えて
……横山　照美……212
三中四十三・四十四回卒業生 平成二十一年同窓会報告
……石原　敏夫……214
観一・三回生（昭和二十七年卒）同窓会
……宮﨑美代子……216
第八回　亥の子会記
亥の子会報告 ……森口　郁子……219
二次会報告 ……大西佐恵子……220
亥の子会に出席して ……中西美智子……221
平成二十一年関西観八会総会 ―吉野山紀行―
……永田　寛……223
観一・九回生（昭和三十三年卒）同窓会（卒後五十周年記念）
……西庄　俊三……228
観一・三六会の同窓会 ……三好　正則……232
滑床渓谷紀行 ……近藤　秀範・垣見　博子……234
なかよし倶楽部 ……秋山　茂之……236

観一同窓会東京支部『燧』（第34号）ご案内 ……238

あとがき

同窓会本部よりのお願い

香川県立三豊中学校校歌

堀沢　周安　作詞
若狭萬次郎　作曲

一、長瀾寄する燧灘
彩雲なびく巨鼇山
海山遠く見渡して
聳え立ちたり我が校舎
三豊の平野草も木も
直なる中に顕れて
己が力を伸ばし行く
若き益荒雄茲にあり

二、財田川のさらさらと
流るる水を顧みて
吾等も断えず体を鍛へ
いよよ磨かん智を徳を
松風清き琴弾の
神の御前に額づけば
木の間の月は進むべき
道を照らして光あり

香川県立三豊高等女学校校歌

器にはしたがひながら巌をも
とほすは水のちからなりけり

この秋は嵐か雨かしらねども
けふのつとめに田草とるなり

敷島の大和錦に織りてこそ
からくれなゐの色もはえあれ

香川県立観音寺第一高等学校校歌

脇　太一　作詞
服部　正　作曲

一、青雲匂ひ　陽に映ゆる
さぬき山脈　仰ぎつつ
叡智のひとみ　さわやかに
憧がれ強く　羽ばたきて
集へり生命　若きもの
我らに燃ゆる　希望あり

二、大瀬戸清き　新潮に
若き日の幸　歌ひつつ
智徳をみがき　身をたたへ
誠は篤き　友愛に
伝統花と　咲きかほる
我らに高き　矜恃あり

三、財田の流れ　澄むほとり
文化豊かに　啓きつつ
真理をもとめ　溌剌と
理想に挙る　眉あげて
高邁自主の　道を往く
我らに重き　使命あり

ご挨拶

観一同窓会京阪神支部会長　守谷　公男

京阪神支部同窓会の皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素は母校の活躍に、観一同窓会のご繁栄に、いつも並々ならぬご支援を賜り厚く御礼申し上げます。

来年の母校創立一一〇周年記念の諸事業につきましても皆様方のあたたかい御協賛をいただき役員一同深謝いたしております。

さて、世界経済が激変する中、我校は渇望される人材を諸業界に輩出し、さらなる先輩、後輩のご活躍と新たな歴史作りに向かって果敢にチャレンジする姿は同窓生として誠に心強いかぎりであります。

又、これからも会員皆様の建設的なご意見やご協力を賜り、京阪神支部同窓会のさらなる伸展や活性化に反映できますれば幸甚に存じます。

本年の支部総会は十一月十四日（土）正午より「徐園」にて観一　十三回・十九回卒の当番幹事の皆様により開催いたします。大勢の皆様方のご参加を当番幹事共々楽しみにお待ちしております

私事となりますが巨鼇第八号から今回の十三号までの六年、「ご挨拶」欄に寄稿させていただきました。時の変遷と共に支部運営につきましても流れを感じる昨今です。

最後に京阪神支部の発展と会員の皆様のより一層のご健勝とご活躍を心より祈念しご挨拶と致します。

母校の現況報告

観音寺第一高等学校長　若宮　道男

観音寺第一高等学校同窓会京阪神支部の皆様には、本校の教育活動に対し一方ならぬご支援を賜りまして、誠に有難うございます。昨年度は、同窓会育英基金からの奨学金の給付や部活動の振興のためなどに多額のご支援をいただきました。心から厚くお礼を申し上げます。来年度に迫って参りました本校百十周年記念事業につきましては、六つの部会（資料館部会・記念誌部会・式典部会・三女講堂部会・マイクロバス部会・募金部会）で企画検討がなされ、総務部会で了承の後、実施に移っております。特に、資料館部会には作業部会が設置され、京阪神支部からは脇剛司副会長（本校八回卒業）に遠方にもかかわらずご参加をいただき、先輩文庫の充実や教科書の収集整備、資料館の展示、資料のデーターベース化等に取り組んでいただいております。百十周年記念事業まであと一年ほど、学校も同窓会の皆様とともに取り組んで参りますので、京阪神支部の皆様にもご支援をよろしくお願い申し上げます。

さて、本校の現況、とりわけ学習指導や部活動の状況について、ご報告いたします。

本校では、ここ数年にわたり、生徒一人ひとりの能力や適正を伸ばす学習指導や進路指導の充実、さらに心豊か

な人間性を高める教育を目的とした本校独自の試みである「観一ヒューマンフォスタープラン」を実施して参りました。その内容を挙げますと、①生徒対象の各種講座の実施。主に生徒教養講座（社会で活躍する本校卒業生から、ご自分の体験を通した人生観、社会観、専門知識などをお話ししていただき、生徒が将来の仕事や職業を考え、視野を広げることを目的として行われています）や職業選択のための進路講座（本校卒業生三名程度による講演で、現在の職業の内容やその職業を選んだ理由などをお話ししていただき、生徒の進路意識を高めることを目的としています）などを行っています。昨年の生徒教養講座は、東京から牧潤二氏（本校二十回卒業）に、本年は神戸から三木明徳氏（本校二十回卒業）にご講演をいただきました。②早朝学習・早朝読書の実施。一年生全員と二年生文系クラスの生徒は早朝読書を実施。各クラスに図書コーナーを置き、各自好きな本を毎朝十五分間読んでいます。二年生の理系クラスと三年生全員は自学自習をしており、落ち着いた雰囲気で一日が開始されるようしています。③樟樹セミナーの実施。受講希望生徒に対して、土曜日に、年間二十回ほどのセミナーを実施して、学ぶことの面白さを認識させ、視野を広げる機会とすることを目的としています。普段は本校の教諭が指導していますが、大学の先生を招聘して特別講義をお願いすることもあります。昨年は大阪大学名誉教授豊田政男氏（写す、真似る、学ぶ、大学での学びのおもしろさ）や、東京大学の准教授松田良一氏（筋ジストロフィーの分子治療）にご講演をいただきました。今年は、関西学院大学教授三浦麻子氏（科学としての心理学、社会心理学入門）や大阪大学教授河田聡氏（ナノテクノロジー）にご講演をいただく予定にしております。④理数科研修の充実。理数科一年生を対象に、二泊三日の研修合宿を実施し、大学から先生を招聘して専門的な講義をお願いしております。ここ数年は、兵

庫県の西播磨天文台で合宿研修を行っています。また、近隣企業や研究所、大学などの研究室を訪問して行う視察研修も実施しています。⑤大学との連携。インターネットのテレビ会議システムを利用して、希望生徒が大阪大学や東京大学の講座を視聴しています。また、サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（ＳＰＰ）の取り組みにより、最先端の研究に触れさせています。昨年は、「自律型ロボットの制作と制御」「生命科学における高校数学の応用」「社会科学と数学の関わり」「天文台と博物館の連携による自然科学入門」等の講座を行いました。また、京都市立芸術大学名誉教授岩倉寿氏（本校六回卒業）にご来校いただいて、ご講演や美術のご指導をしていただきました。生徒による志望校の大学訪問については、ここ数年大阪大学の研究室訪問を実施してきましたが、今年度はそれに加えて、東京大学など首都の大学訪問を実施し、現地で卒業生からの激励をいただきました。

なお、今春の大学入試では、京都大学三名、大阪大学五名、神戸大学五名など国公立大学の合格者は、昨年より若干増加して一二五名でした。また、慶応大学五名、早稲田大学一一名、同志社大学一五名、立命館大学二三名など私立大学の合格者は四三八名でした。

本校生徒には、長い歴史と伝統に育まれた文武両道を目指す校風が、脈々と受け継がれております。本年六月上旬に行われた香川県高等学校総合体育大会には、本校から三四〇名を超える生徒が出場し、昨年に続いて県下の高等学校の中で一番出場生徒が多い学校となっています。戦績も大変素晴らしく、六月中旬に行われた四国高等学校総合体育大会には、陸上部、新体操部、卓球部、弓道部、ソフトテニス部、登山部、さらに空手道や少林寺拳法の個人競技などに出場しました。七月末から八月上旬にかけて、奈良県を中心とした近畿各県で行われた全国高等学

校総合体育大会には、陸上部、ソフトテニス部、登山部、アーチェリー部が出場しました。また、野球部は全国高等学校野球選手権香川大会に向けて猛練習に励み、甲子園出場を目指しましたが、土庄高校との試合に惜敗しました。一方、学芸部の活動も運動部に負けず盛んで、八月に三重県で開催された全国高等学校総合文化祭には、邦楽部と美術部が出場しました。

小・中学校の学習指導要領の改訂に続き、昨年末、文部科学省から高等学校学習指導要領の改定案が示されました。十年ぶりとなる今回の改訂では、週当たり標準である三十時間を超えて授業ができることや、義務教育段階の学習内容の確実な定着をはかるための学習機会を設けることができるなど、「ゆとり教育」から「学力向上」に方向転換した内容となっています。改訂の目玉は、理数教育の充実と英語の指導にあります。英語では、指導する単語数を現行の一三〇〇語から一八〇〇語に増やし、指導に当たっては授業を実際のコミュニケーションの場とするため、英語で授業を行うことが基本とされました。今後のスケジュールでは、平成二十一年度中に周知徹底を図り、総則、総合的な学習の時間、特別活動など、直ちに実施可能なものは平成二十二年度から実施する予定です。さらに、平成二十四年度から数学・理科が移行措置として先行実施され、他の教科も平成二十五年度から学年進行で全面実施となっています。本校でも、新しい教育課程の検討が始まっています。

学校も時代とともに少しずつ変わって参りますが、長年にわたって育まれた本校の伝統と校風を継承しつつ、これからも地域の皆様に信頼される学校であり続けたいと思っております。今後とも、皆様のご協力、ご支援を賜りますようお願い致します。最後になりましたが、京阪神支部の皆様のご健康と益々のご活躍をお祈り申し上げます。

「母校創立百十周年を目指して」特集

観一高同窓会の概況と創立百十周年にむけて

三宅　昭二

京阪神の皆様お元気ですか。観一高同窓会に対して、いつも深いご理解とご支援を頂き、厚く感謝いたしております。

私は同窓会京阪神支部の総会へは、副会長の時代から数回続けて出席させて頂いています。お伺いするたびに、役員の方々をはじめ、会員皆様の、同窓会に関する熱い思い入れが伝わってきますし、同期生はもとより、先輩・後輩のなつかしい方々や、こんな機会でなければ親しくお話することなどかなわない著名な方々にもお目にかかることが出来て、親近感を覚え、とても心がはずむのです。

同窓会は、三中・三女・観一を卒業したと云う連帯感の中で、肩書きをはずして、なつかしい、かつての日の思い出や、お互いの現況、今後のことなど、あれこれと語り合うことに意義があるのではないかと思います。

昨年度の貴支部総会は、「太閤園」と云うすばらしい会場で、『乙女文楽』を鑑賞することが出来ました。香り高い文化にふれることが出来まして（京阪神はすごいなあ）と改めて感服しました。今年も又、十一月の支部総会を心待ちにしているところです。

次に同窓会本部の概況を申し上げます。二年間の任期満了となりました私ほか本部役員は、四月に全員再選となりました。事務局も全員再選しました。ひき続いて同窓会のお世話役となります。どうぞよろしくお願い致します。

観一高同窓会の組織拡充は、私たちの継続した課題ですが、ありがたいことに年々充実して来ております。『支

部』について申し上げれば、京阪神支部・東京支部をはじめ、岡山・高松・松山・坂出・丸亀等々から地元の最大の観音寺支部ほかの旧町単位の各支部総会まで、ほとんど毎回出席させて頂いていますが、それぞれに趣向がこらされていて、同窓会ならではの和やかさ、楽しさが満ちていました。そして支部共通の課題もありました。それは、老・壮・青と男女のバランスが計られることです。特に青年層の参加の手だてについて、京阪神支部や東京支部では、観一卒業の大学生に働きかけて、総会に招待したり、ホームページを立上げ、東西相互にリンクを張るなど、工夫をされています。このように各支部で努力され、特色ある活動が展開されていることを力強く感じました。

『年次』については、本部同窓会では、現在三十二回卒の年次幹事を迎えておりますが、今後さらに四十回卒ぐらいまでの若手年次の組織化を計るならば、さらに同窓会は活性化するものと思われます。

「本部同窓会も、かつては四・五十名の時期があった」と白川市長が総会挨拶で述べておられましたが、今年度はこれまで最高の四六四名の大盛況となり、嬉しい悲鳴でした。隔世の感があります。一人千円の会費納入が例年と比べて九百名（九十万円）減少したことを一同心配したのですが、今回はA票に千円の会費を、B票に百十周年の募金をと一緒に書いてお届けしたので、募金をどうしようかと思案されている内に、用紙が見当たらなくなったのではないか――と理事会でも話し合われ、今回の総会出席数と熱気を見て安心したような次第でした。

いずれにしても一口千円の会費のお陰で、観一高在校生には、「育英基金」と「振興奨励費」を続けて贈ることで、母校の発展と後進の育成にいささかなりとも寄与出来ているのではないかと思います。

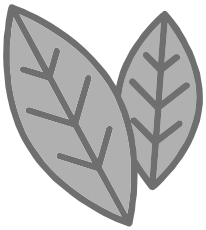
『創立百十周年』は、いよいよ一年後に迫りました。昨年・今年と同窓会本部総会で私から報告申し上げた通り、

①資料館の内容を整備する
②三女講堂のミニチュアを造り、常時展示する
③マイクロバス（二九人乗）を学校へ寄贈する
④記念誌の発行
⑤記念式典

これらの各部会の上に「募金部会」が加わり、六部会が昨年八月より立ち上がって活動中です。それぞれに副会長が部会長となって、学校・ＰＴＡのご協力を頂きながら、順調に進んでいます。資料館整備の中では、年代ごとの教科書集めや、「先輩文庫」の充実などが提案されています。広くご協力下さると助かります。さらに記念式典は来年十月に同窓会主催として観音寺で開催する運びとなりました。募金は二千万円の目標に対して、現在六十パーセント強の振込を頂いております。振込〆切は一応八月末迄となっておりますが、自主性をベースとした同窓会です。皆さんのご理解を得たご協力を切にお願い致します。

来年十月には、歴史と伝統あるわが母校、観一高の創立百十周年を記念して、全国各地からご参集の多くの同窓の皆様と共に手をとりあって、心からのお祝いをしたいものです。ぜひご出席下さいますよう、今からご案内をさせて頂きます。

京阪神支部会員の皆様には、健康にご留意の上、益々のご繁栄を祈念致します。



観一高同窓会資料館部会報告その一

百十周年記念事業資料館部会
京阪神支部代表　脇　剛司

一、はじめに

観一高同窓会資料館は、創立八十周年記念事業の一環として、昭和五十五年四月一日に東側にある旧土蔵を改装して竣工開館された。建物は、二階建で延面積約八十平方メートルの館内に展示品約一〇〇〇点を展示収納されている。織田一先生(三中三十回)の長年に亙るご尽力で整理・保存されたものである。

二、資料館ができるまで

ここにいたる過程は、東京支部同窓会誌「燧十六号」、京阪神支部同窓会誌「燧七号」(ともに平成三年版)に織田一先生(三中三十回)による「母校の『記念資料館』について」が特別寄稿されている。

ここにまとめられている資料館の経緯は

① 昭和四十年末、職員室が完成し、創立六十五周年および校舎改築落成を祝して十二月二十三日に、記念式典が挙行され、翌二十四日記念展示(三中展・三女展・一高展・先輩展)が生徒・父兄に公開された。

② 昭和四十五年十一月六日、記念事業の大体育館*が竣工し、創立七十周年記念式典が挙行され、食堂全面を利用して記念展示が公開された。

＊平成二十年旧体育館が解体され以後「体育館」と称す。

③ 昭和四十六年には、空教室を利用して、記念資料室を設け、随時参観・閲読ができるようにした。

④ つづいて約二ヶ年を要し、昭和四十八年三月一日におよぶ「記念資料目録」に纏め上げられた。

⑤ 織田一先生は昭和五十二年四月に定年退職されたが、先生の思いは引継がれ、昭和五十五年四月に創立八十周年記念事業の一環として旧土蔵が改装され、資料館

となった。

三、「記念資料目録」にはどんなものがあるのか

記念資料は、昭和四十八年の「織田目録」によれば、

・三中　五七七点
・三女　六十点
・観一　二二八点
・寄贈図書　一〇二〇点
・その他記念資料　四〇八点
合計　二二九三点

が確認されているが、その後の三十六年間の寄贈と不明や廃却のものもあり(例えば、昭和四十年寄贈トヨペットクラウン、同四十三年ベルリーナ・ダイハツフェロー、同四十七年生徒合宿用寝具一式など)、これらは調査確認が必要である。

①　三中の記念資料

恩師　・中井虎男先生(明治三十七年～昭和九年)
・細川敏太郎先生（三中十二回大正十一年～昭和三十三年）
著名先輩・加藤藤太郎氏(三中二回)
・松永陽之助博士(三中十二回)

の四名の経歴・功績などの説明がある。この時代、大平正芳先輩は外務大臣で、総理大臣に就任したのは、昭和五十三年であり、昭和四十八年の「織田目録」には、講演テープ・色紙・著書の説明程度であるが、前述の「母校の『記念資料館』について」では、経歴・功績が纏められており、百周年記念誌「樟柳」の資料館の項目では「大平正芳氏」のページが設けられ資料館にも展示されている。

松永陽之助博士は外遊中求められた「ガリレオ全集」・「ルジャンドル、エクジェルシスド・アンテグラル」を寄贈され、「ニュートン、プリンシピア」を贈られた中井先生は私蔵を辞され、ともに観一高に寄贈されている。

このことで昭和四十四年、佐藤栄作総理大臣より表彰されている。

この他、記念写真集・優勝旗・三中校旗・校友誌「巨鼇」や先輩各位から寄贈された書画が保管展示されている。

② 三女の記念資料

恩師 ・石井朝太郎先生(明治四十年初代校長～昭和六年)

・請川新次郎先生(明治四十年～昭和六年)

・堀野林治先生(明治四十四年～大正九年)

の三名の恩師の略歴・功績がある。石井先生・堀野先生はともに宮中歌会始の詠進歌の入選者で、現在その歌碑は観一高校内と琴弾山山頂にある。

この他、石井先生の愛用大礼服、請川先生のシルクハット、三女門札、平丸紋章瓦、セーラー服、もんぺ、記念写真集、校友会誌「そなれ松」などが保管展示されている。

③ 観一高の記念資料

残念ながら、昭和二十三年の学校統合以来の恩師著名先輩の略歴・功績項目は纏められていない。観一高時代の恩師を顕彰するのも資料館部会の仕事だと思われる。

新体育館建設*、新校舎改築、五十メートルプール建設等の資金の特別寄付芳名録・諸感謝状、旧門札や、藤川繁久氏(定時制二十回卒)の新彗星発見の表彰状や天体観測写真は異色である。

＊平成二十年旧体育館が解体され以後「体育館」と称す。

その他、各回の卒業記念写真アルバム、各記念誌編集用の写真帖、昭和四十七年再開された校友誌「樟樹」、学芸部・運動部の記念資料や各支部の同窓会誌が保存されている。

また、この時代は、観一高卒は四十歳を過ぎたばかりであり、資料館保管品も三中・三女の卒業生の時代のものであることは否めない。

百十周年を迎える平成二十一年には、観一高一回卒の

先輩も八十歳を迎えることであり、直木賞受賞の芦原すなお氏（観一・十九回）など何名かの活躍があるが、今回是非展示を検討したいと考えている。

④　寄贈図書関係

卒業生からの寄贈図書は、昭和四十八年頃で二千余冊と伝えられている。その後寄贈で二千五百冊を超えるものと推測される。この時代寄贈された図書はすべて「寄贈文庫」と称していたようで、その後「寄贈文庫」と「先輩文庫」に区分されるようになったと伝えられている。

寄贈文庫は

・中井文庫　・細川文庫　・松田文庫　・片山文庫
・真鍋文庫　・伊瀬文庫　・安藤文庫　・位野木文庫
・岡崎文庫　・小畑文庫　・藤田文庫　・松木文庫

などがある。

⑤　その他記念資料

A、寄贈美術品

これまで新校舎落成など〇〇周年記念事業の時期に合わせて多くの美術品が寄贈され、校内各所に飾られている。とくに

・「大歩危風景」油絵　大久保百合恵先生（旧職員）
・「碑」油絵　田中岑氏（三中三十六回）
・「創造の祭神のための小広場の壁」壁画（同右）
・「讃岐」日本画　岩倉寿氏（観一・六回）

が著名・名作である。

百周年記念事業時には

・「凧二つ」油絵　田中岑氏（三中三十六回）
・「屋島合戦」紙版画　井上員男氏（観一・二回）

が寄贈された。

書では、扁額・書軸・色紙・短冊など多く寄贈されているが、三中時代が盛んで以後少なくなっているようである。

B、その他寄贈品

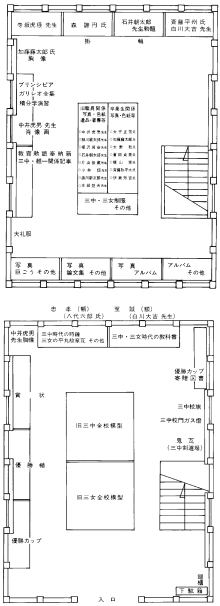
昭和四十年以降多くの品々が寄贈され、その都度「芳名録」に詳記されている。

「南極の石」・「庭石」・「掛け・敷ふとんなど同窓会館備品」などが寄贈されているが、自動車・テレビ・テープレコーダーなど役目を終わったものもある。

四、資料館は何を展示しているのか

前述のように資料館はスペースが限られており全ては展示が出来ない。

左図は平成初年頃の展示配置図で現状では寄贈図書は「寄贈図書」と「先輩文庫」に区分され、百周年記念館



および図書館に保管されている。また、「中井先生」の遺品などは一部移されて「学校新聞」などの低いケースの上に置かれている。

一階中央の三中・三女校舎の模型が展示されているが、縮尺が異なるようで違和感を感じる。

壁際のケースには優勝カップ・楯・賞状、三中校旗・時鍾、三中・三女の教科書、「至誠」・「忠孝」の扁額、金庫の上には中井先生の胸像、旧校舎の鬼瓦・平丸紋章瓦などが展示されているが、時代を離れた人たちには説明文が無ければ理解できないだろうと思われる。また下部の収納部分には、運動部の表彰状などが雑然と置かれている感がする。フロアーには片山伝蔵先生の「扁額」が置かれている。

二階は、白川大吉先生・斉藤弥平太先輩の書、石井朝太郎先生の入選歌「朝海」の拓本、仁和寺の森諦円門跡(三中十七回)の書などが展示されているが、軸物はケースの高さ不足で下部が巻かれている。つづいて、ガリレオ・

ニュートン・ルジャンドルの稀覯本の写真(現物は別保管)、卒業アルバム・校友誌などがあり、中央のケースには旧職員・卒業生の遺品・著書・色紙などが展示されている。

壁際の上部には、歴代校長の写真がかかげられているが、三女のものは一部欠落しており、観一高時代の写真はない。

これらの展示は三中・三女に関するものが殆んどである。在校生の年代からみれば、曽祖父・高祖父の時代の話であり隔世の感を抱くのも止むを得ない。在校生の祖父の時代―観一高の十回位まで―の展示コーナーを設けるのも一案かと思う。

また、今回の整備ができたとしても、年に一回、観一祭前に整理をするとかのルールを決めて運営していかねば百二十周年時に禍根を残しかねないものと思われる。

五、百十周年記念事業「資料館部会」について

観一高同窓会本部においては、平成二十年度より「創立百十周年記念事業」が提案・検討され、実行委員会部会組織のなかで「資料館部会」が「資料館の資料整備」を検討することとなった。

本部副会長大久保健二氏が部会長を務め、学校側池内教頭、同窓会本部七名、支部三名(東京―牧幹事長・京阪神―脇副会長・松山―穴吹支部長の各一名)で構成される。これまで数回の事前検討会議および六回の資料館部会が開催された。

平成二十年度に取り組んだことは

① 「織田目録」を基準に、書籍、書画・工芸品、寄贈品、恩師・先輩の遺品、記念碑・記念胸像、教科書・和装本、卒業アルバム・校友会誌・同窓会誌など二十二項目に分類し、電子データ化した。

② ①の書籍のうち「先輩文庫」のリストと現物の確認を行った。ただし、一部未確認を残す。

③　確認した「先輩文庫」リストに従い、百字程度の書評作成(野口先生担当)をスタートした。

④　「先輩文庫」は、百周年記念館の一階小会議室に新設の書棚を設け収納する。ただし、リストは資料館で見られるようにする。和装本も収納する。

⑤　九月の観一祭に「資料館アンケート」を行い、その関心度を調査した。

⑥　稀覯本・和装本の現在の評価依頼を中尾隆夫氏(観一十九回、大阪・中尾松泉堂)にお願いした。

⑦　学校資料館を持つ高校を調査し、質・量ともトップと思われる広島県福山市の「誠之館高校」の「誠之館人物誌」に関る情報収集を池内教頭にお願いし、懇切なるご指導と「百三十、百五十周年記念誌」を戴いた。

⑧　「誠之館人物誌」を参考にして、観一高も「樟柳人物誌」として、著名卒業生・受賞歴・観一高講演者の略歴などをまとめていく。このデータは資料館展示品の紹介名札にも活用する。

―この件、現在の名札は、例えば「三中十九回　伊瀬芳吉」のデータのみで、伊瀬芳吉先輩がどんな活躍した人かを知らない卒業生が多くなっているのが現状である―

⑨　教科書はすべて収集されてはいないので、旧職員を中心に寄贈依頼の文書を発送する。

⑩　資料館一階の三中・三女の校舎模型は撤去方向で検討する。

⑪　今後寄贈文庫は原則としてお断りする。

などが決定または方向付けされた。

平成二十一年度からは下部組織として、学校側十名の教諭(先輩文庫・資料館・観一祭の資料展示・資料情報担当、部会・同窓会から野口先生(観一・六回)・菅(観一・八回)・脇(観一・八回)の三名、合計十三名で検討する「作業部会」が発足する。

六、これからの取組について

平成二十一年度の取組みは、前年度取組み事項のフォロー・各資料のリスト作成とともに、資料館の展示方法の検討を行うことである。

現在の資料館の展示は三中時代が主であり、また恩師、教育界・実業界・政界などで活躍した先輩が多く紹介されているが、年代の流れが明確でなく、ピンポイント的な展示の感があったと思われる。

また、資料館は三中創立時からの唯一残された歴史的な建物(旧土蔵)であるが、すべての資料を展示するには手狭であり、新展示場所が求められる。前述のように「先輩文庫」・「卒業アルバム」などは、すでに記念館一階小会議室に移動した。また、展示しない資料の保管場所の確保も必要である。

これらの場所の性格・制約は

・資料館　　常時開かれていない(鍵が必要)

・記念館小会議室　　書籍など壁面を活用

・新展示場所　　常時開かれている場所

であり、新展示場所の候補としては、百周年記念館の玄関右のホールの東西の壁面にパネル、その前に展示ケースを新設することで展示場所の拡大を図る案が提案されている。

また、展示の仕方については見学者に時間の流れと事象が理解されるように、観一高の「沿革史」を軸として、恩師の顕彰、卒業生・在校生の活躍などを説明する方法が考えられるが、

・資料館は、長い期間展示する場所

・記念館は、例えば「一年間展示(毎年観一祭の時期をスタートとする)」をする場所

にするなど、今後の部会で方向付けされることとなる。先輩諸兄のご意見も寄せて頂ければ、幸いと思います。

連絡先
城陽市寺田深谷五十七―十一　　脇　剛司
E―mail　　twaki13@yahoo.co.jp

大阪府の高校教育に関わって

観一・22回　小山　正辰
（大阪府立大冠高等学校）

一、大阪府の教員として

昭和四六年観音寺一高を卒業、立命館大学に入学しました。六月初め、入った「空手道部」が空手道界屈指の名門だと知らず、音を上げそうな時期もありましたが、「辛抱」と「希望」を教えられ、身に付け、四年目に大学選手権を手にすることができました。さて、職を得て何者かになろうとするのに、選んだのが空手の道を続けることのできる「体育の教師」でした。

現役四年の間は教職課程を取っていなかったので、一旦卒業し「体育」と「社会」の教員免許を取得しました。二年を要し、採用試験に落ちてさらに一年、計三年の浪人生活でした。空手を続けるため、京都から通うのに交通の便の良い大阪府を受験、昭和五三年大阪府立野崎高校（大東市）を皮切りに教員生活が始まりました。

生徒急増期の大阪の公立高校は普通科が多く新設され、野崎高校や二つ目の赴任校、高槻北高校（高槻市）も新しい学校でした。両校で計十五年務めたあと、農業を専門とする園芸高校（池田市）で教諭としてのキャリアを積ませていただきました。（農業から教えられた事多々あります。紙幅の関係で残念ながら省略します）

野崎高校時代、心に銘記したこと、それは、自分の高校生活や経験を引き写し、基準にして生徒に関する諸事を判断してはいけない、ということでした。土地柄、育ち方、時代の動き。十五歳から十八歳という年齢こそ同じであっても、目の前の生徒の「個性」はそれこそ千差万別、彼らの生きてきた背景はわずかな人生経験で理解できるものではありませんでした。香川県と京都、大阪という田舎と都会、歴史の厚みなどの違いだけでなく、その時代、その場所で出会った生徒たちは、それぞれが父や母、兄弟姉妹と共に「人生」を抱えています。何を

どのように伝えれば良いのか、教師自身が経験と修練を経て、伝えていくものをしっかり持たなければ、生徒の魂には響かない、親（保護者）も理解してくれない、それを実感しました。教員生活を続けていくにはなにより、生徒を「かわいい」「なんとかしてやらねば」と思う気持ちが必須であると思います。

二、大阪府の校長として

昨年橋下知事が登場して大阪府の「教育現場」は大いに混乱しました。「暫定予算」「予算・給与カット」「非常勤職員の雇い止め」等など。

平成十一年からスタートしていた「教育改革プログラム」で、大阪の学校は大きく様変わりしました。最盛期は十四万人いた高校生が半分の七万人に減少し、それに伴う「再編整備」＝学校の統廃合が断行され、加えて新しいタイプの高校が多数生まれました。「開かれた学校」ということで地域との連携が求められました。教頭としての初任校「磯島高校」（枚方市）も再編整備対象校となり、その後「普通科総合選択制」（大阪府独自のシステムです）の「枚方なぎさ高校」（磯島高校跡地に新設）に生まれ変わりました。

また、校長としての最初の学校「城山高校（豊能郡豊能町）は機能統合による閉校となり、昨年三月、六十年の歴史を閉じました。統合相手校である園芸高校に記念室や記念庭園を設置し、同窓生が集い懐かしめるようにしています。（この様子は平成二十年三月四日、毎日放送の夕方のニュース番組「ＶＯＩＣＥ」で放映されました。）

そして今年、平成二十一年度、「『大阪の教育力』向上プラン」がスタートしました。少子化の進行、団塊世代の定年、雇用環境の変化、何より今年は経済状況の悪化など、われわれを取り巻く社会が変容する中でこれからの社会をどのように形成していくか、そのために教育界は人材をどのように育成していくか、課せられた使命

は重大です。そのための「教育力向上プラン」であらねばならない、と考えています。

三、大阪府の高校に関する施策現況

「『大阪の教育力』向上プラン」を紹介しておきます。このプランは、今後十年間の小学校中学校の義務教育と高校教育についての計画がまとめられています。（詳しくは大阪府のＨＰをご覧ください）

○大阪の教育が大切にする「３つの理念」

☆地域に根ざす

☆違いを認め合うとともに、子ども一人ひとりの力を伸ばす

☆前向きに生きる姿勢をはぐくむ

○「３つの目標」

☆「学校力」を高める

☆学校・家庭・地域をつなぐ

☆子どもたちの志や夢を育む

この理念と目標を具体化する十の基本方針、三十五の重点項目があり、「高校教育」に関連深いのは

【基本方針２】

「すべての府立高校が魅力を高めあい『入ってよかった』」といわれる学校を目指します。

というところです。

これから十年この「プラン」が遂行されていきます。最初の五年で「文理科」という進学指導に重点をおいた十の学校、新たな専門学科（体育科）を一校設置、専門コースをもつ高校を二十四、設置するという方針が発表されています。この原稿が皆様の前に出る頃には学校名も公表されていることでしょう。これらの施策を中心に大阪の高校教育が展開されていきます。私より若い世代の同窓の皆様方には行く末をしっかり見ていただき、公教育の充実にご理解とご支援を賜りたいと存じます。

子ども達に平和を渡したい

観一・22回　安藤　桂子

日々の仕事に追われ、過去を振り返る余裕のなかった私に原稿のお話が…私にとって観一とは…『勝ち組』と『負け組』『勉強がわからない』という経験をさせてくれ、人間としての幅と社会への目をほんの少し広げてくれた学校だったかなと、振り返ってみれば思います。

日本の近現代史を学びたいと入学した大学の文学部史学科には専攻の教授がいませんでした。非常勤講師として近現代の講座を担当していた他大学の教授に、あつかましくも卒論の指導をお願いしました。

中学の社会科の教師になるつもりだったのですが、当時、社会科の採用試験の倍率は全教科中、最高でした。制定されたばかりの『人材確保法』による小学校免許取得試験をにわか勉強で受けたところ、たまたま合格。

大阪府の採用試験はG判定であったにもかかわらず、採用通知はきませんでした。当時、私のように採用されなかったG判定の人が何人もいました。仕方がないので、各市教委に履歴書を持って講師探しに回っていたところ、岸和田市で正式採用してくれることになりました。

以来小学校教員三五年目になります。そして、今年度末で退職するつもりです。仕事は好きですが、全力を出して仕事をするには、精神的にも肉体的にもこのあたりが潮時かなと思っています。

にわか勉強でなった小学校教師は音楽も図工も苦手な私にとってたいへんでした。先輩教師の指導助言を受け、仕事をしながら学ぶ毎日でした。そんな中で障害児学級の担任となり、すばらしい親子と出会うことができました。四年間担任した重度の自閉症の彼が、何年も蓄えていた力を六年生になって花開かせてくれたのです。指導要領に縛られず、目の前の子どもに何が必要かと四苦八

苦する障害児教育に、はまってしまいました。転勤しながらそれぞれの学校で、通常学級と障害児学級を担任してきました。障害児が障害児学級（大阪では以前は養護学級、今は支援学級）できちんと発達課題に合った教育を受け、通常学級で健常児と共に、協力し合い認め合う生活を目指してきました。

貧困な教育予算のもと（国も府も）、障害児の教育条件はひどいものです。府下一四〇〇〇人もいる支援学級在籍児に対し、私達の要望とはほど遠い学級設置状況です。また、特別支援学校に通う子ども達も増加の一方で、二〇〇人規模で設立された学校で四五〇人の児童生徒が学んでいます。特別教室も会議室も廊下までも普通教室に転用している状況です。特別支援学校の増設を長年要望してきた教職員、保護者の運動の中でようやく、二五年度までに四校の整備に着手すると示されました。

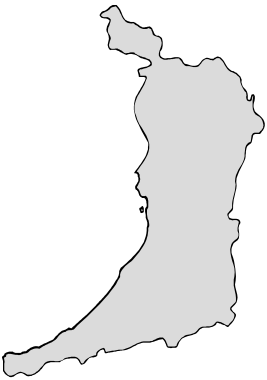
障害児との生活と共に、私の教師生活で財産となったのが教職員組合での活動です。『教え子を再び戦場に送るな』のスローガンに共鳴し、女性教師が安心して子育てをしながら働き続けられるよう、子ども達に平和な未来と楽しい学校を提供できるよう、微力を注いできました。

強く印象に残っているのは、岸和田市で大阪府下初の小学校一・二年生の三五人学級を実現したことです。当時の民主市政のもと、教職員組合、ＰＴＡ、『だんじり』で結束の強い町会が協力して署名を集めました。岸和田で実現したことで他市にも広がりを見せました。府下各地からの強い要望で、とうとう前太田知事も府の施策として実施せざるを得なくなりました。教室の机が一列減っただけで、子ども達はずいぶん落ち着きました。

ところが、現橋下知事は就任早々この三五人学級の制度の廃止を打ち出しました。これには府ＰＴＡ、校長会も短期間で多数の反対署名を集め、知事の断念を引き出しました。『子どもが笑う大阪』にしたかったはずですから…

一〇〇年に一度の経済危機といわれていますが、その責任はどこにあるのでしょう。障害児を産んだ親にも、障害を持って生まれた子にも、中途障害になった人にも、正規雇用されなかった人にも、解雇された人にも責任はありません。何でもかんでも『自己責任』という国は、どこへ行こうとしているのでしょう。

教育現場は離れますが、『憲法9条』を守る立場でできることを探したいと思っています。平和でなければ弱者・子どもは守れません。



創立百十周年を迎え、あの時代を想う。

三中・　36回　向　常善

来年が母校観一高の創立百十周年と言う長い歴史のあゆみを思う時に、五年の歳月ではあったが多くの教師のご指導、友の情けに啓発をうけ今日の人格に形成される礎を作ってくれた意義ある五年の年月であったと思う。

私共の時は、現在とは異なり一学年百五十名、五年生迄で七百五十名の男子だけの県立三豊中学校であった。

憧れと不安の交錯する気分の中で旧観音寺町内の母校の門をくぐれば、楠樹に囲まれた木造の校舎、広々として、現在のサッカー場を彷彿さす程の広さのある運動場、西洋建築の講堂と百畳敷き以上の柔道場と剣道場。二十五米のプールと目にするもの総てが驚きのものばかりで、学習と運動に事欠けることない恵まれた環境の学舎であった。

三豊郡内の各町村の小学校から一名か、二名かの新入生五十名で一組、三組合わせて百五十人で組織され、私は一年一組に入り、担任が英語担任の白川良八先生となる。

英語科目の教師が担任となり、心秘かに喜び居るも、夏休み前に病気で急逝されると言う悲しい出来事があり、楽しみの英語学習をと願っていた熱も醒める方向になり一年生後半を無為に過ごす結果の年となる。

校訓の質實剛健を胸に昼の弁当の食事以外は小遣いの一銭も持参せず、六里の道を雨風にも負けず自転車通学で、一心不乱、世間の事には無関心でいたが、二年の時に教練担任の三好仁太郎先生が徴用で学校を去られ、半年も経たぬ間に、戦死されたとの事で講堂で学校葬が営まれ、始めて上海上陸の戦で戦死されたとの内容を知り、戦局の状況を少しながら理解する機会を得る。

学校内も今まで柔道場の建物の庇に間借りの形であった武器庫が手狭になり、剣道場の隣の広場に新築落成移転される（昭和十三年九月竣工）。

職員室も配属将校の席も出来て軍服姿が三人に増える光景となり、学校の行事にも月の一日を興亞奉公日と称し、ラッパ部の西岡君が先頭で行進曲を吹奏しながら琴弾神社へ武運長久の祈願に参詣し、帰校後から授業と言う変則日が多くなる。

この写真は武器庫竣工の翌年の昭和十四年秋に開催の県下中学校射撃大会で我等の部が最高得点で他校を抑えて優勝の栄誉に輝いた時の記念の写真である。

何となく軍事色を帯びた写真で、学校内の写真にしては不似合いの光景であるが、前列に井村貫一郎校長先生、内山徳太郎先生、太田誠一部長先生、石田昇一先生殿他配属将校殿、そして後列に射撃部員が勢ぞろいの優勝記念写真である。

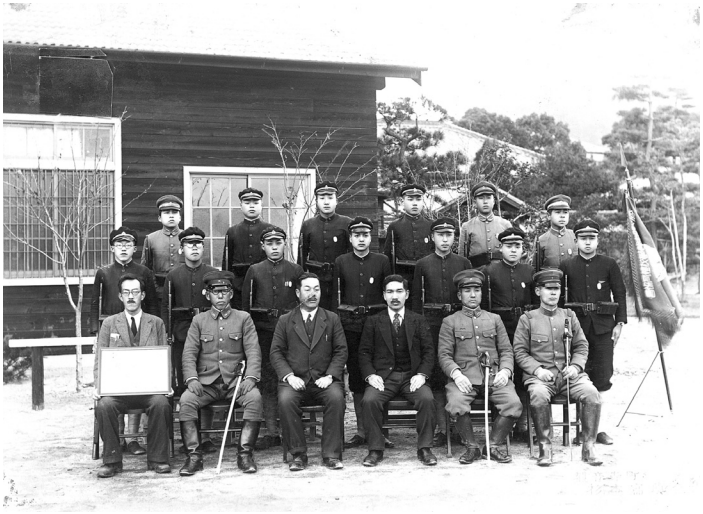
爾来七十年の春風秋雨、白髪の年にあれど、当時を追想すれば、一四四名の同級中、既に八六名が鬼籍にあり、その内三十八名の前途有爲の同僚があの時の大戦に国の御楯として戦場に征き、還らぬ御霊となる。誠に悲しきかな。

机を並べ共に学びし宮崎恭昌、黒川敏之、森川一二男、滝口美徳、森正利、浦野正義君と次々に諸兄の顔が目に浮かぶ。三十有八柱の諸兄の御霊の鎮まらんこと冀う。

何とぞ、母校の輝やかしき百十周年の歴史を御照覧あり、更なる多くの御加護を賜らんことを。

合掌。

平成二十一年六月十五日



昭和十四年秋撮影

新築武器庫

記念写真整列の名前

深紅の優勝旗

森三年生部員　大平啓一郎

湊三年生部員　藤川　福

岩本四年生部員　小野　重一

井原　和夫　前川　照由

大西四年生部員　斉藤　孝之

宮武　三郎

真鍋三年生部員　向　常善

石田昇一先生（騎兵准尉）

美藤重一訓練教官

内山徳太郎先生

井村貫一郎校長

諸井孝介配属将校

優勝額と

太田誠一部長先生

観一で学んで

観一・11回　出口　修身

僕ら昭和三十五年三月卒は、来年には卒業五十年を迎える。それを機に、同窓会も企画されつつあり、良くぞ幸運にもここまで生きて来られたと思う。

個人的な思い出で、勘違いもあろうが、若返った気持で、思い出すままにキーを叩いてみよう。

高校入試では、のっぽの生物の八木先生が監督で居られた。観一高一本で、幸い合格はしたが、後で双子のKさんの一人が落ちたことを知って、子供の頃家にも遊びに行ったことがあり、胸が痛んだ。

当時の高校進学率は四十六％ぐらいだったと思うが、定時制のあることも知らない、世間知らずだった。

高一ではちょっとモンゴメリー・クリフトに似た、代数の土田良明先生担任の六組に入った。女子二十六・男子二十八の五十四名で、京阪神支部の合田洋一・厚生君や、白川君、岩倉君らが居た。私は家が青柳町にあったので、朝は観中から続いて同じクラスに成った溝手新五君兄弟が、倉紡の近くから誘いに来て、一緒に登校した。

授業では、生徒の机間によく来られた現代国語の請川昇先生、教壇上を絶えず動かれていた幾何の尾崎魏先生、色白で熱心だった一般社会の藤村博三先生、リーダーとグラマーに別れていたように思う英語の王尾一男先生。「模式図」と言えば思い出す生物の木下峰義先生と、夫々熱心に指導され、真面目に授業を受けた。

六月だったか、楠に囲まれた講堂で、声楽家の長門美保さんを招いて、モーツァルトの魔笛の中のアリアを聴いた。ラジオでも歌劇を聞くことなどなかったので、新鮮で綺麗な姿と共に文化の香りを十分に味わった。

またある時、体育館で、浜田成博校長の話があり、「人間にはそれぞれの歳や時期に、必ず読むべき本がある」

という話をされた。後には学校の本も借りたが、当時は溝手君宅の本棚から、分からぬ乍らトルストイの「復活」などを読んだ。ネフリュードフとかカチューシャというロシア名の世界と共に、自分も少年から青年に成長して行ったと思う。

夏休み明けの学校新聞には、「自転車で一週間かけて四国一周をした」などと出て、先輩が意気を示した。

十一月末の祝日に、自転車で鳥坂を経て琴平の象頭山へ、クラス男子？遠足にも行った。溝手君のカメラで、みんなの笑顔の写真が残っている。

高二では英語の「そりゃいかんがな～」の「きーちゃん」事、藤田喜作先生の四組に入った。「低気圧」とか「イタチ」とか、由来が分からぬまま、先輩から受け継いだ先生たちのアダ名が流行った。

午後の授業の睡魔と闘いながら、百点を貰った漢文の田井信之先生、今も声が聞こえて来そうな、どんぐり眼の世界史の氏家孝成先生、化学室での実験の平井由邦先生と、学問の世界が広がった。

部活では、吉田君や宮本君、真鍋君、溝手君、小西君らとブラスバンド部に所属して、アルトホルンを吹いた。

「士官候補生」や「美中の美」「軽騎兵序曲」など、今もメロディが浮かんで来る。

高松での野球部の応援や、部の第二回四国大会で高知市内を街頭行進し

たりした。私は大学入試の準備のために、二年の秋の文化祭発表後に退部したが、三年時に部顧問に来られたのが、音楽の佐藤陽三先生だ。

佐藤先生の呼びかけで昼休みに、好き者男女が音楽室のピアノを囲んで、「カチューシャの歌」だの「泉のほとり」等々を、「昔アヒル～は、体が大きくて…」と声を張り上げて歌った。先生は後に愛媛大学に移られて、更にはママさんコーラスの指導をされていることを、四十年も経って後、その全国大会の要録で知った。二月末の予餞会ではクラスで「レ・ミゼラブル」の劇に取り組

んだ。大矢根君がジャンバルジャン、藤田先生と薄谷君が警官、私が神父、柴川さんがコゼット役で、男子の観客は皆、可愛いコゼットを見ていたと思う。

同窓会館前でのスタッフとの記念写真が懐かしい。

十七歳と言えば、最高の？恋の年代。私も同級生が好きになり、休みには月曜日が待ち遠しかったものだ。しかし、携帯のアドレスどころか、家にはまだ黒電話もない時代で、片恋を賢治や辰雄、有三、実篤そしてジイド等に「若きウエルテルの悩み」と彷徨いつつ、大学目指して勉強優先の日々を駆けた。

高三では数学の藤岡虎男先生担任の三組で、京阪神の小野君や三好君、塩田さんが居た。しかし女子が六人男子四十八人という、男子には大変な難関？だった。

朝は課外で横山俊男先生に、文法から見る古文の面白さを習った。授業では日本史を、まだ若く兄のような井上喬文先生、英語をクラーク・ゲイブルにどこか似ていなくもない横山嘉之先生に、物理を角顔の近藤？先生に、

受験科目とバランスをとりつつ学んだ。

後から考えると、日本史は昭和史をもっと学びたかったし、物理はもっと力を入れるべきだった。

模擬試験の結果と順位に一喜一憂し、体育大会のフォークダンスにどきどきしながら、夜は十二時半まで机に噛り付く毎日。それでも「暗夜行路」や「こころ」、パールバックの「大地」、「ジャンクリストフ」等を読んだから、心の逃げ場はあったのだろう。

十六歳から十八歳までの三年間を、沢山の仲間と勉強出来るなんて、何て有難いんだろうと思う。

その上で今振り返ると、日本では大学入試のための勉強のみが優先されて、自治活動で民主的社会を背負って行く力や、人生を豊かに過ごしたり、個性を伸ばす、また異性を知る場やチャンスが切り捨てられていると思う。

社会に出て、仕事をし、幸せを掴むには、そんな行動力と豊かな人間性が必要だと思う。後輩には、学校を出て更に学び続けて、成長していける高校生活を送って欲しい。

私は卒業後数年して、縁あって脇尚代さんと結婚した。高校時代に出会いが無くて残念だったが、同級生同士というのは、幸せに＋αが加わると実感した。

最後に、還暦近くなって、合田洋一・厚生君らと再会し、また最近小野喬啓君ともメールを交換するようになり、結果としてこのような立派な会誌に名を出す事にもなり、しみじみ有難く、長生きせねばと思う次第である。

母校の思い出

観一・21回　清水　茂昭

昨年一月、松山市の自宅に「進取」と題する二五〇ページにわたる自伝が送られてきた。郵便物の差出人は、三豊市豊中町岡本在住の織田一八様で、私の観一高在学中の陸上部の指導者であり、三年生の担任（森喬規先生と二人が担任）であった。早速手に取ると、先生が教員生活一〇年目にして高校の部活動を担当することとなった昭和三七年からの観一高での陸上競技活動を記載したコーナーに目が行ってしまいました。昭和三七年は、後に「一八会」（織田一八先生に指導を賜った先輩・後輩諸氏で構成）一期生となるハンマー投げの塩田政義先輩、千五百米障害の宮本征史郎先輩が活躍していた。全国大会（インターハイ）の思い出コーナーは、十五回大会（昭和三七年・別府）からスタートしており二十二回大会（昭和四四年・前橋）の思い出のところには、「初めて大人数の賑やかな選手団となる。清水良徳君の棒高跳びと清水茂昭君の三段跳びが決勝進出となる。良徳君の棒高跳びは、何回もバーを胸に当てながらもバーが落ちなかったこと、茂昭君が物怖じせずに好調なジャンプを見せてくれたこと、選手全員が色々と勉強した大会であった」と記されていた。本文中は、三行の短い表現ではあるが、私は、感激と同時に四〇年前にタイムスリップしてしまったのです。私は、足が折れても、半身不随になってもいい、悔いのない思い切ったジャンプをしたいの一念で助走に入ったこと等、その当時の状況を思い起こしました。そのジャンプが織田先生には物怖じせずと映り前述の表現になったのかと思った次第です。記録は自己ベストの十四米十二センチ、決勝進出者十二名中十位の成績でした。

私の母校の思い出は、「陸上競技活動に明け暮れた三

年間であった」の一言に尽きます。シーズン中は授業開始前の自主トレーニングを欠かさず、放課後は織田先生から与えられる基本メニューに沿って一日も休むことなく練習、帰宅は自転車通学で四〇分かけての道のり、自宅に着けば午後九時を回っている毎日でありました。シーズンオフは、月～金曜日までが母校の北側に位置する財田川沿いに長距離走を行い、その後筋力トレーニングというメニューの繰り返し、そして土曜日は琴弾公園・有明浜での血反吐（へど）を吐くようなサーキットトレーニングが定番となっていた。私は、短距離、走り幅跳び、三段跳びを専門種目として取り組んでいたが、母校のグランドで練習が本格的に出来るようになったのは、二年生の夏以降であったように記憶している。入学してからそれまでは野球部の外野に遠慮しながら走る程度の場所しかなく、陸上部が堂々と練習出来る環境にはなかった。そのため、一年生、二年生が中心となって、石材置場になっていたところを整地し、花崗土、砂を運び入れ、五十米程度のスタートダッシュが出来るコーナー、ハンマー投げのサークル、棒高跳び、走り幅跳びの助走路等を順次作り上げていったのです。今思い起こせば、観一高陸上部の創生期のようなことをやっていたのです。当時のメンバー全員が陸上が好きで好きでたまらず、得意とする種目も幅広く、自分のやりたいことをとことんやり抜くんだという気概と陸上部を強くしていくんだという使命感のようなものが漂っていた。その後、後輩たちが相継ぐ立派な指導者の下で実績を積み重ね、今やインターハイではもちろんのこと、母校がその中心にいて、全国の多くの陸上競技関係者・ファンから「陸上王国三豊」と呼ばれる存在となったことにはこの上ない喜びと、我が郷土にほこりを感じている次第です。

中学校・高校の六年間、部活動として陸上競技が続けられたのは家族の理解、とりわけ母のバックアップがあったからです。祖父を先頭に家族七人全員が揃って夕食を囲むのが当り前の我家において、私の中学校進学と同

時に毎日夕食の食卓に間に合わない長男でもある私のことで、両親は厳格な祖父からよく叱責されていました。「いかなる場合においても常に正直で全力であたれ」が母の変わらぬ教えであった。学校時代の部活動、後の社会人生活においても「手を抜くな、悔いがないよう思い切りやりなさい」が口癖で、後姿を見ては、そっと背中を押してくれた、織田先生評する物怖じせずのジャンプもこのようなことが原動力となって誕生したように今でも思っています。

私のサラリーマン人生も四〇年になろうとしています。振り返って、その歩み方は、現状をぶっ壊し、新しい器を作る、ないしは無から有を創る仕事が大半であったように思います。既にあるレールの上を歩くというより、常に新しいレールを作る側に不思議と居るのである。このような歩み方をしているのも、中学校・高校時代の部活動の大半がグランド作りに費やされたこと、そして選んだ専門種目が最も原始的かつ野蛮と言われていた「走り幅跳び」であったことと無縁ではないように思うのです。そう考えると、私の人生、出発点において母校観一高を中心に陸上競技をやってきて、本当に良かったと思っております。そして、私の職場の回りにはいつも体育会系社員が多くいるのである。陸上競技とのご縁を作って頂き、退部することなく終始没頭させて下さった指導者大野原中学校での茨木猛先生、そして冒頭の織田一八先生にはひたすら感謝するばかりです。

サイモン&ガーファンクル

観一・31回　竹下　和良

私は、一九七〇年代後半の観音寺一高生である（一九八〇年卒）。理数科で三年間通してお世話になったクラス担任の先生は大林邦守先生。「邦を守ると命名されたが自分は戦うことなく日本は太平洋戦争終戦を迎えた」と少しユーモアを交えて、自己紹介されたのを今でも記憶している。私たちは戦後世代というよりは高度成長期の生まれ育ち、バブル景気の社会人世代だ。身の回りにいろいろな格好いい製品が増えて、次々と欲しいものが現れて、手に入れることで喜びを感じることができた世代。歴史観では、祖父母や親から戦時中の話を絵空事のように現実感なく聞いた世代でもある。

中学から高校時代、ロックやフォークなどの洋楽に興味があった。ギターを弾いたりすることに多くの男子生徒が熱中した。理数科のクラスメートでロックバンドＳＭＣ（理科のＳ、数学のＭ、組のＣでＳＭＣ）を結成した。Ｋ君リードギター、Ｆ君ドラムス、Ｉ君リードボーカル、もう一人のＫ君時々ギター担当。私はベースギターを担当した。ビートルズやキッスなどの曲を真似して、軽音楽部の発表会（コンサート）で演奏したり、Ｆ君やＫ君の家に集まって大音量で練習させてもらったりした。顧みれば、観一の生徒たちは地域の人々や父兄からとても暖かく見守られていたと、今更ながら感謝の気持ちが湧いてくる。多少の羽目を外したことがあったような気がするが（いや、あったと思う）。

今年（二〇〇九年）七月十三日に、サイモン&ガーファンクルの大阪公演がある。少し迷って、チケットを予約した。妻と行くつもりで二枚。ところが、高校三年になる長男が、やはり洋楽好きで、特にアメリカの曲や文化に興味があり、一緒に行くことになった。息子が生ま

れる遙か前に既に解散してしまったグループの音楽に興味を示すとは予想しなかった。

学校（観一）の近くに「オオサカヤ」という楽器とレコードの店があり、中学生の頃から小遣を貯めてはレコードを買うのが楽しみだった。三〇年以上前に購入したサイモン&ガーファンクルのＬＰレコードを探し出して再生してみた。「アメリカ」という曲があるが、その中にいくつかのアメリカの町が出てくる。歌詞の主人公がグレイハウンド（バス）に乗る町、ピッツバーグで私は家族と二年間暮らした（一九九五～九七年）。長男は三歳、次男は一歳になったばかりだった。二人の息子は地元のプレスクール（幼稚園兼保育園）で二年間を過ごした。そこには、今の日本には失われてしまったが、子どもたちを大人たちが暖かく見守るという環境があった。息子たちにしてみれば、親が話す言葉と全く違う英語しか話さない幼稚園の先生と過ごす時間は相当なストレスではなかったかと思うが、肌の色や言葉の壁があるようには感じられなかった。親の心配をよそに当人たちは殆ど違和感なくクラスに溶け込んでいた。緊張していたのは親だけかも知れないし、事実私たち大人は、アメリカにはまだまだ人種差別の壁があると感じる事はあったのだが。私が観一の生徒時代に受けた周囲の大人たちからの恩情に似た感情を異国の幼稚園で息子たちは感じていたのかも知れない。特に長男のアメリカ好きは此処に根源があるのかもしれない。

今、私は、生まれ育った母校のある香川県を離れて滋賀県で生きている。滋賀県民としての期間の方が既に長くさえなった。長男は大津市内の県立高校に通っている。高校の周囲に出来た、生徒たちの通学路にもあたるが、新興住宅地の住民たちの高校生たちに向ける目は冷たく厳しいらしい。個人主義と不寛容の時代といわれるが、今はそういう時代なのかも知れない。観音寺一高生徒を見守る環境はどうだろうか。私が過ごした観一での環境と同じであることを望むが。

母校である観音寺第一高等学校の想い出は、お世話になった先生、同級生、先輩・後輩だけでなく地域の人たちが一塊となっている。具体的に地域の人たちの顔が思い出される訳ではないのに、一塊となって心地よい想い出となっている。期せずして、私たち親子間のコミュニケーションに一役買うことになったサイモン&ガーファンクルの曲「アメリカ」の主人公である若者が享受していた大人からの寛容と恩情（人生の先輩として自分たちの未来を託すべき子どもたちへ抱いた期待感）、純粋で生意気な大人社会に対する反発、そして自分探しと将来への夢や不安が、私の観一での想い出そのものであると思う。

（写真説明：二〇〇四年再会時の米国ピッツバーグ大学医学部教授と私及び妻・息子たちとのスナップ、当時の幼稚園の先生と息子たち及び妻とのスナップ）

気の医学　その七

観一・13回　齊藤　良夫

病気の原因を病因といいますが、これについて、現代医学と東洋医学とをからめて説明したいと思います。教科書的にいえば、病因は内因と外因とにわかれます。内因とは遺伝的なもの、外因とは後天的なものに関連します。俗にいえば氏か育ちか、生みの親か育ての親かということです。どちらも大切なポイントです。病気になった場合に主となる原因を主因といい、下地をつくり従となる方を誘因といいます。近代医学は外因の方がわかりやすいので専ら、外因の発見に力を注ぎました。例えば赤痢菌（赤痢は戦後まもなく観音寺にも流行し抗生物質がなかったので大勢の人が亡くなりました。小生も隔離病棟に収容されました）・結核菌などよく知られています。インフルエンザも外因で、観音寺市八幡町の阪大微研で鶏卵より大量のワクチンの作られているのは御存知の通りです。寄生虫も外因で小学校では毎年全員が海人草を飲まされました。私は平気で飲みましたが、女子は飲めずに泣き出す人が多かったのをおぼえています。栄養の過不足も外因で戦後の食料難で私はピアフラの子供のようにお腹がはれていたそうです。気温、湿度も外因で小学校時代は冬になるといつも耳・指・趾にしもやけ・赤ぎれになっていました。これは栄養状態が関連します。青バナたれ（副鼻腔炎）も多く、耳鼻科医院に通っていました。いつのまにか少なくなり、かわりにアトピーがふえています。又、昔は盲腸（虫垂炎）が多かったのに、今ではあまり、聞きません。これも抗生物質のおかげと考えられます。外因が主因となる病気はそのメカニズムが簡単なので、上下水道の完備、空調、公害規制等により多大の成果をきたしています。にもかかわらず、病人が減らず医者不足になり、病院の閉鎖、医師の過労死が

聞かれます。一体どうなっているのか。……

いろいろ原因はありますが、これまであまり重要視されなかった、内因が大きな位置をしめるようになったと考えます。

例えば人類の歴史は飢餓との戦いでありましたが、今や日本では飽食であり高コレステロール・肥満が問題になっています。栄養過剰に対してどう対応するかということは、遺伝子にもその対応がありません。アメリカでは食べれないようにする為、胃を切除するとか、体脂肪を抜きとるといった、野蛮な治療が行われています。

だとするとどうすればいいのでしょうか？

専門家まかせはやめて考えてみましょう。

さて中国の明時代に王陽明という思想家がいました。この人の言葉に『山中の賊を破るは易く・心中の賊を破るは難し』とあります。病因にあてはめると山中の賊は外因で心中の賊は内因です。内因の方がずっと手ごわいのです。内因は遺伝子なものと性格的なものにわかれます。遺伝子的なものが体質をつくるのはよく知られています。最近ではいろんな病気の遺伝子が分子生物学の発展で知られるようになりました。例えば高血圧、高コレステロール、高脂血圧、糖尿病、動脈硬化、癌などです。これらの遺伝子をもっていてもすぐ発病するとは限りません。遺伝子は大まかな設計図であり食事・ストレス・睡眠などの外因により発病が促進されたり遅らすことができます。勿論、先天病では遺伝子の影響を大きく受けており、遺伝子治療もはじまっており、大きな今後の発展がみこめます。

もう一つの内因は性格です。性格は先天的素因・家庭・学校・職場でいろんな人の影響を受けて変わっていきますが一旦できた性格は変わりにくいものです。高齢者で『私の性格は焼かんと治らない』とうそぶく人もいる位です。でも人はいろんな挫折・失敗・成功をうけて変わっていきます。大体、自己中心的であったり自己否定的

であると、人間関係が家庭的・社会的にもうまくいかず、ダメになっていくのです。今まで自分がもっていた性格つまりソフトではうまくいかず大改定をせざるをえなくなります。仏教的にいえば回心して真人間になるのです。でもどうしてこうなったか。それは気が変るからです。気が高まると、判断・理解・実行・持続の力がついていい方向に変ります。これぞ第２の誕生です。すると自然に①食事は腹八分目②頭寒足熱③腹式呼吸④楽天的考え（すべてうまくいくと悲観しなくなる）が自然とできるようになる。詳しくは既刊に連載。

座折もせずに気を高めるには、気楽が板についている指導者に手ほどきをしてもらうのが近道です（イカサマ気功師もいるので御注意）。

さて、体は年齢と共に衰えますし、どんな事故、病気にかかるかわかりません。最後には気持ちの有様が問われます。英語で人間のことをＨｕｍａｎ ｂｅｉｎｇというのもこのことを示しています。

人の一生は苦楽を通して菩薩になる修行をしていると思います。最後まで落後しないでご一緒にゴールできたらと楽しみにしています。

支部ホームページの報告

観一・11回　小野　喬啓

ホームページを開設して以来、まる一年が経過しました。そこでこの一年間の運用状況について報告します。

昨年五月十四日に一期工事を終えて基本的なページだけで立ち上げ、その後八月に行った二期工事で、閲覧者との情報のやり取りができる、掲示板やフォームメールのページを追加し、予定していた全ページが完成しました。そして九月に配布されました同窓会誌「巨鼇」十二号で、皆さんにその内容を紹介させて頂きました。このホームページのコンセプトについては、同窓会京阪神支部の活動を同窓生の皆さんにインターネットを通じて広くお知らせし、関心を持って頂くこと、青春時代に共に学び過ごした母校の写真集を掲載して、母校への想いを持って頂くこと、同窓生相互の親睦・交流に利用して頂くことを目標にしてきました。一年間の運用状況を、それぞれの項目について報告いたします。

一、閲覧回数

当ホームページの閲覧回数はWeb上に公開して以来、一年余りで約四八〇〇回の閲覧アクセスがありました。月換算では平均約三百六十回、日換算では平均十二回です。また、Web検索で「観一高」で検索をかけると上位の検索結果として表示されるようになりました。例えば代表的な検索サイトのYahooやGoogle検索でも、検索すると始めの方に表示されています。これらの順位は検索エンジンが自動的に、検索語句で閲覧回数の多い順番から表示されていることから、「観一高」で検索される方には、すばやく辿り着き、当支部のホームページをご覧頂けるようになっています。

二、ホームページの更新

昨年九月から今年五月末までの間、幹事会や役員会、総会の報告などで七回のアップデート（更新）をしてきました。その中での最も大きな更新は、総会終了後の更新です。総会の様子をできるだけ詳しく報告するため、カメラマンが撮影した二百枚余りの写真を掲載しました。新しい写真掲載方法として、挨拶に立った来賓関係者の写真、出し物の乙女文楽の写真、舞台での合唱写真などは、動的な表示としたスライド形式で掲載しました。その他、前年度のトップ・ページを過年度のページとして保存しました。新しいページとしては「更新情報」ページを追加し、閲覧者には更新内容を分かり易くしています。その他、役員会で提案のあった、同窓会員の「医者と弁護士」の情報をＰＤＦファイルでトップページに掲載しました。

三、掲示板のページ

このページは同窓会員に投稿して頂くページです。一年間の投稿件数は十一件でした。主な投稿としては、観一・八回卒の皆さんの写真付同窓会報告（母校訪問と琴弾荘での同窓会）、故郷の秋祭り写真集の投稿、十二回卒の皆さんの雅楽多展の作品アルバム集、同窓生の出版書籍の紹介、趣味の山登り投稿などです。同窓の皆さんには趣味や旅行の写真、年度別同窓会のお知らせや報告など、分野は問いませんので、積極的な投稿を期待しています。特に、各卒業年度で開催した同窓会の写真集の掲載は、ご連絡を頂ければ掲載のお手伝いをさせて頂きます。また、投稿に対する返信メール機能もありますので、閲覧感想なども返信して頂き、それをきっかけにして親睦・交流のチャンスを作って下さい。そして、今後このページの内容を蓄えて、閲覧者にとって興味が沸くページにしたいと思っています。

四、当番幹事のページ

このページもインターネット上からどなたでも投稿と返信が出来るページです。ページの目的は、当年度の幹事さんと同窓会員の意見交換ができるページとしております。例えば、総会時のメインイベント・出し物などを同窓会員に事前提案することも出来ます。そして、それに対するご意見の返信を出して頂くこともできます。また、年に一度同窓会員が集う総会に対する同窓会員からのご意見なども、このページを通して頂く事が出来ます。その他、主たる活用方法としては、当番幹事の方が総会準備状況のお知らせや、同窓会総会への参加呼びかけのページとして利用して頂ければと思っています。当番幹事の皆さん、同窓会員の皆さん、このページも是非ご活用下さい。

五、お問い合わせのページ

このページは同窓会京阪神支部への「お問い合わせ」ページとして準備しました。フォームメールの形式を取っていますので、入力方法は簡単です。指定の項目に入力して頂き、ページ下部にある「送信」ボタンをクリックすると、入力した内容の確認画面が表示されます。そこで内容を確認後、再度ページ下部にある「送信」ボタンをクリックすると自動的に送信されます。すると瞬時にして「お問い合わせを頂きありがとうございます。下記の内容にて承りました」との返信メールが帰ってきます。大変分かりやすいメール形式となっていますので、同窓会員の皆さん連絡用にご利用下さい。過去一年間の実績は十件ほどの問い合わせがありました。そのうち一件は、若い同窓生からの入会申し込みでした。残りの九件はホームページに対するご助言などを頂きました。若い同窓生からの問い合わせが少なかったのは、少し寂しく感じております。

六、同窓の医者と弁護士一覧表の掲載

同窓会に参加される方は、厚労省用語を借りると、後期高齢者世代（長寿者世代）及びその予備軍の世代が大勢参加されます。このような世代の方々は、医者と弁護士の話題には大変興味があるようです。四月の役員会で観一・三回卒のMさんから国立循環器病センター（厚生労働省直轄病院で、循環器を専門とする日本最先端の医療機関）に入院、治療を受けた時の話が披露されました。その話によると担当医で名医と評判の高い心臓血管内科部長が、観一高の後輩であったことから、先輩に当たるMさんは大変手厚い対応を頂き感激したそうです。また、他の役員からも京阪神地区で活躍している同窓の医者も沢山いて、同窓の医者と弁護士は高齢者には大切な情報である。この際、同窓の医者と弁護士の一覧表を作っては、との提案がありました。そこで早速、同窓会京阪神支部に登録されている三千余名の同窓名簿の中から、医者と弁護士で活躍されている同窓生を抽出、名簿一覧表にしてホームページに掲載しました。

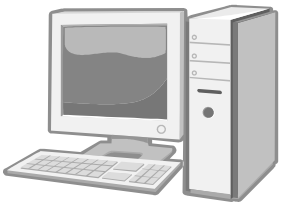
関心のある方は是非ご活用下さい。

七、経費について

ホームページ立ち上げ時には一時経費が発生しましたが、２年目以降の運用経費については、年間レンタルサーバー経費（年間二三九四〇円、月額換算一九五五円）とWeb上の名前・ドメイン名使用料（年間一二六〇円）が必要となります。レンタルサーバーについては、将来のデータ蓄積量を考えて、大容量（10GB）のサーバーを契約しています。

ホームページを立ち上げて以来これまで、初心者にとっては暗中模索の取り組みでしたが、トラブルも無く何とか一年間の実績を積む事が出来ました。これも、貴重なご助言を頂きました皆様の、ご協力の賜物と感謝しております。

これからも当支部ホームページが出来るだけ沢山の方々にご覧頂けるような、魅力あるものに工夫を凝らして行きたいと思っておりますので、皆様の変わらぬご支援を賜りますようお願いを申し上げて、報告とさせて頂きます。



岩倉 寿画伯展

観一・4回　細川　利久

なんば高島屋で岩倉寿先生の個展を美術部創設百年記念の一環として開催されました。

岩倉先生は一九三六年に山本に生れ、その後京都市立美術大学日本画専攻科を修了、晨鳥社に入塾故山口華楊先生に師事されました。日展を中心に作品の発表を続け、一九九六年に日展内閣総理大臣賞、二〇〇三年日本藝術院賞を受賞、二〇〇六年に日本藝術院会員に就任しました。身近かな自然や静物を観照し、目に見える色や形を越えた本質を捉えて制作し、作品は穏やかな光に包まれ深く心に沁みる作品となり高い評価を得ています。先生は巨鼇二号以来からずっと表紙絵を飾って下さっています。今回の個展を鑑賞させて頂きその作品を見て是非同

窓の方々にお伝えしたく写真を先生の許しを得て写させて頂きました

六月二十八日

待春糸桜（150号）

夏の朝（150号）

岩倉　寿画伯の個展を見て

観一・6回　佐藤　益子

『巨鼇』の表紙絵を描いて下さっている岩倉寿氏の個展が六月二十四日から三十日まで大阪なんば高島屋で開催されました。

初めての個展で、京都、東京、に続いて大阪でも展観されますと東京支部の村上重明さんが教えてくれました。

早速、六回卒の人達に声をかけ会場に足を運びました。

会場には二十号から百五十号の大作が一堂に展示されていました。岩倉氏独特のモノトーンに近い色彩は穏やかな光に包まれて幽玄の世界のようで深く心に沁みました。岩倉氏とお話ができました。卒業以来はじめておあいしたのですが、優しい面立ちは昔のままでした。

大画伯ですから次々と来賓の方がお見えになります。邪魔にならないようにそっと退出してきました。

「岩倉 寿画伯展」鑑賞記、のつもりが…

観一・16回　大西　和明

幸運にも岩倉寿画伯（観一・六回）とお話する機会を得ました。

高島屋ギャラリーで、あまり長い時間、作品の前で動かないで見ている私に、不思議に思ったのか、係りの女性が、「先生がいらっしゃっていますよ」、と声を掛けて下さり取り次いでくれました。お会いできることも、ましてやお話できるなんて予想もしていなかったので、私は舞上がり、しどろもどろになりながら失礼な質問をさせてもらいましたが、先生は忍耐して応じてくださいました。

黄色をつかった作品だったと思いますが、『木のある空間』（六十号）を指して、「私は、暖色系がある作品が好きですが、先生の(色の)基調はこんなものですか？」と（ほとんどの出展作品が白っぽかったので）、そう質問しました。先生は少しおいて、「(暖色)を気にしたことはありません。こころに想ったことを描きますので」

「巨鼈」の表紙絵(『パンジー』とか『いちじく』とか)でしか先生の作品を知りませんのに、知ったかぶりの質問です。そんな出だしでした。

先生は、ゆっくりと、言葉を噛みしめるように、こんなことを話してくださいました。

「(作品は)生きてゆく道の、場所です」

「これ(『待春糸桜』百五十号)は桜ですが、私は満開の桜は描きません」

「想いは向こうへ遠ざかっていくことがあります。だから、(完成はありません)描き加えたいことがあります。」

「だけども、節目(締め切りがあればそれ)が大切です。あと三日間猶予が突然出来たとしたら精神の糸は緩んで、元へ戻るのには時間がかなり必要です。(数日では)戻り

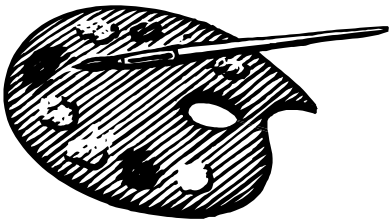
ません」

「絵を描くことは、祈りです」

出展作品は全部で十七点。百五十号から二十号まで。ほとんどの作品が(色にこだわるようですが)、白でもなく灰色でもなく、ブルーでもなく。白濁のようで濁らない。深い(爽やかな)透明感。書かれた花や木や池の向こう側から、何かが私に語りかけてきていそうな感じがします。私が「巨鼇」表紙からの勝手な思い込みは見事に裏切られました。

絵描きさんの格闘、聖別された画伯の生き方を衝撃をもって知らされた時間でした。

先生には聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声で「同窓先輩を誇りに思います」と挨拶をして会場を辞しました。



連載特集

観音寺と琴弾八幡宮の情報の話

観一・8回　脇　剛司

一、はじめに

「観一高の沿革史を見とったら『昭和十三年一月六日琴弾神社に正式参拝の祈願した』という記録があったで……。琴弾八幡宮と違うんか？」

「いや。それでえんやで。明治初年から昭和二十年までの社名は『琴弾神社』で、その時期以外は『琴弾八幡宮』というとったんやで」

「ほうか。なんでそんなんやったんかな」

二、その時代背景

「八幡さん」の場合、草創の時から神仏習合で法相宗の道場のあった山（今の琴弾山）の麓の梅掖（うめわき）の浜に八幡大菩薩を乗せた船がやってきて、舟とお琴を山に引き上げて「琴弾八幡宮」として祀り、寺は神宮寺宝光院と名乗り、後に寺号が変わり、観音寺・神恵院となり、明治初年の神仏判然令（神仏分離令）までずっと琴弾八幡宮の社僧として神恵院がお守りしていたので宮司はいなかった。この形態はほかの神社もおなじであった。観音寺市・三豊市の八幡さんは吉岡八幡・境八幡・豊浜八幡・池宮八幡・船越八幡など、八幡さん以外では皇太子大明神・須賀神社・千尋神社・三嶋神社などでは社僧を観音寺（神恵院）・地蔵院（萩原寺）など真言宗のお寺が勤め、天台・真宗も一カ寺づつあった。神社の総官は何社かを兼任している記録も残されている（「西讃府史」）。

一八六八年（慶応四）三月十七日、神祇事務局は、諸国神社に仕える僧形（そうぎょう）の別当（べっとう）・社僧に復飾（還俗（げんぞく））を命じた。

さらに、三月二十八日、太政官（だいじょうかん）は神仏分離令（神仏判然令）を発して、

(1)　権現（ごんげん）などの仏語を神号とする神社の調査

⑵　仏像を神体とすることの禁止、を全国に布告した。

これらの布告に従い、「金刀比羅大権現」は「金刀比羅宮」に、「琴弾八幡宮」では神恵院の社僧は還俗となり、本地仏の阿弥陀如来は観音寺境内の西金堂に移され神恵院は観音寺と同居する形となり、社名は「琴弾神社」に改称されたが、昭和二十年に「琴弾八幡宮」と復称した。

第一図、琴弾神社本殿大正末

昭和九年鉄道省発行の「日本案内記」（中国・四国編）でも、「琴弾神社（琴弾八幡宮）」と案内されている。第一図の写真の扁額は「琴弾神社」とある。

したがって前述の「琴弾神社に正式参拝……」は歴史的にみて正しい表現であり、三中の先輩たちは琴弾神社と教えられ、「巨鼇」に投稿されている文章にもいまだに散見される。

三、観音寺・神恵院・琴弾八幡宮の縁起について

それでは琴弾八幡宮や観音寺は草創にはどんな物語があるのだろうか。

次に示すような縁起書から伝わっている。

「讃岐国七宝山八幡琴引宮縁起　三所大菩薩御垂迹事
　　参議左近近衛中将　中納言藤原實秋書
　　観音寺市指定有形文化財　神恵院蔵」

これは「右八幡大菩薩尋當山垂迹（すいじゃく）之本誓者……」から始まる巻物で、いわゆる行成風の書体で、作成の時期は応永廿三年（一四一六）で、将軍足利義持の署名と花押がある。

現代語で要旨を表現すると

「八幡大菩薩が当山に垂迹した本誓は偏に百皇鎮護異国降伏のためであり、また勧請（かんじょう）したのではなく垂迹された

のである。文武天皇の御宇（ぎょう）大宝三年大菩薩は自ら鎮西宇佐の社壇を出られ当山の八葉の宝嶺に光を留められた。その影向の形は普通の瑞と異なり、三箇日夜西方の空自然と鳴動し黒雲が覆い隠し日月の光も見えず暗夜のごとき処、霧のごとく月影が巻き、日月の光がしばらくの間輝いた。万人は何か奇特と思い山頂より海岸にでてみると西国の方、九州の空に白雲が虹のように聳え当山に架かってきた。この白雲の下、巨海の上当山の麓梅掖の海辺に一艘の船があり、船の中から琴の音が聞こえてきた。その音は高妙で嶺松に通っていた。このとき当山に止住する上人がいた。名を日証上人という。奇を問う。すると御託宣が「汝は釈迦の再誕なり。我は八幡大菩薩なり。帝都に向うため宇佐より来た。この国を仏法流布の霊地にすべくまた、朝家を守護し異国を罰するものなり」とあったが、上人は「生死迷乱の凡夫なので、この言葉を信じがたい」というと、権化の神明を降誕させその瑞を示した。それは、一夜のうちに海水が変化し、十余町が緑竹の林となりさらに五更の未明（明け方）には砂浜と化し、数十歩の蒼松の林となった。第二夜はまた海上の船中に琴を弾くひびきがあり、その音は高く方々に聞こえ美しい音であった。この音を聞くものは悉く無上の道心を起こした。これは和光利物の方便・同塵済度の素懐（以前からの思い）であった。これを見た上人は奇瑞の霊験と驚き、随喜の笑みを含み渇仰の掌を合わせた。早速、四州の山寺に触れて、一生不犯の十二、三歳の児童など数百人を集め当山南の竹谷よりかの船を嶺の上に引き上げ御躰にかの御琴を副え御宝殿に安置した。これを琴引別宮と号した。

このあと、御乗船は神功皇后が三韓征伐の折に自然に出現したと伝えられる兵船であること、八幡大菩薩の御示顕のことなどが述べられ、琴弾山の宝殿には三所大菩薩が祀られ自ら八正道の徳を修められご示現された神々で本地仏も解説されている。

中御前　応神天皇　本地　阿弥陀仏

西御前　玉依姫尊　本地　大勢至菩薩
東御前　神功皇后　本地　観世音菩薩

これらを三所本地釈迦三尊とも云う」

さらに、若宮権現、武内大明神、住吉大明神などの摂社の神々、七十五の末社の神々の解説があり、終段は

「そもそも、当地は王城より坤（南西）の方角に垂迹されたのは朝家擁護のため、異敵降伏のためである。このため社内の神殿仏閣の殆どが未申（坤―南西）に向いていて海上を守り給うものである。このことは異国降伏の御本誓により草創されたもので、誠に厳しい御本誓を掲げられたものである。

大宝三年癸卯三月二十一日のご託宣により始めて堂社宝殿を建立され長く鎮護国家のための霊場なのである。

征夷大将軍　源朝臣（足利義持の花押）

応永廿三之暦仲春下澣染疎毫詰　権中納言藤原實秋」

この縁起書（市指定有形文化財）がしたためられたのは、物語があった大宝三年（七〇三）より七一三年後の応永二十三年（一四一六）で、先の応永十二年（一四〇五）には七宝山観音寺の応永伝が編纂された。この時代の住職は四十五世の太政大僧正道尊で征夷大将軍足利尊氏の長男で足利家と神恵院は良き関係を持ち栄えた時期でした。明応二年（一四九二）には、宮廷絵師土佐光信を招いて絵縁起（重要文化財）が描かれている。これは縁起書と一対のもので、縁起書の内容が描かれている。これらの縁起の内容は草創以来約七百年の間に伝承されていた事象が集大成されたものと考えられる。この間に他所に伝えられたものは確認されていない。したがってこれらの縁起が琴弾八幡宮・観音寺の歴史の出発点のものであり、のちの紹介物語は字句の変更・加筆または省略されたものであると推測される。

三、縁起書以降の紹介文献について

この縁起書の二百七十年後に、次のような案内書が発刊された。

・四国遍路道指南―貞享四年（一六八七）
　高野聖だったと云われている真念の著。この本によって札所番号と札所寺院名が決まったといわれている。

・四国遍礼霊場記―元禄二年（一六八九）
　真念が巡拝中まとめた記録と、同行した洪卓の画いた略図をもとにして、高野山宝光院の住職寂本が編集した。

・四国遍礼功徳記―元禄三年（一六九〇）　真念著

・金比羅参詣名所図會―弘化二年（一八四七）暁鐘成輯

・西讃府史京極家編―安政五年（一八五八）丸亀藩の記録集。

これらの文献で記述の異なる部分は、第一表のようになる。

第一表、各資料の内容の比較表

文献／項目	七番縁國八宮岐山引讃宝琴起	遍場国霊記四礼	参羅図比名所詣金會	西讃府史
西の空	西国の方、九州の空に	西方の空より	西方の空中より	—
船が…	一艘の船	一艘の怪船	一艘の怪船	形状の異なった一艘の船
船の主は	八幡大菩薩	八幡大菩薩	八幡大菩薩	誉田尊
情報の伝達	四州の山寺に触れて	郡郷にとなへ	郡郷に触れて	—
船を引きあげる者は	一生不犯十二、三歳の童児	十二三歳の童児、なきの欲染もの	十二、三歳の童児等亡き染の欲者	若者
社の名前	琴引別宮	琴弾別宮	琴弾別宮	琴弾の名を付け
次代の寺名	—	海は観音寺と名付け	寺院を営み神宮寺とし	七宝山観音寺と称し天平宝字7年(763)日証が開基

項目から見てみると

・「西国の方九州の空に」→「西方の空（中）より」

・「一艘の船が」→「一艘の怪船」

・「四州の山寺に触れて」→「群郷にとなえ（触れて）」
・「一生不犯の十二、三の児童」→「十二三歳の児童（等）欲染なきもの

と縁起書の内容は字句の違いはあれ、ほぼ同じ表現で。「四国遍礼霊場記」に引き継がれ、これを種本として「金比羅参詣図會」が編纂されたものと推測できる。

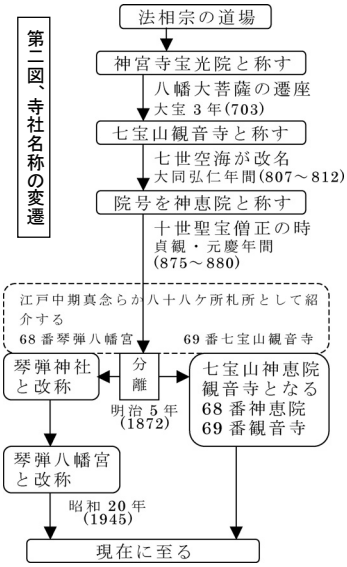
「西讃府史」を除きしたがってこれらの記述の正にすべきは「讃岐國七宝山八幡琴引宮縁起」である。

また、寺号院号については八幡大菩薩の垂迹より弘化二年（一八四五）までの寺歴をまとめた「弘化録」の冒頭の紹介文に次のような記載がある。

「山号寺号院号畧伝

開山上人ノ時神宮寺宝光院ト名ツケ相ヒ続テ法相宗ノ道場ナリ、七世高祖大師中興ノ時七宝山ト号シ寺号ヲ改テ観音寺トス。十世聖宝尊師ノ時院号ヲ改テ神恵院トス。四州大坊トハ上代ヨリノ号ナリ（中略）古来称して四代の帝王勅願日種再誕の霊場、大師御妊胎精舎一本寺七宝山四州大坊神恵院観音寺と云う……」とある。

しかしここでは琴弾別宮（琴弾八幡宮）の紹介は見当たらないが、大同二年（八〇七）の項では「三月廿一日本社再興成就す。上遷宮臨時祭礼す。導師弘法大師」の記述が見られる。開山時の寺名から現在までの推移は第二図のようになる



以上が明治以前の情報であるが、第一表の「西讃府史」での「次代の寺名」では「七宝山観音寺と称し天平宝字

七年（七六三）日証が開基」とあるが、「弘化録」によれば日証上人は和銅六年（七一二）に入定し、文化九年（一八一二）正月十七日に千百回忌法会修行が行われた記録があり、「金比羅参詣図會」でも「宿居の芝の傍らに千百回忌倍増威光塔石の卒塔婆」との記載あり、現在は観音寺境内にある。日証上人はすでに入定しているので比較データとしては除外した方がよいと思われる。

従って「西讃府史」記述を除いてほぼ同様の内容が伝え続けられているものと判断する。

しかし、現代の皆さんがこれらの文献を紐解くのは非常に難しい作業であり、それよりも安直にパソコンからインターネットで情報を入手するであろう。

それではどんな内容の情報が手に入るのか、約三十件のH／Pを開いてみて内容を分析した。

四、氾濫するネット情報

現代では、これらの原典を情報源にして、自治体、寺社、八十八箇所、旅行案内、個人のブログなど「七宝山観音寺」だけでも三万件のウエブ検索ができるくらいにネット上で情報が氾濫しているのである。この中から三十件くらいを抽出しその記載内容を調べてみた。

尚、末尾の枠内に適切と思われる字句を入れた。

① 時代

大半が「大宝三年」または「大宝三年三月」で、「大鵬」という入力ミスもある。また年代を書かず「約千年前」・「千三百年ほど前」や「文武天皇のころ」と時代がわかりにくいのもある。

大宝三年三月（七〇三）

② だれが

ほぼ「日証上人」であるが、「止住する上人」・「上人」や記載なしもある。

当山で修行する日証上人

③　どんな時に

「西の空が俄かに鳴動し、黒雲天を覆って日月光を失うこと三ヶ日夜」・「山で修行している時」があるが、表現のないものも多い。

三昼夜にわたり西方の空が鳴動して黒雲が日月の光を覆い隠し、やがて海上が光輝き西方の空から虹のような雲が聳え当山に掛かってきた

④　何を

「一艘の船」・「怪船」・「浜に小舟が浮かんで」・「神船が漂着」・「船が停船」・「海の彼方より神の船が」など

梅掖の浜に一艘の船が浮かんでいて

⑤　琴の音

「神秘的な琴の音」・「翁が乗って琴を弾いていた」など

中から妙なる琴の音が聞こえてきた

⑥　船の主は

「八幡大菩薩」・「八幡大明神」・「宇佐八幡のお告げが」

注釈：「八幡大菩薩」縁起書を踏襲したと思われるが、宇佐八幡宮が大菩薩号を下賜されたのは天応元年（七八一）で、また天平勝宝元年（七四九）に「八幡大神託宣して京（奈良）に向う」とあり、縁起書を尊重したいが、大宝三年（七〇三）の神号は八幡大神が素直と思う。

我は宇佐の八幡大神

⑦　神の証は

「海だった所が竹林と化し夜明け前には砂浜が松林に」・「一夜で海を竹林と松林に変えて見せた」。記載の無いのも二十件くらいある。

その夜の内に海水十余町ほどが竹林となり、夜明けまえには砂浜十歩余が松林となった

⑧　船の引き上げ

「一生不犯の童男童女を数百人」・「里人と一緒に琴弾山頂に」・「近くの人を集め」・「村人と」など。

郡郷に触れて欲染のない十二、三歳の児童数百人集め

⑨　寺の名前

「寺院神宮寺となり宝光院と」・「琴弾八幡宮と称え」・「琴弾八幡宮と名付け神宮寺も創建」・「これが琴弾八幡宮の創祠で同時に神宮寺として建立したのが六十八番七宝山観音寺」・「当社の神宮寺として後に第六十八番札所観音寺となる神宮寺」・「社殿を造って琴弾八幡宮を祀った。上人は八幡宮の神官（入力ミス？）寺として弥勒帰敬寺と称する寺を創立した。この寺が神恵院観音寺の前身」・「これが琴弾八幡宮で神恵院は琴弾八幡宮の別当寺として創建された」

山に社を立てて琴弾別宮とし法相宗の道場は神宮寺として宝光院と名付けた

⑩　次代の寺社の名前

「大同二年空海が第７代住職をしていたとき観音寺と改めた。神恵院は日証上人が琴弾八幡宮を奉祀したとき本地仏として阿弥陀仏を祀った」・「弘法大師が観音寺と寺号を改めた」・「弘法大師も訪れ琴弾山神恵院と名付け６８番札所に定めた」・「八〇六年弘法大師が第７代住職のとき観音寺と改め琴弾宮を六十八番、観音寺を六十九番とした」

注釈、「寺の名前」・「次代の寺社の名前」について多くの表現が時間軸を一緒くたにして書かれているので線引き箇所の説明を記す。

①はこの時代は法相宗の道場宝光院でまだ札所はない。

②弥勒帰敬寺は「四国遍礼霊場記」の現代語訳にあるが、他にはこの寺名はない。その真偽は解らない。

③神恵院は観音寺十世聖宝僧正（九世紀後半）が名付けた。

④本地仏阿弥陀仏を祀ったのは弘法大師である。

⑤弘法大師は寺名を観音寺としたが、札所の記録は見られない。神恵院が六十八番札所になるのは明治の神仏分離令以降である。それまでは琴弾八幡宮が札所だった。

⑥弘法大師のゆかりの寺は四国各所にあるが札所番号が付けられたのは江戸中期ころといわれている。

注、⑤、⑥の札所については、四国霊場会本部の発行の「先達必携」では「弘仁六年（八一五）四国八十八ケ所霊場開創さる」とあり、四国八十八ケ所札所はこの時代から存在するのが統一見解とされている。

一方前述の真念著・寂本編の「四国遍礼霊場記」で始めて番号が付けられた説もあり、一般の人たちにはどちらを信じてよいのか迷うところである。札所寺の縁起を見ても南北朝や戦国時代（とくに長會我部時代）に戦火に見舞われ焼失荒廃したのちに再興されたという話が伝わっている。仏教界では尊重する八十八という数字の寺院を設定し僧籍の人だけでの八十八カ所札所を持っていたかも知れずそれを民衆のものにもしたのが真念だったのだろうか。

しかし、前述の四国霊場会本部のH／Pの札所の縁起では霊山寺・大興寺・神恵院・観音寺など、十三札所については「弘法大師が札所定めた」とあるが、他の札所はその説明がない。

七世住職空海（弘法大師）のとき七宝山と号し、寺号を観音寺とした。その後十世聖宝僧正のとき院号を改め神恵院とした。

江戸中期頃より琴弾八幡宮は六十八番札所、七宝山観音寺は六十九番札所として民衆の信仰を得た。

明治の神仏分離令により琴弾八幡宮と神恵院は分離され、神恵院と本地仏阿弥陀如来像は観音寺に移され一寺二札所となった。琴弾八幡宮は琴弾神社と改称されたが、戦後「琴弾八幡宮」に復称した。

縁起を纏めると次のようになろう。

大宝三年三月（七〇三）三昼夜にわたり西方の空が鳴動して黒雲が日月の光を覆い隠し、やがて海上が光輝き西方の空から虹のような白雲が聳え当山に掛かってきて

その白雲の下、梅掖の浜に一艘の船が浮かんでいた。中から妙なる琴の音が聞こえてきたので当山で修行する日証上人が近づいて尋ねてみると、「我は宇佐の八幡大神なり。都に行かんとす。この地が霊地なので立寄った。」との返事があった。上人は信じられずその証を求めると、その夜の内に海水十余町ほどが竹林となり、夜明けまえには砂浜十歩余が松林となった。上人はその奇瑞を信じ郡郷に触れて欲染のない十二三歳の児童数百人集め船とお琴を山上に引き上げ山に社を立て琴弾別宮として祀り、法相宗の道場は神宮寺として宝光院と名付けた。

後の七世住職空海（弘法大師）のとき七宝山と号し、寺号を観音寺とした。その後十世聖僧正のとき院号を改め神恵院とした。

江戸中期頃より琴弾八幡宮は六十八番札所、七宝山観音寺は六十九番札所として民衆の信仰を得た。

明治の神仏分離令により琴弾八幡宮と神恵院は分離され、神恵院と本地仏阿弥陀如来像は観音寺に移され一寺二札所となった。琴弾八幡宮は琴弾神社と改称されたが、戦後「琴弾八幡宮」に復称した。

さて、この文章が正しいものに近いとすれば、あとはどのような手段で是正すればよいのだろうか。

方法としては

① 寺院・神社のH／Pで紹介する。

② 市の観光協会でPR文を紹介する。

③ H／Pは氾濫しており、記述の是正などは不可能である。放置しておけばそのうち淘汰されるであろう。

どうするのかが、次の課題である。先輩諸兄のご指導を乞う。

参照文献

・「読下し弘化録」四国郷土研究会刊

・「琴弾八幡宮昭和流記」琴弾八幡宮刊

・「百周年記念誌」観音寺第一高等学校刊

・「写真集ふるさと観音寺」観音寺市文化財保護協会刊
・「日本案内記（中国・四国編）」鉄道省刊

H／Pは

・「地域の本棚―西讃府史」
・「Wikipedia 四国八十八ケ所」
・「七宝山観音寺」
・「琴弾八幡宮」
・「四国霊場会本部」　他
・『古寺巡礼』以前の四国霊場」も面白い。

追悼文

藤田廣志先生を悼む

大阪大学教授　森　博太郎

大阪大学名誉教授藤田廣志先生は、平成二十年十一月十七日肺炎のため逝去されました。享年八十二歳でした。ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生は、大正十五年香川県のお生まれで、昭和二十七年大阪大学工学部をご卒業、昭和三十年同大学院（旧制）を修了され、昭和三十一年大阪大学産業科学研究所雇となられました。昭和三十二年には同研究所助手、昭和三十八年には助教授に昇任されました。昭和三十八年科学技術庁金属材料技術研究所に転任され、金属物理第四研究室長に就任されました。昭和四十二年には大阪大学工学部教授に就任され、冶金学科第六講座を担当されました。昭和六十三年からは材料物性工学科格子欠陥物理学講座を担当され、平成二年停年退官されました。平成十四年からは日本学士院会員をお務めになっておられました。

この間、先生は一貫して電子顕微鏡による材料物性の研究に従事され、きわめて卓越した業績をあげられました。

大阪大学産業科学研究所西山善次教授の研究室では、アルミニウムの再結晶における転位の挙動を電子顕微鏡によって調べ、斬新な再結晶機構のモデル「サブグレイン・コアレッセンス」を提唱されました。この研究は、従来硬度や靭性などのマクロな物性値でしか調べることの出来なかった再結晶現象を、電子顕微鏡を用いることによって、初めてサブミクロンスケールの内部組織と直接対応づけて調べた研究として高く評価されました。

科学技術庁金属材料技術研究所では、電子顕微鏡の中で種々の条件を現出できる世界で初めての本格的な材料科学研究用の五十万ボルト超高圧電子顕微鏡を開発されるとともに、その電子顕微鏡を用いてアルミニウムの再結晶過程を動的に直接観察し、先に提唱しておられた「サブグレイン・コアレッセンス」モデルの検証に成功されました。さらに、アルミニウムの塑性変形過程を連続的に観察し、転位の交差すべりによって生じるプリズマティックループを核として転位のセル組織が形成され、その成長とともに後続の転位の運動が妨げられ加工硬化が生じることを初めて解明されました。この加工硬化機構は積層欠陥エネルギーの高い材料に共通した一般的な機構であり、加工硬化理論の発展に大きく寄与することとなりました。これらの研究成果は、いずれも、材料本来の性質を実現しうる臨界厚さ以上の厚い試料を試料透過能の優れた超高圧電子顕微鏡で観察して初めて得られる成果でありました。こうした研究成果は世界中の材料科学研究者の注目するところとなり、超高圧電子顕微鏡その場観察法が材料科学の画期的な研究手法として認識される一つの契機となりました。先生はこれらのご業績により日本電子顕微鏡学会学会賞（瀬藤賞）（昭和四十二年度）を受賞されました。

大阪大学教授工学部に就任された先生は、このご研究を、全ての材料でその場観察が出来る三百万ボルト級超高圧電子顕微鏡の開発へと発展させられ、完成した世界最高加速性能の三百万ボルト級超高圧電子顕微鏡は昭和四十六年大阪大学に設置されました。先生はこの電子顕微鏡を駆使して、電子が材料を透過する能力や材料の電子線照射損傷についての基礎研究を行われる一方、銅、銅合金、鉄、タングステンなど種々の金属の塑性変形過程を究明されました。

先生はさらに、この電子顕微鏡用に、ガス雰囲気中で試料を観るための大気圧まで圧力可変な雰囲気試料筒装置、セラミックスなどの耐火物材料を高温で観察するた

めの二千度Cまで加熱可能な試料加熱装置、および、点欠陥の低温挙動を調べるための～4Kまで冷却可能な試料冷却装置など数々のユニークな試料処理装置を開発され、それらを用いた観察により超高圧電子顕微鏡の新しい応用分野を次々と開拓されました。先生の独創性が遺憾なく発揮されたお仕事であります。

パイオニアとして不断に超高圧電子顕微鏡の開発改良に取り組むとともに、それを多方面の物性研究に応用された先生は超高圧電子顕微鏡学における世界の第一人者と評価され、その卓越したご業績により、紫綬褒章（平成五年秋）を受章されました。さらに、金属塑性変形の超高電圧電子顕微鏡その場観察による研究によって、井村徹先生とともに日本学士院賞（平成六年度）を受賞されました。

常に世界のトップたる研究のために全身全霊を注いでこられた藤田廣志先生のお姿を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表しますとともに心よりご冥福をお祈りいたします。

父の残してくれたもの

藤田　直也
（三中・40回　藤田　廣志　長男）

父藤田廣志は、去る平成二〇年十一月十七日に大阪大学医学部附属病院において肺炎のため永眠いたしました。八十二歳でした。長年、非結核性抗酸菌症という病と闘っておりましたが、体力の低下が著しく、症状の急変に勝てませんでした。

今回、本誌で父の追悼文を取上げていただく機会をいただき、誠に光栄に存じます。また、父が生前賜りました皆様方のご厚情に対し、この場をお借りして厚く御礼申しあげます。ありがとうございました。

一年ほど前になるのでしょうか、病床で書き上げた本誌への投稿文『次世代へのメッセージ』のコピーを「自分が後世に伝えたい想いを書いたので、読んでおけ」と渡されたのを思い出します。改めて読み直してみましたが、学術論文等を中心に多くの文章を残した父の最後の文章となってしまいましたことを思い、さみしく思います。その後、私がこの様な形で本誌に投稿させていただくことになるとは、夢にも思いませんでしたが、同窓会幹事様からのご厚情もあり、力不足ですが思いのまま述べさせていただくこととしました。若輩者の幼稚な文章となりますが失礼をお許し下さい。

また、学会等における父の生前の仕事ぶりについては、父が足跡を残した大阪大学超高圧電子顕微鏡センターを大きく発展させた現センター長の森博太郎教授がご紹介下さりますのでお任せしたいと思います。

父の思い出として最も古く、しかし何故か明確に記憶に残っていることがあります。私が幼児の頃の事ですが、父は買ってきた幼児向け雑誌を横に置きトランプを用いて私に算数を教えようとしていました。答えられない私

に対し「答えるまで雑誌を見せない」と父が叱り、私はべそをかいていたと思います。それを見た母が「子供にそこまでするのですか」と涙ながらに怒り出し、生まれて間もない妹を片手に抱いて「実家に帰る」と、タンスから着物を出して荷物をまとめていました。父はおろおろとしてなだめるのですが収まらず、子供心にこのままでは離れ離れになると感じた私が「家にいようよ。お父ちゃんもあやまっているよ。」と母に訴えたことで納まりました（…と、記憶しています）。その前後の事は全く記憶に無いのですが、算数が分らないと怒る父と、泣き出す母におろおろとする父の対照的な姿がなぜか明確に記憶に残っています。それからしばらくは勉強ができないからと怒られた記憶がありません。

父は私が小さい頃からあちらこちらに遊びに連れて行ってくれました。アルバムにも多くの写真が残っていて、写真をきっかけにぽつりぽつりと思い出されてきます。家族で遊びに出かけると、常に盛り上げようと陽気に振舞う父の姿が想い浮かびます。家族に対する責任感から、今にして思えば「そこまでしなくても」という程、家族を思いやった行動を取ってくれたこともありました。そう考えてみると、トランプによる算数教室も息子への想いが強く出たものと理解できますが、懸命に仕事に打ち込んでいたはずの時期でもあり、家族と過ごす短い時間を有益にするために懸命だったのだと感謝の気持ちが湧いてきます。

私は勤めてからも「クラブ活動の指導」と称して大学の後輩達の練習や試合を見に行っていました。後輩の世話をする様子を見た父が「本当に助けてあげたければ、先に助けてあげられる実力をつけろ。今、世話をするよりも目標となる先輩になれ」と、よく言われました。当時は「そんな事言っても直ぐには…」と反発していましたが、「お父さんには面倒を良く見てもらった」と言って下さる方々にお会いすることが時折あり、父は困っている人を放っておけない性分だったようです。また正義感

が強く、私が小さい頃、電車を待つ行列に割り込んできた人を注意して、取っ組み合いになったことを覚えています。若い頃に空手をやっていたことを良く自慢していましたが、すなわち仕事にしろ体力的なことにしろ、自分に自信を持って考えたことを恐れずに行動に移し、結果を出してきた人だということが分かります。父がお世話した方々と、私の仕事関係でもご縁がありますが、皆様にはいろいろと気に留めていただき、父には大きな財産を残してもらったことになると思っています。

通常、休日の夕食は家族で一緒に食べましたが、父が晩酌をして調子に乗ってくると、大学や学会で他の先生方を論破した時の自慢話をよく聞かされました。私は金属材料の分野に入るまでは「また自慢話か」と、適当に聞き流していました。考えてみれば金属材料や電子顕微鏡の分野の最前線の話について、直接説明を受けることができたわけですから、理解が追い付かなかったものの、金属材料の性質についての感覚的なイメージといったものを焼き付けてくれたと思います。また「知識と考える力の総量は誰でも同じだ。自分は知識が少ないが考える力の総量は他人に負けない」とは父の持論でしたが、そう言いながら随分と沢山の知識が無ければできない話をしていました。恐らく、「知識が無いのだから死ぬ気で考えろ」「憶えるのが苦手だから、死ぬ気で覚えろ」と、自分に言い聞かせて仕事に取組んでいたものと思います。仏前にお参りいただいた大学の先生方も、金属材料の分野に限ることのない幅広い父の知識には、いつも驚かされていたことを話していただきました。幅広い視野から見た材料特性のイメージを、父の晩酌の話し相手になるだけで幾分でも身に付けることができたわけですから、金属材料に関わる技術系の仕事に着いた私は随分と助かりました。私も他分野の方々に向けた金属材料の基礎講習会をする機会が何度かありましたが、説明している自分の口調や身振り手振りを思い出してみると、晩酌講義の受け売りであることに気が付きます。また、概念的な

話で面白いとのお褒めをいただくこともありました。父が得意とする電子顕微鏡で見る原子レベルの世界において、いろいろな材料が見せてくれる原子の振る舞いを観察して感じ取った父のイメージを、私は父の晩酌時の聞き手になるだけで移植を受けたことになります。材料が見せてくれる様々な原子レベルの振る舞いを、私はまるで自分で見てきたかのように考え、説明することができましたので、父は私に大変楽しい財産を残してくれたと感謝しています。

親不孝なことに、父を真にすごいと感じ始めたのは父が七〇歳を越えて大学を退官したため、自宅で研究活動を始めてからのことです。それまでは共同研究者から実験データの提供を受け、学会活動なども大学の仕事としてできたはずですが、自宅での研究活動という限定された研究環境にも関わらず、新しく理論面での研究を中心に活動を始めたことです。実際、はじめはうまくいかず相当イライラとしたようですが、やがて軌道に乗り、学会発表や論文投稿を活発に行いはじめました。調子の良いときは「頭は使えば使うほど良くなる。年齢は関係ない。」と自分に言い聞かせるように言っていました。実際、父の研究に参考になるかと書店で見つけた厚い専門書を買ってゆくと、次週に尋ねた時にはすでに読んで理解してしまっており、細かなところにも反論を唱えたりしていました。勉強量とその吸収力は歳をとっても衰えることを知りませんでした。また、父の机の周りに積んであるノートやメモ帳には、原子の並び方を描いた図などが多くあり、時間を見つけてはイメージを磨いていた様子が分ります。寝たきりに近い状態になっても、ベッドで文献を読んでおり、私がインターネットで探した文献を印刷して持っていくと、中には興味のある内容があり「おお、こういう結果を出したのか」と目を輝かせていました。最後の一年は香川県の実家のことなど、積み残していたいろんな事の整理作業に追われ、「さっさと片付けて研究がしたい」との想いにさせてしまったことが悔や

まれます。

自宅での研究活動を始めた頃でしょうか、買い物に出かけた折に何を思ったか「これで在庫も含めて全部か」と、店においてある大学ノートを箱詰めで買い上げ、「これを使い切る頃には自分の研究も終わりになるだろう」と言っていたようです。亡くなってから整理すると、その時買ったノートで未使用のものは無かったようです。

本文を書くためにいろいろと振り返ってみると、父から受けた影響が実に大きかったことを感じます。照れくさいこともあってか、じっくりと話をしたことはあまりなかったように思いますが、自分の生き様を強く見せてくれており、また父はそれを意識していたように思います。今となっては、その想いに報えることができなかったと悔やまれるばかりです。

最後になりますが、父藤田廣志の追悼文を掲載して下さる幹事の皆様、取り留めの無い話を最後まで読んでいただいた同窓会の皆様に厚く御礼申し上げます。

近藤正治君を偲ぶ

観一・13回　岩津　真人

昨年九月幹事長の合田英之様から、近藤正治君の訃報を受け大変驚きました。通夜には合田様・同級生浜田勝君と一緒に参列しました。又新聞にも報ぜられ、同級生数人から連絡がありました。葬儀は社葬で代表は実兄で東洋炭素会長の照久様でした。（喪主は正治君の妻和子

さん）

近藤君と私は観音寺市茂西町の出身で、幼稚園から高校まで一緒でした。私の家とは直線距離で約百メートルと大変近く一緒によく遊んだものです。彼は中学・高校とテニス部に所属していました。テニスをする者は比較的品格の良い人が多く、友人環境に恵まれその後の人間形成に役立ったと思います。彼は近藤鉄店の四人兄弟姉妹の二男で、長男照久氏は一代で東洋炭素を一流会社に築き上げ、長女は深田外科に嫁ぎ、二女の弘子さんが近藤鉄店を継ぎました。

近藤鉄店は香川県でも五指に入る鉄材店で彼は大変裕福な家庭に育ちました。いつ頃からか高校時代まで自宅の屋根に小屋を作り、伝書鳩を飼い、大変羨ましく思ったものです。大学は青山学院文学部に進学しました。大学に入った頃、彼から喫茶店へ同行してほしいと電話があり訪れたところ同級生数人の女性が待機しており、用件は彼が持っているレコードを借りたいとのことでした。当時、彼はポールアンカ、プレスリーのレコードを多数持っており、プレーヤーで楽しんでいたようです。大学時代、茂西町の幼馴染三人で近藤家の乗用車で、屋島へドライブした思い出があります。途中ゴルフ練習場に立寄り、彼が簡単に打てるので私も打ちましたが全く飛びませんでした。就職してからは音信不通でしたが、私が関西に転勤となり、奈良市に居を構えた時、彼から電話があり、ゴルフを誘われました。昭和五十九年の秋だったと思います。場所は彼が会員となっている茨木国際で、彼の大学時代の友人と三人でプレーしました。結果は彼の方が五打程良かったと記憶しております。この時の再会は約二十年ぶりで、声をかけられましたが、全く分らない程丸顔になっており、学生時代まで細身であった面影はありませんでした。翌年の昭和六十年、観一京阪神地区同窓会に我々の年代が初めて参加できることになり、近藤君が同級生の世話役でした。彼から私に手伝ってもらいたいとの電話があり、快諾し同級生に声をかけたと

ころ二十九名もの参加となり、お互いに成功を喜び合ったものです（場所は北京亭）。その時同期会を催すことになり、世話役は私になりました。第一回の同期会は昭和六十二年二月同級生が経営する西宮の「松竹」で三十二名集まりました。その席上近藤君が米国に赴任すると発言したのに驚き「何年後に戻ってくるのか」と尋ねたところ「二～三年」との返答でしたので安心したものです。東洋炭素の製品はＮＡＳＡにも評価され、世界に飛躍することが確実視され、米国拠点の責任者として赴任することになったのです。その後同期会は毎年開催しましたが、近藤君は全く帰国する気配は無く余程米国での生活が気に入ったようだと同級生に伝えました。平成十三年頃から毎年クリスマスカードが私に送られて来、私も年賀状を出していましたが、平成十八年のクリスマスカードに来年十二月かその翌年の一月に帰国すると書かれていました。私も返信の年賀状に帰国すれば一緒に飲み語り合おうと書きました。平成十九年の同期会では、まもなく近藤君が帰国するので、その時は歓迎会を催そうと話しました。その後彼から連絡が無いので、一月、三月、五月と芦屋の家に電話したところ、いずれも帰国が遅れているとのことでした。六月には、同期会の一泊旅行を高山で計画しており、帰国すれば必ず出席すると期待していました。返信は無く同級生には、多分後継者問題で遅れているのだろうと伝えました。しかし後で分ったのですが、五月中旬に帰国し、すぐに入院したとのことです。まさか大病を患っているとは思いませんでした。同級生は既に多数亡くなりましたが、親友では十年前の山下道之君以来の衝撃でした。通夜の後、帰宅し山下君の時と同じく号泣したものです。

同級生の友人で香川県でも著名な豊浜町国佑寺の住職大平宏龍氏は人間の寿命はそれぞれ宿命であり、結婚、就職先、住居地も全て宿命であると論されたことがあります。近藤君の命日も死因も宿命であったとは非常に残念でなりません。ご冥福をお祈りいたします。

近藤正治氏　略歴

1943年（昭和18年）10月３日生	
1962年（昭和37年）	観音寺一高卒業
1967年（昭和42年）	青山学院大学　英文科卒業
	東洋炭素株式会社　入社
	米国イリノイ州シカゴの会社、ドイツの会社で研修
1969年（昭和44年）	帰国、東京営業所に勤務
1970年（昭和45年）	結婚
1972年（昭和47年）	大阪本社に勤務、主に海外営業を担当
1979年１月（昭和54年）	取締役　就任
1983年１月（昭和58年）	常務取締役　就任
1987年９月（昭和62年）	米国オレゴン州ポートランド市に会社設立の為渡米
	東洋炭素㈱常務取締役兼T.T.America,Inc.取締役社長就任
	東洋炭素㈱のアメリカ拠点として、半導体関係製品（るつぼ、ヒーター）を製造・販売
1993年２月（平成５年）	東洋炭素㈱常務取締役兼Toyo Tanso USA, INC.取締役社長就任
1996年６月（平成８年）	米国ペンシルバニア州ピッツバーグ市に移り、東洋炭素㈱常務取締役兼PENNGRAPH, INC.取締役社長　就任
	Toyo Tanso Specialty Materials, INC.取締役社長　就任
	工業炉用カーボン断熱材の製造・販売（アメリカ航空宇宙局NASAへも一部部品納入）
1997年６月（平成９年）	東洋炭素㈱専務取締役　就任
1998年８月（平成10年）	専務取締役　退任（Toyo Tanso Specialty Materials, INC.取締役社長として在任継続）
2006年３月末（平成18年）	Toyo Tanso Specialty Materials, INC.（TTSMI)をクレハ化学㈱に譲渡
	TTSMI　取締役社長を退任
2008年５月中旬（平成20年）	日本へ帰国（病気治療のため）
2008年９月24日（平成20年）	逝去

この略歴は、東洋炭素㈱総務部次長 前田竜彦様より頂きました。

エッセイ

ユダヤ民族（下）巻

三中・39回　小林　多聞

新天地アメリカへ

東欧ユダヤ人の行先は南北アメリカ、オーストラリア等であったが、なかでも多かったのはアメリカで一八八〇―一九二〇年にかけて新大陸にやって来たユダヤ人は二〇〇万人にのぼった。

アメリカには既にユダヤ人がいた。一番先に来たのは一六五〇年スペインを追放されてブラジル経由ニューヨークへ来た十三人のセファルディームだった。以後一八二五年までに約一万人のユダヤ人がアメリカに住みついた。次いで一八二五年―一八六〇年にやってきたのがドイツ、ボヘミア、ハンガリー等、中央ヨーロッパのドイツ系ユダヤ人である。彼らはかつての故郷ではフランス革命（一八四八年）後、平等権を得ていた（後述）にも拘らず、その後の反動的な旧制度復活によって、再びさまざまな不利益を蒙ったからである。無一文でアメリカに着いたドイツ系ユダヤ人は、開拓者の後を行商して売り歩いた。開拓地が都市になるにつれて彼らは行商人を脱して店を開き、中小企業家と大企業家となった。今日目にするニューヨーク最初の百貨店B・アルトマンやメイシー百貨店等大きいデパートはドイツ系ユダヤ人のものだ。彼らはアメリカの消費経済の発達には盡したが、子供達に高等教育を受けさせる余裕がなかったので、政界や学会に進出した人は殆んどいなかった。

このように中産階級を形成するようになった彼らが一八八〇年代に会った同胞とはイディッシュ語を話し、みすぼらしい服を着てユダヤ教にしがみついている東欧系ユダヤ人であった。ドイツ系はそのうち自分達にも被害が及ぶことをおそれる気持ちと博愛心から、種々の慈善団体を結成して彼らを援助した。

東欧系ユダヤ人はニューヨークの貧民窟にひしめくように住んで、少数の者は行商人、或いは小売商人となって大部分の者はタバコ、皮、衣服、産業工場の労働者となって働いた。仕事はきつかったが東欧にいる時よりも自由であった。彼らは新天地にもイディッシュ語を持ち込み、イディッシュ文学が発展した。彼らは一生懸命働き、子供達を学校に通わせ自分自身も夜学に通った。今日のアメリカユダヤ人は医者、弁護士、大学教授が多く、その他ジャーナリズム、映画産業、芸能の分野でも活躍している。

レーニンのユダヤ民族政策

一九〇五年には第一次ロシア革命が、そして一九一七年には第二次ロシア革命がおこり、帝政が廃止されソビエト社会主義共和国連邦が誕生した。この革命、それに続く内戦には多くのユダヤ人が活躍した。例えばトロッキー、ジノビェフ、カーメネフ、ブハーリン、ウリッキーらがそうである。レーニンすらもユダヤ人の血が入っていたといわれる。レーニンは大ロシア民族主義を弾劾し、すべての小国家、少数民族の平等を目指した。ユダヤ民族に対しては「ユダヤ民族文化はプロレタリヤートの敵であり、これに反して国際マルクス主義団体において、労働者と融合して労働運動の国際文化の創造に貢献したユダヤ人マルクス主義者は、ユダヤ社会の最も優れた伝統を受け継いでいる。」としてイディッシュ化政策を推進した。一九二四年には「内容に於いては社会主義、形式においては民族的」となり、イディシュ文化は衰退する。

ロシア反ユダヤ主義

しかし一方では一九〇五年以後も反ユダヤ主義は連綿と続き、一九一一年キエフの郊外でユダヤ人が儀式殺人の罪で告訴投獄された。（注）（真実は冤罪事件であった。）

第一次大戦（一九一四―）ではユダヤ人兵士もロシア軍として戦い、第二次大戦では一九四一―一九四六にかけてイディッシュ作家や詩人がロシアの愛国精神を鼓舞した。ところが一九五二年著名なイディッシュ語作家や詩人が軒なみ処刑された。一九五三年にはユダヤ人医師団のソ連指導者毒殺陰謀事件、これは無実がわかり釈放された。こうしたユダヤ人文化圧迫政策は一九五三年スターリン死去によって一応の終わりを告げた。

今日のロシアには、二五〇万～三〇〇万人のユダヤ人がいる。ロシア民衆には反ユダヤ感情が今も残っている。ユダヤ人の方は、ある者は同化してロシアの社会に完全に順応している。同化はしないがロシアの社会に完全に忠実な者もいる。反体制を標榜する者もいるし、ロシア生活に満足せず、イスラエルに移住しようと試みる者もいて多種多様である。

ヨーロッパ近代のユダヤ人

中世の封建時代が終わり十七、十八世紀に西ヨーロッパが資本主義、重商主義時代になるにつれて、イギリス、ドイツ、オーストリア、デンマーク等では特権階級のユダヤ人、すなわち宮廷ユダヤ人が頭角を現した。イギリスでは、エリザベス女王の金主、オーストリアではハプスブルグ家にユダヤ人が信用貸しをしていた。同国ではユダヤ人ザムエル・オッペンハイマーの死によって国家と帝室が破産した。宮廷ユダヤ人の活躍が特に著しかったのは国が多くの小国家に分割されていて、三十年戦争によって財政的に困ったドイツであった。宮廷ユダヤ人は数々の特権が与えられ、ユダヤを示すバッジもいらず、ゲットーに住む必要もなく、自由に商売も国内旅行も出来た。

啓蒙主義とメンデルスゾーン

十七、十八世紀のヨーロッパでは各国共、思想家や作

家達によって、人間としての個人の解放をめざす啓蒙主義が説かれていたが、それは特にフランスで活発であった。しかしそれに反応したのはフランス人ではなく、プロシヤのユダヤ人であった。その中心のユダヤ人がモーゼス・メンデルスゾーンであった。彼は一七二九年ベルリン近くのゲットーに生まれ、近代語や哲学を学んだ。一七六四年プロシヤの科学アカデミーに提出した哲学論文で、一等を獲得したが、敗れた一人があのカントであった。またゲットーの言葉であるイディッシュ語を嫌い、ドイツ語を習得することで平等の権利が得られるとしてトーラー（律法）をドイツ語に訳した。この聖書は西欧、中欧の殆どすべてのユダヤ家庭に普及した。一七八六年没。

フランス革命とナポレオン

ユダヤ人の解放運動が始まったのはドイツであったが、実際に完全な平等を獲得したのはフランスのユダヤ人である。イサック・ベル（一七三〇―一七九三年）は、メンデルスゾーンらの新しい精神に影響され、フランス軍に資金供給をすることを条件にストラスブールに定住を許され、同胞を呼び寄せて自分の工場に雇った。彼らの闘争を助けた人達の中にはフランス人もいた。一七八九年七月十四日フランス革命が勃発し、ルイ十六世と王妃は死刑となり、フランスは共和制となった。自由、平等、博愛をスローガンのこの革命は、種々の社会変革を行ったが、ユダヤ人にも大きな影響を与えた。一七九一年九月の国民議会でついにフランスの全ユダヤ人四万人に完全な市民権が認められたが、実際には、ナポレオンが登場するまで依然として偏見と戦わなければならなかった。

ナポレオンは一八〇六年フランス人がユダヤ人高利貸しに苦しんでいるとの訴えを聞いてユダヤ人一一二人からなる名士会議を開いた。これはユダヤ人をフランス社会に同化させるためであったが、その時のユダヤ代表の意見は「我々はフランスを故郷と考え、フランス人を兄

弟と考えている。」という回答であった。一八〇七年古代イスラエルのサン・ヘドリン（議会）にならって七十一人のラビ（指導者）からなるサン・ヘドリンを召集した。その席上ユダヤ人は自らを「ユダヤ教を信ずるフランス人」と宣言した。それ以後の彼らのフランス社会での活躍は目覚しかった。一七九一年フランスで市民権が認められたため、一七九六年にオランダ、一七九八年イタリア、一八一二年プロシヤと次々とユダヤ人平等権が保証された。

しかし彼らの権利もナポレオン敗北後の一八一四年に開かれたウィーン会議での各国君主の反動的な姿勢によりすっかり以前の状況に逆戻りしてしまった。フランス、オランダは別としてドイツではユダヤ人が追放され活動が制限された。オーストリアではマリヤ・テレジアの厳しい法律が復活した。イタリアではゲットーが再び作られた。

ドイツユダヤ教の改革運動

先ずガブリエル・リーサー（一八〇六―一八六一年）がユダヤ人の同権を獲得するためにユダヤ人と題する新聞を発行し、ユダヤ人を含むすべてのドイツ人の政治的解放を訴えた。それでもユダヤ教徒は公職から締め出され続けたため、改宗するユダヤ人が続出した。このような状況に危機感を抱き、それを阻止すべく一八三〇年に起ったのが、ユダヤ教改革運動である。彼らはドイツ語で説教や祈りを始めたり、合唱を取り入れたり、シナゴーグをキリスト教会に似せたりしたので、保守ユダヤ教徒と激しい論争が起ったが、イギリス、フランス、特にアメリカで広い支持を得、今日もその伝統が続いている。その間にユダヤ教学も起り、はじめて科学的な彼ら民族の過去についての研究も発達し、又聖書の批判的研究やユダヤ人の歴史も調査研究出版された。

同権の獲得―一八四八年フランスの二月革命はドイツに飛び火し、ドイツ革命が起った。フランスクフルトの

パウロ教会で国民議会が開かれ、ユダヤ人エドゥアルト・シモンが議長に選ばれ、一八四九年全市民に完全な平等権を与えるとの決議がなされたが、法律になったのは、一八六九年七月ヴィルヘルム一世とビスマルクが寛容法に署名し、これによって宗教の相違に基づく市民権及び政治上の権利に関する総ての既存の制限は廃止された。一時、旧体制に戻っていたドイツ以外の国々はオーストリア、ハンガリー帝国、イタリアで平等権が認められ、イギリスもスムーズに解放された。

マルクス、フロイト、アインシュタイン

解放された西ヨーロッパのユダヤ人達は、あらゆる分野に進出し、非凡な実力を発揮する。フランス大革命とナポレオンによるユダヤ人居住区の解放からヒトラーの時代までの約一世紀の間、長期のユダヤ人居住区の閉鎖迫害の砥石の上で研ぎすまされた機知や洞察が大幅な意識の貯えを蓄積し、ヨーロッパの中産階級の倫理的、知的、芸術的な日ざかりに参加し、西欧思想の総ての領域を活気づけ、複雑にした。又古典的ヨーロッパ文明の重大な要素を自分のものとしてそれを新しい問題をはらむものとした。

カール・マルクス（一八一八―一八八三年）。彼はドイツに生まれ、社会科学のみならず、人文科学にも多大の影響を与えた。ユダヤ人問題はユダヤ教を捨てない限り解決出来ない。又ユダヤ人の政治的解放を訴える際もユダヤ教をブルジョア資本主義と激しく攻撃した。生涯を殆んど大英博物館で過ごし資本論を書き上げた。

ジクムント・フロイト（一八五六―一九三九年）はオーストリア・ハンガリー帝国に生まれ、ウィーン・パリ、ウィーンと居を移し、ロンドンで没す。精神分析学の創始者である。

アルベルト・アインシュタイン（一八七九―一九五五年）はドイツ生まれで、スイスの特許局に勤務し、理論物理学の研究が二〇世紀物理学の基礎を作った。一九二

一年ノーベル賞受賞。一九三三年ナチス政府の樹立と共にアメリカに亡命。そこで一生を終えた。

次に金融経済界では、中世における金貸業、宮廷の財務顧問としての彼らにはお手のものであった。一九世紀の産業革命時代には銀行業として産業のために資金を調達した。マイヤー・アムシェル・ロスチャイルド（ドイツ語ロートシルト）は古銭商より身を興し、ヴィルヘルム伯爵の御用商人となり、大金持となった。三男ナータンはロンドンで、五男ジェイムスはパリに出て、今日も一大財閥として繁栄している。

この他にもヨーロッパ文化に貢献した教え切れないユダヤ人がいる。特にドイツ系が圧倒的に多く、文学、医学、理学の分野で著しかった。

英知の原因

ユダヤ人がなぜこのように秀れた人物を輩出したか、その理由を考えて見る。この解答はアメリカユダヤ系の文化人類学ラファエル・パタイのものである。

⑴　異教徒（すなわち非ユダヤ人）の迫害、差別、いじめに対する反発心をバネに優秀な人材を次々生み出した。

⑵　最も優秀な学者同志の交配、生殖。即ち同じような職業同志、家柄の者同志の結婚によって優秀な血が集まった。

⑶　学問に最も価値があるとするユダヤの宗教的文化的伝統。タルムードの中に「知識のない者程貧困なものはいない」という言葉がある。

⑷　家庭環境における極度に刺激的な性格、ユダヤ人の家庭では何か子供に才能の見込みがあれば、その才能を助長するあらゆる手段がなされる。

⑸　何世代にもわたる都市志向。ユダヤ人は寄留の生活を余儀なくされるに及んで専ら都市で生活するようになった。都市は高い文化の源であり、其処には学校や大学があり、勉強に便利である。

⑹　異教徒のユダヤ人に対する金融業の強制により、経済知識が磨かれた。中世の金融業は確かに彼らに押しつけられたものであったが、彼らはそれによって経済のメカニズムをマスターした。

⑺　異教徒の文化的雰囲気の挑戦。ユダヤ人は、自民族とは異なる宗教を持つキリスト教団の文化的雰囲気の中にいて、同時によそ者であったからその社会に受け入れられなかった。そこでその挑戦に対して、その社会を越え民族を越え時代や世代を超えた高い思想をもち、広く新しい世界、はるかの未来にまで精神を飛躍させ考えすすめるようになった。

反対にユダヤ人が外界と接触していないか接触していても、その環境が澱んでいる所、例えばアラブ世界では天才人物は出ていない。

ユダヤ人はなぜ嫌われるのか

ユダヤ人が特にヨーロッパに於いて嫌われたことは広く世界に知られている。中世のイスラム・スペインのように重用され、繁栄した時期もあったが、ディアスポラ（離散）の後、絶えず受難にさらされ、中世ヨーロッパの十字軍による虐殺、中世スペイン末期の異端審問、そして現代ドイツのホロコースト等、数え切れない迫害、差別があった。その理由は次の四つが考えられる。

（1）宗教的理由、（2）社会的経済的理由、（3）競争によって生じたもの、（4）人種理論によるもの。

⑴　宗教的理由

これには二つの理由がある。第一の点はヤハウェ（神）はユダヤ人と契約を結び、彼らが絶対服従することの代償として恵みを与えるとしている。ユダヤ人のみが神への選民である根拠である。神のユダヤ人びいきに対する羨望と嫉妬である。

第二の点は、ユダヤ人がイエスを十字架にかけた事に対するキリスト教徒の敵意と憎悪である。然しイエスは十字架があって、その悲劇性を高め、教徒

の信仰心を一層強めたのであるが。

⑵ ユダヤ人の世界支配

彼らが憎まれる理由の一つとして、中世に金貸しをしていた事があげられる。これは彼らが金貸し業しか生きる道が無かったからであるが、近代に入るとユダヤ人は世界各地で金貸し業経験を生かせて、大資本家になった。すると今度はユダヤ人が金の力で世界を支配しようとしているという非難がなされるようになった。

⑶ 社会のエリート

十九世紀の半ば以降、即ち解放後、ユダヤ人が一部は天分により一部は彼らの強い結びつきにより多くの国で多くの分野で指導的地位を占めるようになった。一種のエリートになった。その為に嫉妬と反感を買った。

⑷ 人種論に基づくもの

これにはいわゆる近代の人種論に基づくもので、ユダヤ人の存在そのものが悪いというのである。この人種論の典型的な具体例がヒトラーのユダヤ人大虐殺である（後述）。人種論の歴史を述べることにする。一八七〇年から一八八〇年にかけて生まれた「反ユダヤ主義」の思想はユダヤ人憎悪とは異なり、ユダヤ人であること自体が犯罪であるというのである。その起源はドイツではなく、一九世紀初頭のイギリス、フランス等の人種論であった。この理論はナショナリズムを背景として生まれ、その目的とする所はゲルマン人の「優秀性」と非ゲルマン人、特にユダヤ人の人種的劣等性を証明することにあった。人種論の祖はフランス外交官ジョセフ・ゴビノーである。彼は一八五五年、すべての文明はアーリヤ人種に始まると発表。ドイツの音楽家リッヒヤルト・ワグナーは、一八五〇年と一八六九年には再度、ユダヤ人を「金のみを志向する劣等人種」として激しく攻撃した。

そしてこうしたドイツの反ユダヤ主義はビスマルクの第二帝国下の一八七三年に起った株式市場の大暴落とそれに続く経済危機や住宅難、社会的困窮が原因となって激しくなり、それらの責任は総てユダヤ人に押しつけられた。反ユダヤ主義はオーストリア、ハンガリー、フランスへ拡がった。

シオニズムの発生

プロシアの社会主義者モーゼス・ヘスは一八六二年倫理的原理に基づいたユダヤ人国家の設立を要求した。一八八一年ユダヤ人はロシア文化に同化していると信じていたレオン・ピンスケルは、同年のロシアのポグロムに打ち砕かれて、ユダヤ人の同化は難しい、従ってその解決策は自身の国をつくって彼らを隷属状態から解放することであると主張した。

一方、西に於いてはフランスのドレフュス事件がテオドール・ヘルツルのシオニズム活動を生んだ。彼はユダヤ人ドレフュスの有、無罪よりも、ユダヤ人を殺せと呼ぶフランス人の態度にショックを受け、ユダヤ人は自身の国を建設するしか解決策はないと考え、一八九六年主権国家成立のための前提条件を述べた。ユダヤ人代表者による国際会議の必要性、ユダヤ人移送のための資金、新国家の近代産業のための技術者の必要性等々。一八九七年スイスで初のシオニスト会議が開かれ、世界シオニスト機構が設立され、ヘルツルが議長となった。一九〇四年没。彼は建国の父と仰がれている。

ヒトラー

反ユダヤ的雰囲気の濃いウィーンで青春時代を過ごし、後ドイツに移住してナチスを結成し、第二次大戦を惹き起こしたヒトラーは、アーリヤ人種を人類の文化の創始者と考え、ユダヤ民族を文化の破壊者と考える誤った人種理論をもって、世界の歴史に登場し四〇〇万人以上の罪なきユダヤ人を焼却場の灰とした。国家社会主義ドイ

ツ労働者党、いわゆるナチスの台頭は一九二九年のアメリカ経済恐慌を皮切りとする世界情勢悪化を背景に一九三二年一月アドルフ・ヒトラーがドイツ首相となった時を以て始まる。

一九三三年四月ユダヤ人からの不買運動、官庁、法曹界からのユダヤ人追放。一九三五年ドイツ市民はアーリヤ人種でなければならないとするニュールンベルク法の施行。同化してドイツのために働こうとしていたユダヤ人に大ショックを与え、自殺者やパレスチナ、アメリカへの移住者が増えた。一九三八年一月、ユダヤ青年によるパリ大使館員殺害。これを契機としてユダヤ人に対する残虐行為開始。一九三九年ポーランド攻撃により、世界大戦開始。一九四一年ソ連の侵攻。一九四二年一月ユダヤ人全滅作戦開始。一九四五年四月三日ヒトラー死す。五月八日第二次世界大戦終了。少なくとも四〇〇万人以上のユダヤ人が殺された。

バルフォア宣言

第一次大戦中の一九一七年イギリスの外務大臣バルフォアは、イギリスの貴族でユダヤ人のライオネル・ロスチャイルドに一通の手紙を送った。これは第一次大戦のためにイギリスのユダヤ人化学者ハイム・ヴァイツマンが新しい爆薬を発明したお礼に、ユダヤ民族の母国をパレスチナの地に建設することが望ましいという内容であった。然しこれ以前の一九一五年にアラブ人に対してイギリスの元エジプト・スーダン高等弁務官アーサー・マクマホンが当時イギリスが戦っていたトルコ帝国に対して反抗するなら、中近東の領土を与えると約束していた。一九三六年バルフォア宣言に勇気づけられたヨーロッパのユダヤ人一五〇万人が、ナチの脅威もあってパレスチナに定住した。同年アラブ人はそれに抵抗して大規模なテロ攻撃を加えた。アラブ人のこうした圧力に耐えかねたイギリスは、一九三九年ユダヤ人のパレスチナ移民を制限し始めた。この処置にユダヤ人たちが不満を抱き、

イギリスに破壊活動を始めた。エルサレムのホテルを爆破しイギリス将校八〇名を殺害した。イギリスは手に余って一九四七年パレスチナの委任統治を国際連合に委任した。一九四八年五月十四日、イギリス軍がパレスチナを去った後、ダビッド・ベン・グラオンはテルアビブでイスラエルの独立を宣言した。翌日、アラブ五カ国（エジプト、ヨルダン、イラク、シリヤ、レバノン）がイスラエルを攻撃（第一次中東戦争）。一九四九年二月二十四日、ハイム・ヴァイツマンが大統領となり、一九五六年第二次中東戦争。一九六七年第三次、一九七二年第四次中東戦争。アラブ人とユダヤ人のこの対立抗争は果てることがない。

参考文献

ユダヤ人

上田和夫著　講談社現代新書

ユダヤの民と宗教

Aシーグフリード著

鈴木一郎訳　岩波新書

「随筆三題」

三中・40回　合田　重隆

(一)　人生あれこれ

幼稚園児

幼稚園のころ、母は童話本をよく読んでくれた。「やんぼう少年、のらくろ軍曹」は忘れられない。私はやんぼうに魅せられてうれしかった。

学校時代

小学校で、特に勉強したのは五、六年課外授業を受けて中学校に入学。中学校から旧制高等商業を受験の時は旧制中学校の四、五年と受験勉強をした。旧制高等商業学校の卒業時には徹夜をして勉強をした。

戦前戦後の時代で、働き手が足らず小豆島の醤油試験場へ麹やアミノ酸の作り方を勉強してきて蔵人の仕事を手伝ったものでした。

学校卒業後

仕事を覚えると蔵人と一緒に仕事をした。

物不足の時で、醤油がよく売れて醤油の商売も繁盛したが、昭和三十年ころより大手の品が出回り三十三年より田舎の品は売れなくなり商売は止めることにした。当時盛んだった証券業にサラリーマンとして転職した。

自分は労働職から身を引き証券マンになった。証券売買の仕事は始めてだった。初めての店が三島だった。多少知り合いもあり指導してくれる人もあって、仕事の出足もよかった。その内仕事が手について来た。一年、二年経つうちに客人の知り合いが増えて店長代理になった。自分の仕事と決めた。その内証券界に四十年不況と言われる大波が打ち寄せて来た。その内退職者が出るようになった。証券界にはそんな動きがあるものだと聞いてい

た。

五十年になったころから景気がよくなりだした。そして六十年代にバブル期を迎えたじゃありませんか。

バブル期に退職

証券バブルの最高の時、六十三年三月定年退職を迎えた。

証券の道で飯を食わせてもらってほとんど世間知らずのまま六十歳を過ごしてしまった。

社長に退職のあいさつにいった時に店長職も長かったし、最後には本店の経理役も勤めてくれたのだから地元の観音寺店の顧問で、もう五年やってもらえないかと言われてお礼返しのつもりで五年勤めさせてもらうことになった。

時に、父母はすでにこの世の人ではなく、生きていれば母八十四歳、父八十七歳であった。

私は父母がバブル期まで永らえていて欲しかったと思っている。今までにこのような良好な好決算が出たことがなかった。自分ながら数字桁を疑った。

退職後の私

現職時代に四十六歳の時、町長から話があって教育委員になってくれないかと私に直接話があって頼まれた。仕事のほうでお宅へ訪問した時のことだった。町長いわく「あんたのような人になって欲しい。わしは前からあんたを考えていたんじゃ」と言われた。

私まだ若いのにと断りすると、「わしはあんたに惚れとんじゃ、適任と思う。何でもわしに相談してくれ」と言うことで私は勉強のためその話をお引き受けした。それから二十二年勤めた。そのことがあってから町の世話役を頼まれるようになった。しかし、サラリーマンだからと言うことで断るようにしていた。

退職後は町の世話役をするようになった。その後は平成十三年に怪我をして現在療養中である。

(二) 錦松

まだ私の幼い頃の記憶に、我が家の庭の中心に背の低い赤松が横たわっていた。

成人した頃には、少し枯れかかっていて、長年つっかえ棒で支えていた。

もうその姿もなくなって、それは久しい。その木の裏側には、赤松と同じ高さの三角のおにぎり石が苔むす庭に長らく、ひとり寂しそうに居座っていた。

その後は、若かりし性か、庭のことなど無頓着で、殺風景さを気にすることなく通り過ぎていた。

次男の英規が結婚した一九八八年のこと、天皇陛下が皇太子の頃、満濃公園の植樹祭にご夫妻がお越しになられたことがあった。

妻と二人で招かれて行った。

おりしも雨の中で、ご夫妻にお付きの方が傘をさしかけながら、お手植えされたお姿が印象的だった。帰りに記念の松を戴いた。小さいので鉢植えにしようかと思ったが、生来不精者故、記念の松を枯らせてはと、赤松の後に二本の錦松を肩を並べて仲睦ましく植えた。

三、四年も経った頃、幹が少ししっかりして来て針のような緑の葉が出てきた。

私なりに幹を毛そりしたり、若葉を散髪したりして。少しは大人ぽく、さっぱりもしたのを覚えている。背が高い方は幹が細いので棒で添え木をしてあげた。

だんだんと成長するほどに、本格的に一杯伸びた葉は、下の方から逆手に抜いていくと、すじやかになってきた。

その後は、庭師が庭の手入れに来てくれたので、錦松も本格的に手入れをしてもらうようになった。

庭師がしているのを何となく見ていたのが役にたった。

「この松、うまいこと出来とるがな」といってくれた。

それからは、二年に一度、大きい庭木と一緒に散髪を

してもらっている。

だいぶん大きくなってきて、今では枯れた赤松と背丈が同じになって、昔を知らぬ錦松がそ知らぬ顔で同じ場所に居座っている。

松の種類こそ違い細い幹ではあるが、その格好がよく似てきてまさしく我が家の二世松の誕生とも言えるのではあるまいか。

庭師の来ない年になるので、数年も前のこと自己流で散髪をしていると、妻が来て「剪定ってどうすればいいの」と言うので、伝授すると、せっせと後を受けてやり出した。妻はもう一人前の手つきで格好もよく似合っている。

「この松、本当に錦松というの」と、問い掛けるので、「実名は何と呼ぶのか定かでないが、我が家では錦松と命名しているんだよ、錦松にしとこうよ」といった。

庭の中央に鎮座ます錦松こそは、もう十九歳にもなり他の庭木よりか年若ではあるが、我こそは二代目松で庭のメインなるぞとばかり、この家の大将面をして、ひとり威張っているように見える。

(三) バラ園と妻と油絵

バラ園をしだして二年目に入って、人は生をうけて役割が決められているようだ。

妻は子供の時からお絵描きが好きで、大学時代から油絵を描いていたようで、卒業後は師匠についていたようだ。

結婚してからもデッサンはよく描いていた。
子育てがすんだころから油絵描きに戻り、本格的に描きだして三十年がたちました。その間バラ絵をよく描いていました。バラが好きなのでしょう。
カナダ旅行に行ってから素晴らしいカナダのバラ山に魅せられ、適等な土地が入手出来てバラと友達になりました。
バラ園五ヵ年計画にとりかかっています。妻は七十がきて残りある人生で、バラ絵の美を描き残そうと楽しみにしている。
しかし、このごろはバラの肥料や消毒、剪定にも熱心にしているようで、興味もあるようです。

三年目、四年目

バラ園仕事三年、四年目は三月四月にあたり芽の吹いてくる時で、可愛さ余る時季で、蕾みが開きかけほど愛らしくていいと妻は言っています。
妻は仕事に馴れて自信が出来て、しかも能率よくなり楽しそうです。
三年目はつるバラがおおきく開いて、とても綺麗な大きな花が咲きました。
妻は早速百号のキャンバスに向かって大きな絵を描き初めました。
四年目にしてつる花の数が増えて庭園の一郭が賑やかになりました。妻は嬉しそうでした。

五年目

今年はいよいよ五ヵ年計画仕上げの年で、これからバラ園第三、第四、第五年目が始まる。妻は油絵を描きたくて構図を一生懸命やっています。
自分の描いたものを残して置きたいと思っているのだろう。
絵筆がもう動き出してバラ園第三の人生がキャンパスに浮かんで来るでしょう。

第四、第五の人生

春四月がくると花が開き始めなんともいえない、いい香りが漂い始め、五月になると庭園の花が楽しそうに見えてならない。そして妻から笑顔をもらったようでうれしい。

これは妻が自分ひとりで考えてつくったバラ園五ヵ年計画が立派に完成出来たことを喜ぶ。ご苦労でした。左足が不自由な私が手伝い出来なかったことを申し訳なかったと思う。

しかし鍬をもったことのない妻のバラ園五ヵ年計画達成は立派だった。ご苦労だった。

故郷の山吟行記

三中・41回　東　忠

青い国四国へは年に一、二度帰ることにしているが、八十路を越す頃より、長時間歩くことが辛くなり、遠くから眺めて昔を偲ぶことが多くなった。以下の俳句は長年の間の帰郷の際、その時々の句であり季もばらばらであること、理解願いたい。

○讃岐富士

ふる里の島へ取舵鳥渡る

大架橋潮路のくらき日の盛り

雲の峰崩るる下に讃岐富士

瀬戸大橋を渡ると次第に見えて来るのが讃岐富士で、その端麗な姿には、幼時山麓で螢狩をしたことがあり、讃岐に帰ったとの感を強くしてくれる山である。昔加藤

汽船で、航路左にとり陸地に近づくにつれて、帰郷の思いが一入であったのが鳥渡るの句を生んだ。

○屋島

折からの名残りの花を古戦場

屋島嶺（ね）の都忘れにせめぐ風

墨染の作務衣の沙弥（サミ）の素足かな

あかあかと霞を抜きし日の出かな

屋島に一泊、翌朝瀬戸内海の日の出を拝したときの気持は今も残っており、「あかあかと」と素直に表現したのがこの句である。

○金刀比羅宮（象頭山）

杣（ソマ）ひとりふたりとかくし霧のぼる

秋時雨こんぴら飴屋の傘を借り

金毘羅の短き秋を高嶺草

金毘羅さんの中腹に赤い傘を立て二組ほどの飴屋が店を出していたと思うが、その傘に突然の秋時雨をさけ逃げ込み、飴を土産に買った思い出をそのまま句にしたものである。

○琴弾山（琴弾神社　麓の札所寺）

小学六年生の時、絵の担当の先生と、琴弾山の麓の寺を訪ね、古い縁起の巻物を拝観した思い出がある。三中時代は喇叭を先頭に行進し参拝した。五年間毎月であったと思う。この山上から見る砂の大銭型は近辺にない見事なものであり、自慢の景である。有明の浜は夏の水泳訓練の場所であり、松林は小学校時代の林間学校の思い出がある。七十年昔のことを鮮やかに思い出させてくれるこの山の佇まいは、三架橋を渡ってすぐに形として現れる。札所寺の二寺を訪れる信者の世話を級友の小山君の縁者がやっており御苦労なことである。

糸遊（イトユウ）や昼月細く琴弾山

小鳥来る赤松林に日の透けて

石龕（セキガン）の仏にとどく梅明り

柴燈（サイトウ）の護摩あとぬくき余寒かな

琴弾山の磴（サカ）に盛りの四葩（ヨヒラ）かな

南無八幡囃し色づく朱欒かな

山寺の斎に合掌冷奴

逆修の兵墓の古び薮柑子

蔀あげ夏めく宮の青畳

祓戸に立ちし若き日若葉雨

狛犬の古びし磴に一葉かな

巡礼の白衣のまぶし冬日向

千早振る地祇の勝男木寒の晴

今朝の霜三豊原頭きらめける

○雲辺寺（巨鼇山）

同窓会で観音寺に帰った時は、宿舎は色々と世話になったが、海辺の琴弾荘は海を指呼にした宿で食事も瀬戸の懐しい魚介をふんだんに出して呉れ、思い出が多い。駅を越したところにあるホテルからは三豊原頭の四季を眺めることが出来、あのあたりは萩原寺、あの方向は本山寺と視界がよい。讃岐山脈の麓には国民宿舎があり、池、古墳と俳句の句材が多く一夜の宿として世話になった。

雲辺寺は吾が青春の山であり、同級の清水君に連れられて登ったことがあり、可成りきびしい登山であった。今はロープウェイで登れ眼下の景を楽しめる。今となっては、清水君と登った険しい山道が、又古びた札所寺がなつかしい。

ロープウェー遅速のなきを山笑ふ

見えかくれ名残りの花を峰の寺

御手洗にかそけき山気春の果

雲を脱ぐ四国高野や夏近き

一山に黄の瘤いくつ椎の花

鳥引くを棚田の畦にまかげして

笹鳴きの覚束なしや尾根の道

夏の霧流れ翠巒忽と生る

芽木明り白き羅漢の像囃し

立羅漢常槃木落葉背にうけて

大山蓮華まぶし一夜の雨晴るる

雲辺寺の朝の山気やほととぎす
懸巣(カケス)鳴く山路に欠けし里程石
藤は実(み)に石龕(セキガン)に座(ザ)す仏達
万緑にせまき空(ソラ)かな巨鼇山
杉巨木みな洞(ホラ)あり蟻地獄
落し水棚田亀甲(キッコウ)の割れ見せて
参道の竹の葉(ハズ)擦れや今朝の秋
朝空を綿虫(ワタムシ)飛ぶや古墳あと
霊山を指呼に朝の冬日(ウ)享く

俳号　東　ただし
俳人協会　会員
関西俳人クラブ理事
蘇鉄社同人会副会長

［語解］
屋島嶺……屋島の源平の戦いと平家の都落ちの舞台
都忘れ……花の名　春の季語　地味な花である
沙弥……若い坊さんのこと
柚……木礁のこと
糸遊……春の季語　糸のように細い体の飛ぶ虫の名
石龕の仏…石を彫り込んで作った厨子でお不動さんが多い
柴燈……各地のお不動さんで焚く護摩
余寒……冬から春の初めの季節
四葩……あじさいの花のこと
斎……お寺で頂く食事
逆修……逆縁とも云う（自分より若くして亡くなった人）
一葉……秋の季語
千早振る…神さまの接頭語
勝男木…神社の建物の棟木の所にある鰹節に似た装飾を施した木
まかげ…目蔭　遠くを見る時、光を遮るため額に手をかざすこと
笹鳴き…若うぐいすの初鳴き（下手な鳴き方）
翠巒……青い山
芽木……若葉青葉の頃の青葉に映えた
常槃木…夏の頃の常緑樹よりの落葉
大山蓮華……花の名
落し水…稲刈りの頃、田の水を抜くこと
綿虫……綿虫という昆虫

師影それぞれ

三中・44回　穴吹　義教

一、孤高の絵

母校の資料館に、安藤静男先生の絵があることを知ったのは、十年ほど以前である。たまたま同館を訪ねたときに、埃を被った部屋の片隅に安置されていた。

「一途な愛」が花ことばとして語りかけているかのようだが、物理、化学を学んだあの先生と「ひまわり」の絵との結びつきがはっきりしなかった。ご退職後の余技作品だろう、ぐらいに思い、見過した。

どういう意図で、後輩に絵の心を伝えようとして寄贈されたのか、その画境を忖度できる情報がなかった。昨年の巨鼇に寄稿した拙文では、先生の画業には触れず仕舞であった。早速のこと、拙文に対して、学友の須藤宏三君（昭和二十三年卒）から電話があった。

安藤先生の思い出話に花を咲かせているうちに、われわれの在学中から、先生は画に対する見識の高かったことを知った。どこで学ばれたのか知らないが、すでに一家言の持主であったようだ。

須藤君から寄せられた、つぎの一文から、そのことが察知できよう。

〈須藤君からの手記、その一〉

安藤先生には化学を教えていただいた。化学は、私共にとって新しい科目であったが、解り易く教えていただいた。そのこともあって、化学に興味を抱き、友人にも誘われて、化学部に入部した。先生に教えていただくなかで、怖いはずの先生の優しさに触れる機会に恵まれた。

あるとき、「天然繊維を化学処理してセルロースを取り出す」という授業があった。日頃、即興で漫画の落書きに夢中になる私だが、つぎのような漫画がいたずら半

分に浮かんだ。

「身近な物での実験をしてみよう」

この寸画、席を巡視する先生の目に留まった。怒鳴られるか、と思いのほか

「面白い。この発想と表現がよい」

と意外にも褒められたのである。恐縮する私に

「これからは身近な物でもいいから、毎日一枚づつ描いてみよ！毎日だぞ」

化学の師の咎めではなく、絵画の師匠めいた言葉が返ってきた。

授業をほっ放り出しての悪戯に対する軽い罰と受け留め、自信のないまま、褒めていただきたい一念から、日課として、絵筆を走らせた。

新進の漫画家として、その名を奮っていた手塚治虫の作品が私の先生だった。

答案用紙を四ツ切りにしたサイズに、黒インクで描いていった。毎日せっせと筆を休ませず、一年ほど経った頃、一〇〇枚ぐらいに溜った。

早速、束ねて安藤先生に見ていただいた。

「ホウ、よく続いたな。どこかへ発表してみるか…」

と褒めことばのうえに、展示のアドバイスをいただいた。思いも寄らない展開だ。

三年生の文化祭には、先生の許可を得て、友人に手伝ってもらい、職員室等の廊下に、べたべたと貼り並らべて、「漫画個人展」を開らくことができた。

先生の画に関する識見と懐の深さを知り、私の生涯の良い思い出となった・・・・。

安藤先生の画業に関する資料は、伝えられるところが多くない。

昭和二十四年以降、近所に住んでいた門脇俊一画伯に私淑していたものの、師系と云えるのかどうか。

昭和三十一年以降、観音寺一高から高瀬高校へ転任され、昭和四十二年の定年退職まで、もっぱら、物理・化学の教鞭を執られた。

その後、観音寺市内で個展を開らかれることが何度あったようだ。諸作品は、知る人ぞ知るの類で、知人に寄贈された模様である。

資料館所蔵の「ひまわり」は、昭和四十七年四月一日付の寄贈と記されている。ここで興味が湧くのは、さらに二十年後のこと、師の門脇画伯がなんと、七十九才の誕生日記念として、同名の「ひまわり」を自作しているのである。師弟の両作品を見較らべることができれば、画風なども理解できるのかも知れない。が、いまとなっては、黄泉の展示となる。

門脇画伯は、天才で独学の徒と自他ともに認められていた。安藤先生も独学の徒としては、軌を一にしているようだ。

「現代の愛の不毛は、与えられることばかりをのぞむからで、犠牲をはらう精神の欠如が招いたものだ」

安藤先生の「ひまわり」はこう語りかけて止まない。

二、柔能く剛を制す

同窓会の名簿（二〇〇五年版）には、三中時代の旧職員として、教練の教官に、服部正道・中野季両先生の名が記されている。

服部先生は陸軍特務曹長（今の准尉相当）、中野先生は陸軍中尉だった。

軍人とは、言いながらそこは人間である。前者は柔というべく、後者は剛そのものの感が残っている。

柔の例として忘れられない思い出がある。

悪戯をするため、この世に生まれて来たような学友Tがいた。あるとき、柿盗人をしくじったのか、木から転落して、手指を骨折した。

生半可な治療だったとみえて、指が曲ったままの状態でTは登校した。

当時の教練は厳しく、授業をさぼることは許されなかった。「気を付け！」と号令されても、Tの指は「気を付け」どころには至らなかった。折れ曲った指は、大腿にぴったりと付くことができなかったのだ。

本来ならば「貴様っ」とぴんたが飛んでも不思議ではなかった。

その瞬間、服部先生がつかつかと、Tの傍らに佇って、ご自分は直立して、号令を発しつづけながら、盛んにTの指をリハビリしてやっているではないか、厳粛な雰囲気の下で。

このリハビリは、教練のある都度、その後、長期間続いたと記憶するが、Tの曲った指が全治した、とは聞いた記憶がない。

規律を重んずる軍事教練であっただけに、服部先生の温情溢れた沈黙の行為は、いまだに私の脳裏に焼きついたままである。

さて、剛の先生はどうだったろうか。昔日の思い出の取材を、学友に語ってもらおう、と、あちこち遍歴したものの、異口同音、悪し様に多くを語りたがらず、尻込みする友ばかりであった。

だが、捨てる神あれば何とやら、「この野郎！」と思っていない人物がいたのだ。須藤宏三君である。その須藤君より、つぎのような思い出の手記が届けられた。

〈須藤君からの手記、その二〉

一九四五年、三中に入学すると、「軍事教練」が待っていた。配属将校の中野中尉（昭和十六～二十一　教官）が担任だった。ゲートルの巻き方から始まり、敬礼の仕方、銃の持ち方などの基本動作を教え込まれた。教育勅語や戦時下の学生の心構え等も諄諄と諭された。

一学期の終り頃、突如中野教官に呼び出された。教官室へ恐る恐る入ってゆくと、私の成績表が机上に開げられていた。

「お前の成績は悪いぞ。お前の親父からお前のことを頼まれているが、これでは幼年学校などは受からんぞ！」

矢庭にお説教を食った。

職業軍人の父は、すでにその前年、再召集されていたが、それまで、笠田町の三豊農業学校で、中野教官と同じ配属将校だった。

その繋がりがあって、後事を託していたようだ。事情は飲み込めた。だが父の期待を裏切りそうな不安やら自責の念に駆られ、中野教官の激励の言葉など上の空であった。ただ恐れ入って退席した。

それから、間もなくあの八月十五日を迎えた。当時は夏休みだったが、全生徒が地域の勤労奉仕に駆り出され、草刈りに励んでいた。作業が終って帰校するや否や

「本日終戦となった」

と告げられた。負けた悔しさに、呆然としたものの、（幼年学校の受験から解放された）という安堵感が滲み出た。

その後、中野先生に再びお目にかかる機会が今日までない。誰れからも先生の音信を伝えてくれる機もないまま、六十年の時が流れた。毎年の終戦記念日には、なぜか先生の「幼年学校は受からんぞ」という励ましの声だけが耳に蘇ってくる・・・・。

ある三豊中学生の回想

三中・45回　小菅　亘恭

はじめに

私は昭和一桁の世代である。人生の大半を昭和という未曾有の激動と混乱の時代とともに歩んできたこの世代は

① 飢えに苦しみ
② 空襲に逃げまどい
③ 勤労動員でろくに勉強をせず
④ 一週間を月月火水木金金という緊張の連続で過し
⑤ 何事にも忍耐、節約、努力という言葉で辛抱を強いられ
⑥ 忠君愛国を叩きこまれ
⑦ お国のために死ぬことが本懐と教えられ
⑧ 戦後の荒廃と混乱の中を必死に勉学に励み
⑨ 日本の復興と再建のために一心不乱に働き
⑩ 年をとると後期高齢者医療制度など先行きを暗くする政策を次々と打ち出され混乱する

悲しき世代である。

戦争は私にとって決定的な体験であった。空襲による死傷者や罹災者、特攻訓練をしている若者などの情景が、セピア色の記録映画のように今でも瞼に浮かんでくる。あまりにも苛酷で悲惨なものであったため、心の奥深くわだかまって、これまで人に話すことはなかった。しかし、ドイツのワイゼッカー大統領が「我々は歴史から学びつづけ、共通の体験という実物を他の人々と分かちあうべきだ」と言ったのを聞いたとき、この悲惨な体験を語り伝えるべきではないかと考えるようになった。そこで、三豊中学（以下「三中」という）生時代を中心に当時の出来事を記すこととした。

三豊中学校に入学

私が観音寺第一高等学校の前身である旧制三中に入学したのは、太平洋戦争真っ只中の昭和十八年四月であった。三中は東讃の高松中学、中讃の丸亀中学と肩を並べる西讃の名門校であり、白線帽は若者のあこがれであった。私は、両親が料理屋を経営していたことから、商売に忙しく放任されて育ったため、小学生時代は近所の石置き場で隠れん坊遊びや琴弾公園内の銭形砂絵（寛永通宝）を塹壕に見立てて戦争ごっこをする腕白坊主であった。勉強にあまり身を入れなかったため、学校の成績はクラスで前頭の上位、三中合格はボーダーラインにあった。

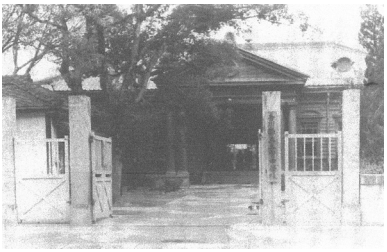
このため、一月頃から毎日朝五時頃に起こされ、眠らないよう母親監視のもとで受験勉強をさせられた。しかし遅きに失したのであろう。受験が近づいたころ、小学校の担任教師から、念のため私立校も併せて受験をしたらどうかとのアドバイスがあった。いわゆる「滑り止め」受験である。父親に相談したところ、駄目と一蹴されてしまった。母親は心配して新興神道である金光教に願掛けをしていたらしく、合格すると直ぐに岡山の本山にお礼参りに連れていかれた。

入学試験は、筆記試験がなく、内申書と体力検査・口頭試問であった。

試験内容は戦時色の濃いもので、体力検査は持久走や鉄棒の懸垂、ボールの遠投など、口頭試問は教育勅語の発布の年、石油やゴムなどの資源の輸入先などであったような記憶がある。質問する先生の中に近所の原先生（音楽担当）がおられ、優しく質問していただいたお蔭で、緊張せずに答えられた。後で同級生から聞いたところ、筆記試験の代わりに、三中の先生方が二人一組で小学校を訪問し、受験生の成績や体力、性格、家庭環境などを調査して、合否の判定材料に用いたとのことであった。

学校の制服は、昭和十二年から全国統一でカーキ色の国防色、昭和十六年から帽子は戦闘帽、それにゲートル

巻いた戦時スタイルであった。ゲートルは上手く巻かないと、歩いているうちにずり落ちてしまうことから何回も巻く練習をした。服は人絹のすぐ破れそうな生地で、ボタンは金属製ではなく陶器、履物は人造ゴムのズック靴か地下足袋であった。



卒業当時の三豊中学校正門

授業

当時の学校の様子は、同期生である小野賢治氏（元観音寺一高校長）が「校内の思い出散歩」に詳しく記述されている。それによると「正門をはいるとすぐ右手に奉安殿があった。終戦後の二十一年八月にこの奉安殿は撤去され、現在は三女の庭と呼ばれる植え込みの庭になっている。正門の旧三中本館は、明治時代の建築様式を残した木造建築であった。玄関の両脇には、エンタシス（註・ギリシアのパルテノン神殿や法隆寺の金堂の柱で有名）の柱が二本ずつ石の台座の上に立っていて、重厚な雰囲気をかもしだしていた。この石の台座は、現在は資料館前の小庭園の入口の両側に置かれているが、何故か一基の台座が分断されている。他の台座がどうなったのかは定かでない。本館を通り抜けて運動場を出る所の右側には、用務員室があり、その南面の壁には三中の校訓『至誠、進取、剛健』の額がかかっていた」と記している。

私たちは、登校すると、奉安殿に必ず最敬礼をしなければならなかった。雨でない日は毎朝朝礼があり、終りに五年生の全校週番が朝礼台の上で号令をかけて校訓を

唱え、一日の授業がはじまった。一年生から見ると、四、五年生は体は大きく、なかには髭面の者もおり、威圧感があった。道で上級生に会うと敬礼をしなければならず、それを怠ると翌日学校で殴られることがあった。

しかし多くの上級生は、下級生の面倒見がよく、相談にものっていた。出身小学校ごとに学友会があり、私も観音寺学友会に加入し、時々琴弾公園に集まって学校のこと、戦争のこと、人生の悩みなどについてご指導をいただいた。

当時も部活動が盛んであった。私は小学生の時から剣道を習っていたので、剣道部に入部した。剣道場は、明治三十五年に雨天体操場として講堂と一緒に建築されたもので、正面には神棚、窓は柱だけの吹き抜けの造りであった。

授業は、初めて習う漢文や英語に感動した。細川先生の漢文・漢詩の名講義は今でも脳裏に強く残っている。戦後、天野貞祐文部大臣が、近頃の若い者は人間が出来ていない、骨がないのは漢文を習わないからだと、漢文復活論を唱えたのも一理あるような気がする。また当時、敵性語として排斥されていた英語の授業があるとは考えられなかった。しかし、あこがれだった中学生活はあまりにも短かかった。戦争の激化に伴い、授業時間は段々と縮小され、農作業や土木事業などの勤労奉仕に駆り出されるようになった。

配属将校

当時の学校には配属将校という存在があった。大正十三年宇垣一成陸相は、軍縮による現役陸軍将校の失業対策として、配属将校の名で中学、高校、大学に配置する案を立て、翌年、田中義一内閣のときに、「陸軍現役将校配属令」により実施に移された。

だが、配属将校の制度は、失業対策という問題にとどまらなかった。長谷川如是閑がいったように「教育に対する軍事的侵略のはじまり」であった。太平洋戦争がは

じまった昭和十六年からは軍事教練が一層厳しくなり、私たち一年生も、不動の姿勢の頭の位置、目線のおき方、腕の伸ばし方、指先の位置、膝がピッタリと密着しているかどうか、両足の開き方の角度、それは寸分のズレも許されなかった。不動の姿勢を卒業すると、次は整列、行進、敬礼、その細かいこと、うるさいこと、とくに戦争末期、若い現役の配属将校がやってくると、威張り散らし、まさに軍国主義の悪夢のはじまりであった。しかし、なかには体調の悪い生徒には配慮した服部予備少尉のような人情味のある配属将校がいたことは救いであった。

配属将校の大きな目的の一つは、生徒を軍関係学校に進学させることであった。私も、幼年学校受験を勧められ、善通寺師団で受験したが、幸か不幸か不合格であった。

戦時中の衣食住

平和で暖衣飽食の世代に生まれ育ったものにとって、戦争とは言葉としての意味は理解できても、それが日常生活にどのような影響を及ぼすものであるかは、体験しないので分からないであろう。

生活のあらゆる面が、「聖戦完遂」のため極端に統制された。それは「贅沢は敵だ」というスローガンからはじまって「欲しがりません勝つまでは」という言葉が示している。

① 食

戦争が長引くにつれて、衣食住の面でも厳しい制約を受けるようになった。昔から経済の指標であった主食の米は、一人一日三合の消費量であったが、昭和十六年四月から六大都市で、昭和十七年からは全国で、一人（十一歳から六十一歳まで）につき二合三勺の割当制となった。戦況の悪化に伴い、台湾や朝鮮からの米の輸入が途絶え、そのうえ軍隊の食糧供給を最優先としたためであ

った。さらに配給は二合一勺に減らされた。

また、各家庭では精米をするようになった。これは米が七分搗き、さらに五分搗きになったことによるものである。理由は健康のためということであったが、意地悪く考えると、搗くと量が減少するためであったと考えられる。五分搗きの米には玄米の皮が五〇％も残っていたため、舌触りが悪いうえに食べにくく、年寄りや子供は消化不良でお腹をこわすようなこともあった。

政府は、精米業者には七分搗きあるいは五分搗き以上の精米を禁止したものの、個人が搗くことは許していた。このため、各家庭ではそれぞれが精米をはじめた。それは配給米を一升瓶に入れて、上から専用の棒で突き、米同士の摩擦で米粒の周囲の皮を取り除く方法である。私も米を搗くのが日課の一つとなった。

食料不足は米だけではなくあらゆるものに及んだ。当時の資料によると、塩が一人当たり一日茶さじ二杯半、醤油大さじ二杯半、味噌が中くらいの梅干二個分の大きさの配給と記されている。

精白しないまま配給された玄米を一升びんに入れて棒でつくと、2時間ほどで7分づきになった。

② 衣

衣料も配給制となったが、衣料は米と違って人によって欲しいものが違うため、点数総合切符制となり、昭和十七年二月から実施された。都会居住者は一年に一〇〇点、郡部居住者八〇点の点数内で衣料品の購入が認められた。背広三つ揃五〇点、学生服（上下）三二点、国民服二〇点、学生オーバー四〇点、スカート一二点、Yシ

ャツ一二点、セーター二〇点、靴下二点、毛布四〇点、布団二四点などであった。ただし、結婚する女性は別に五〇〇点がとくに増配された。また、靴も人造ゴムのズック、人絹の靴下、木、竹や陶磁器のボタンなど代用品を使用しなければならなかった。

なお、外出する時は、男性は国民服にゲートル巻き、女性は「もんぺ」を穿かなければならなかった。パーマは当然禁止である。

③ 煙草

煙草も配給制になった。最初は成人一日当たり「金鵄（ゴールデンバットを改称）」五本であったが、その後紙巻煙草は配給されなくなり、煙草の葉を刻んだものと、それを巻く紙が別々に配給されるようになった。自分で煙草を巻きなさいということである。父はイタドリ、ツバキの葉などが煙草のような味がするとして、それらを乾燥させて刻み、煙草の葉と混ぜて吸っていた。また、コンサイス英和辞典の紙が上質紙のため、煙草がおいしく吸えるといって、手巻き用の紙として利用していた。

④ 金属回収

昭和十七年五月には「金属回収令」が発動された。金属回収運動が行われ、門、扉、柵、寺の鐘、指輪、薬缶、火鉢、バケツ、洗面器、文鎮、ボタン、金網などあらゆる金属製品の供出が行われた。

〔戦争中のくらし〕　太平洋戦争は、国民の日常生活をも極度に圧迫した。写真は、「供出」した金属器や配給品の不足をおぎなった代用品の数々。

高松市では、次のようなポスターを配布した。

今ぞ征け　来たぞ銅鉄総動員
この火鉢　あの鉄瓶も赤だすき
鉄出して　銅と押し出す忠義者

代用品としては、陶磁器、セルロイドなどの製品が作られた。戦争末期になると、鉄不足は深刻になり、手榴弾も陶器で作られるようになったが、実戦には用いられなかったと聞いている。

インフレの昂進

昭和十九年、サイパン、グアムなどマリアナ諸島の陥落に伴い、マリアナ基地からの本格的な空襲がはじまり、全国各地が戦場となった。国民生活は食料や衣類の不足とインフレにより、破綻の淵に追い込まれた。

闇物価を考慮した小売物価指数は、昭和九年～十一年を一〇〇とすると、昭和十六年は二一〇、十七年二七三、十八年三二一、十九年四〇一、二十年七〇三にまで達した。これに対して賃金は統制によって厳しく抑えられ、賃金指数は昭和九年～十一年を一〇〇とすると、昭和十六年で既に七九・一であったものが、十七年六五・九、十八年六五・八、十九年六〇・〇、二十年四一・二というように、低落の一途を辿った（中村隆英「戦前期日本経済成長の分析」）。

具体的には、昭和十九年七月精米一升の公定価格が五〇銭であったものが闇では二〇円、二十年七月には二五と五〇倍にもなった。砂糖は公定価格一斤六〇銭が、十九年には闇で三四円、二十年には一七八円と二八〇倍に跳ね上がっている。塩も六〇倍、食用油七〇倍、石鹸にいたっては一個一〇銭だったものが二二円にもなり、それも手に入りにくいため、風呂屋で油断していると盗まれることがあった。煙草も大幅に値上げされ、「金鵄上がって一五銭、栄えある光三〇銭、遥かに仰ぐ鵬翼（ほうよく）は二五銭になりました。ああ一億はみな困る」と「紀元二六〇〇年奉祝歌」の替え歌が流行したのも、この頃であった。

学徒勤労動員

三中在学中において最も強い印象として残っているのは広島県呉市広町での勤労動員であった。国においては兵力を確保するため、学徒出陣（理工・教員養成系以外の学生の徴兵猶予停止）、徴兵年齢の二十歳から十九歳への引き下げ、兵役義務年限の四〇歳から四十五歳への拡大、十四歳～十五歳以上の少年の志願による少年兵募集、朝鮮での徴兵実施などを行った。これによって軍人数は、次のように大幅に増加した。

	陸軍	海軍	合計
昭和十五年	一五〇万人	二二万人	一七二万人
十六年	二一〇	三一	二四一
十七年	二四〇	四三	二八三
十八年	三一〇	七一	三八一
十九年	四一〇	一二七	五三七
二十年	五五〇	一六九	七一九

このため、労働力は不足するようになり、学生の勤労動員が行われるようになった。昭和十九年三月「決戦非常措置要綱」が閣議決定され、男女を問わず中学校以上の生徒三四〇万人、香川県下でも男子八〇〇〇人、女子一万人が授業を停止して勤労動員されることになった。それでも労働力は不足し、朝鮮や中国から労働者が強制連行され、炭鉱や土木事業に従事させられた。

三中でも

五年生は、昭和十九年八月から岡山県玉野造船所

四年生は、観音寺海軍航空隊の飛行場の設営作業、さらに二十年二月から愛知県中島飛行機工場

三～二年生は、観音寺海軍航空隊の飛行場の設営作業

にそれぞれ従事した。

昭和二十年二月、私たち二年生は、「整備兵たる中学生」になるべく、県外へ派遣されることになった。二月二十六日、雪が積った寒い朝、観音寺港に集合した二年

生二〇六名は、親元を離れての初めての県外生活に期待と不安を抱きながら小型木造船で呉市に運ばれ、即日、愛知県岡崎航空基地に移動した。しかし、当基地への空襲が激しくなったという理由で、一泊しただけで再び汽車に乗せられ、呉まで戻された。そして第十一海軍航空工廠の飛行場で三ヵ月の飛行機整備訓練がはじまった。

訓練は、整備班、射爆班、無線班の三班に分けられ、それぞれ勉強することになった。私は照準器や機銃・爆弾の整備を担当する射爆班に配属された。訓練は午前中は授業、午後は実習や手旗信号の練習などであった。

呉での生活は、田舎でのんびり育った私たちにとって、苛酷なものであった。整列が遅いと教官から殴られ、「要領が悪い」といって腕立て伏せや飛行場一周の駆け足などの制裁（海軍では「罰直」といっていた）が毎日のようにあった。今日でいう「いじめ」である。

最近、子供が体罰を受けて鼓膜が破れるなどの報道がある。勿論体罰は良くないが、殴り方、殴られ方の要領も悪いのではなかろうか。教官は殴るとき「足を開け、歯をくいしばれ」という指示をして全員が殴られたため、殴られる方も、心と体の準備ができており、怪我人は出なかった。

夜は基地から徒歩三〇分ほどの距離にある町田寮で宿泊した。寮は二階建てで、各部屋に十六人詰め込まれ、共同生活がはじまったが一番こたえたのは食事の量が少ないことであった。食べ盛りの少年にとって食事の量が少ないことは悲惨であった。しかもその内容もひどかった。雑穀混じりの飯、海藻が浮かんだ塩味の汁、お菜は魚の煮つけが多かったように記憶している。ご飯では量が少ないがお粥にすると量が増えるので、下痢をしているといってお粥にしてもらったこともあった。しかし、食べた直後は満腹感はあるが、水気の腹一杯では直ぐにお腹が減り、かえって空腹に悩まされた。

悩みの第二はシラミであった。衛生環境が悪かったため、何時の間にかシラミが湧くようになった。良寛はシ

ラミを殺さず自分の懐に入れたと何かの本で読んだことがあるが、私たちにそのような雅量があろうはずはなく、痒くて寝られないのには参った。シラミは体長二ミリ程度の昆虫で、人間の頭に寄生する頭ジラミと下着に付着する白い色のコロモジラミがある。私たちは丸坊主なのでアタマジラミが取り付くことはなかったが、コロモジラミは下着の縫い目に住みついていた。このため、天気の良い日は全員が裸になって日光浴をしながらシラミ取りをしている風景は、思い出すだけでもおかしい。

空襲

学科訓練が終了し、実地訓練に移った。広い格納庫の片隅で赤とんぼ（九三式中間練習機）のエンジン装置や照準器などの整備がはじまった頃、アメリカ軍艦載機による空襲があった。昭和二十年三月十九日朝のことであった。呉は一五万余の小都市であったが、鎮守府のある軍港であり、海軍の工廠・空廠の軍事施設があったことから、アメリカ軍の襲撃を受けたのである。

この空襲は、マキン、タラワ攻略戦、マリアナ沖海戦、沖縄の那覇空襲、レイテ沖海戦、硫黄島攻略戦などに加わった第五八機動部隊が、やがて開始される沖縄上陸作戦の前哨戦として、呉に停泊している軍艦を狙って攻撃してきたものであった。

その頃呉には、次のような軍艦がいた。

戦　艦　　大和、伊勢、日向、榛名

航空母艦　天城（昭和十九年竣工）龍鳳（潜水母艦を改造）、海鳳（南米航路に就航していたアルゼンチン丸を改造）

巡洋艦　　利根、大淀、矢矧

それに激戦をくぐり抜けて無傷で終戦を迎えた駆逐艦・雪風など多数の軍艦が停泊していた。私たちは軍港の傍を通るときは、窓のブラインドを降ろして目隠しされていたが、それでも多数の艦がいることは承知しており、連合艦隊健在なりと思っていた。しかし、戦後、知った

ことであるが、当時、日本海軍は重油が不足し、軍艦を動かすことはできなかった。また、航空母艦に乗せるべき飛行機も不足していたため、大和など一部の艦を除き、他の艦は対空砲台としての役割を担わせ、要員だけを残して、他の乗組員は配置換えになっていたのである。

三月十九日の朝、いつものように防空頭巾を肩にかけ、軍歌を歌いながら飛行場へ向かっていた。飛行場の衛門に近づいたとき、突然、後方の上空でパパーンと高射砲の炸裂音がした。後ろの山の方を見ると、蚊のようなものがわんさと飛んでいる。と思うと警報のサイレンが鳴った。警戒警報抜きのいきなりの空襲警報である。攻撃してきたのは、土佐沖の機動部隊から発進してきた延べ三五〇機の艦載機である。三集団に分かれて、呉軍港停泊中の軍艦をはじめ私たちの飛行場、工廠や空廠を攻撃してきたのであった。蚊のように見えたものが一列縦隊になって急降下してきたので、私たちは、急いで傍らの黒瀬川の土手の斜面に抱きつくように伏せた。艦載機はずんぐりとしたグラマン機やカーチス急降下爆撃機であった。

周囲の山々に配置されている高射砲陣地や軍艦から間断なく打ち上げる高角砲弾が上空で破裂し、飛散した弾片が地上に落ちてくる。遂に戦艦から主砲による対空弾の斉射がはじまった。第一波は六～七〇機の大編隊で、凄まじい弾幕をかいくぐって停泊している軍艦や飛行場を爆撃している。爆弾の破裂音が腹にひびいてくる。しばらくすると、少し慣れてきて、敵機の行動が観察できるようになった。敵機は山の斜面を這うように急降下し、爆弾を投下すると沖合いで機首をあげる運動を繰り返していた。

攻撃が終ったので、やれやれと飛行場に入った途端、第二波の攻撃がはじまった。急いで防空壕に行くと満員で入れない。うろうろしていると、近くの兵士が「危ない。早く燃料タンクの陰に隠れろ」と叫んだので、コンクリート造りの頑丈な燃料タンクめがけて走った。黒澤

明の「七人の侍」で加東大介扮する侍が「戦というものは走れるだけ走るものだ。走れなくなったら、それは死ぬときだ」というせりふがあったが、私たちも必死に走った。燃料タンクにドドッと機銃掃射の弾丸の当たる音がする。私たちを狙ったものであった。

十一時過ぎ、ようやく攻撃が終った。爆撃の被害は大きく、資料によると、投下爆弾一三九個、焼夷弾一〇四個及び機銃掃射などにより多数の死傷者が出たようである。飛行場も格納庫は鉄骨が弓のように曲がって倒壊し、滑走路には大きな爆弾の穴が多数できていた。軍艦も被害が出たようである。戦後資料を見ると、戦艦伊勢、日向、巡洋艦大淀が直撃弾を受けて火災が生じたが直ぐ消し止めたとある。死傷者が多数出たなかで私たち三中生に一名の犠牲者が出なかったのは奇跡であった。

この日から、私たちの仕事は大きく変わった。破壊された施設の跡片付けと防空壕堀りが主な仕事になった。三月末、引率の小林先生から「君たちは試験を免除され、全員三年生に進級した」と聞かされたが特別な感慨はなかった。

二回目の空襲は、五月五日であった。一〇時過ぎ、マリアナ基地から出発したB29の大編隊（一三〇機）による空襲である。この空襲は主として私たちのいる第十一空廠を狙ったものであった。避難命令が出たので、小高い山腹に掘られた横穴式防空壕に移動した。中では工作機械が多数設置されていて、必勝の鉢巻をした他校の中学生が飛行機の部品製造に取り組んでいた。暫くすると、凄まじい轟音とズシンズシンという体にひびく地ひびきがした。爆弾が破裂しているのであろう。空襲が終って壕の外に出てみると、いままで無傷であった巨大な海軍空廠の施設は滅茶苦茶に破壊されていた。このため、戦闘機・紫電の生産は四月の二五機から一挙に六機に減少したとのことであった。

観音寺航空隊

昭和二十年五月二十八日、私たちは観音寺航空隊に移動になり、自宅から通うことができるようになった。毎日学校の裏手にある桑山村作業所本部（現在の学校第二運動場）に集合し、点呼を受けたのち、観音寺航空隊に通うことになった。

この基地は、昭和十八年、柞田、上出、下出、常盤、出作、木之郷などの農家三五〇戸を立ち退かせ、農地一〇五ヘクタールを潰して飛行場としたものである。昭和十八年二月着工、二十年三月完成し、練習航空隊として第十二航空戦隊に編入され、練習機による特攻訓練基地とされた。

飛行機は、九三式中間練習機、オレンジ色に塗られていたことから通称赤トンボといわれた。九三式の名称は、「日本書記」に記載されている神武天皇即位年を元年とする「皇紀」（昭和十五年が二六〇〇年に当たる）の年号から名づけられたものである。

霞ヶ浦海軍航空隊所属の九三式中間練習機（陸上型）

例えば、名機といわれた「ゼロ戦」は皇紀二六〇〇年、九七式艦上攻撃機は皇紀二五九七年、九三式中間練習機は皇紀二五九三年にそれぞれ採用されたことから名づけられた。しかし、開戦後の昭和十七年からは製造年の隠匿と防諜の意味を兼ねて、これまでの命名法は廃止された。それ以後は、機種ごとに意味をもつ名称を正式名とした。それによると、戦闘機は甲機（艦上戦闘機）、乙戦（局地戦闘機）、丙戦（夜間戦闘機）の三種に分け、各々風、雷、月が付く名称とした。例えば、烈風、雷電、月光などである。また艦上攻撃機には山（例えば天山）艦上爆撃機には星（例えば彗星）がつけられた。

本来、戦闘に適さない低性能の練習機が特攻機に採用

されたのは、

・航空機が不足しており、少ない新鋭機は本土決戦用として温存する必要があった

・練習機はアルコールを混入した粗悪な燃料でも飛行が可能であった（八〇〇本の松から航空機一時間飛行できる松根油が採取できた）

・高角砲が当たっても布を突き破るだけで破裂しない

・速度が遅いため、目標に狙いをつけ易い

などがあげられるが、性能が悪く、爆弾も軽いものしか搭載できない練習機では、目標に到達するまでに敵戦闘機の餌食になり、また運よく敵艦に体当たりしても効果はあまり期待できないと考えられる。資料では、駆逐艦一隻が撃沈されたとのことである。観音寺航空隊では特攻出撃する前に終戦を迎えた。

基地では、練習機の整備を行っていたが、あるとき乗ってみないかといわれ、エンジンをかけ操縦桿を握らせてもらった。エンジンのブルブルという振動と操縦桿の感触は忘れることのできない感激であった。基地での生活は呉とは異なり、制裁というものはなく、休憩時間には車座になって教官から戦争の体験談の話を聞くなど厳しいなかでも楽しい毎日であった。基地は戦後、引揚者の開拓地として大蔵省が開放し、飛行場設置前と同じく水田地帯となった。

郡内にはもう一つ海軍航空基地があった。詫間海軍航空隊である。昭和十六年に着工し、十八年六月から詫間海軍航空隊として開隊したもので、水上飛行機の基地であった。この基地からは、二十年四月に水上偵察機による特攻機が出撃している。この基地は戦後、詫間電波工業高等専門学校や地元企業に使われている。

ある夜、父は戦争に非協力的として憲兵隊に連れて行かれた。母はおろおろしていたが航空隊司令に電話して、憲兵隊への働きかけをお願いし、翌朝、帰されてきたが、殴られたのであろう、顔は腫れあがっていた。父は連行

の理由をいわなかったが、我が家が海軍航空隊の指定料亭となっていたため、食料に不自由しなかったことによるやっかみの投書によるものではないかと思われる。

海軍予備学生

私の家は料理屋をしていたことから、観音寺航空隊司令の菅原大佐をはじめ将校の方々がよくこられていた。このため、それらの方々からお話を聞く機会があった。そのなかで印象に残っているのは特攻訓練をしていた予備飛行学生の人たちであった。わずかな飛行訓練で特攻に参加する飛行士官である。特別攻撃いわゆる特攻は、当時は英雄視され、もてはやされたが、今にして思えば美談でも英雄的行為でもない。特攻とは「決死」ではなく「必死」であり、残虐な自爆行為である。形式的には志願制であったが、間接的な強制、実質的には命令で行われた。

特攻機による戦死者の八五％が予備学生であったといわれる。また、終戦の時、職業軍人である海兵出身の職業軍人は、戦犯になる怖れありとして、終戦処理を予備学生出身の将校に任し、いち早く離隊した。このため予備将校が二名、私の家に下宿して航空隊の残務処理に当たっていたが、おかしなことであった。

終戦の日

今でも鮮明に覚えているのは、昭和二十年八月十五日が雲ひとつない青空であったということである。前日より、明日正午、重大放送があるとの予告があり、私たちは正午前、隊本部前に整列した。正午の時報に続いて、放送がはじまったが、雑音がひどく聞き取りにくく、しかも難解な文語体であった。それでも戦争に負けたということだけは理解できた。

放送が終ったあと、周囲の状態がどうであったかということは全く覚えていない。放心状態にあったのであろうか。そこだけが空白になっている。一億総玉砕といわ

れ、多くの方々が亡くなり、私たちもいずれ死ぬだろうと思っていただけに、敗戦のショックは大きかったのであろう。張り詰めていた気持ちが一度に抜けていった。暫く経つと、戦車に竹槍で向かっていかなくていいんだ、空襲がないんだ、もう死ななくていいんだと考えるようになった。

二十年の秋の夜、残務処理の担当者が数名のオーストラリア兵を連れて会食にやってきた。初めて見る外国人は、大男で威風堂々としていた。きちんとアイロンをかけた軍服を着て、シェービングクリームの香りを漂わせていた。ついこの間まで「鬼畜米英」と教えられていたが、見ると聞くとは大違いで、給仕する女性に悪ふざけするわけではなく、日本の軍人よりはるかに紳士であった。

この頃から、文学に興味をもち、父が所蔵していた文学全集を耽読するようになった。いずれも戦前に発行されたもので伏せ字があった。森鴎外の「イタ・セクスアリス」や田山花袋の「布団」などはどきどきしながら読んだことを覚えている。やがて日本文学からロシア文学に関心を持つようになり、ドストエフスキーの「罪と罰」や「カラマゾーフの兄弟」に夢中になった。この青春時代のものに憑かれたような読書が、今日の大きな心の支えになっていると思っている。

戦争責任

敗戦のあと、天皇の戦争責任について、父親と激論をかわしたことがあった。この戦争によって軍人・軍属二三〇万人が戦死し、民間人八〇万人が空襲や原爆で亡くなった。また全国で一〇〇以上の都市や町が戦災被害を受け、罹災者は一〇〇〇万人を超えている。天皇は日本国の最高責任者として責任を取られ、退位されるべきだと主張したのに対し、父親は怒って反論してきた。天皇のお立場を説明されたような気がするがその時は納得出来なかった。

しかしその後、歴史を勉強するにつれ、天皇のお立場では止む得なかったのではないかと思うようになった。昭和天皇が終戦の年から一六五日に及ぶ地方巡幸をされているが、これは死者や罹災者に対する鎮魂の旅、悔恨の旅ではなかったろうか。

しかし、何故こんな無謀な戦争をはじめたのか、太平洋戦争とは一体何であったのか、戦後六〇年の歳月が流れたが、未だこの問題についてきちんとした答えを出していない。私が歴史に興味をもち、研究をはじめた動機の一つに、それを勉強したいということもあった。

戦後の社会情勢

① 食料危機

戦時中から物資は不足していたが、それでも政府の威令が行き届いていたので、公定価格による食糧その他の配給が細々と続いていた。しかし戦後、権力がガタガタになると、配給は殆ど形ばかりのものとなり、人々は餓死しないために食糧の買出しに走らざるをえなかった。とくに敗戦直後に収穫期を迎えた二十年度産米は、天候不順のためわずか五八七万トンであった。さらに敗戦により農民の米の供出意欲と義務感を喪失し、供出せずに闇に流して利ざやを稼ぐようになったことも不足に拍車をかけた。政府は増産や供出の割り当てを増やすなどして食糧の確保に努めたが、昭和十四年のピークの一〇三五万トンに対し、五七％に落ち込んだため、二十一年は深刻な食糧危機の年になった。配給基準量は一人一日二合三勺となっていたが、麦類、小麦粉はいうに及ばず、甘藷、馬鈴薯、大豆粕、トウモロコシ、カボチャなどの代用食を含めての量であり、しかも大都市では大幅に遅配した。

このため、買出しの闇米などなしでは生きていけなかった。二十年、「ゲーテとの対話」の訳者で知られた東京高等学校の亀尾英四郎教授が栄養失調で死亡、その二年後の二十二年十月には東京地裁の山口判事が餓死した。

山口判事は、次のような日記をつけていた。「食糧統制は悪法だ。しかし法律としてある以上、国民は絶対に服従しなければならない。自分はどれほど苦しくても、闇の買出しなんかやらない。自分はソクラテスが悪法だと知りつつも、その法律のために、潔く刑に服した精神を敬服している…。敢然と闇と戦って餓死するのだから、自分の日々の生活は全く死への行動であった」

これらの人は例外として、人々は、リュックサックに衣類を詰め、農村に買出しに走った。まるでタケノコの皮を一枚ずつ剥ぐように衣類が食糧との交換に消えていくのでタケノコ生活と呼ばれた。また、僅かな空き地があれば耕して甘藷など栽培して食糧の足しにしていた。私も母の親戚の農家の農作業の手伝いをして商売の材料である米、野菜、魚を確保した。

② インフレの昂進

平成五年、ブラジルに出張したとき、この国のインフレは凄まじいものであった。物価上昇率は年率一五～一七％といわれ、サラリーマンは給料を貰うと直ぐに物資を購入しないと、値上がりで買えなくなる恐れがあった。そのため治安も非常に悪かった。だが日本の敗戦後のインフレはもっと酷かった。戦時中、日銀券の発行高は急増し、敗戦の年の二十年八月には発行高三〇二億円であったものが、四ヶ月後の十二月にはなんと五四五億円となった。戦時中は、政府の力で物価はかなり規制されており、日中戦争中は年率一三・〇％、太平洋戦争中は最初の三年間は三・四％とかえって鈍化した。それが昭和十九年頃になると、再び上昇しはじめ一二・〇％となった。さらに敗戦の年の二十年には国家に対する信頼感が根底から覆され、国民は我がちにヤミを行うようになり、インフレは一時に高まった。

小売物価は四七％と激しく上昇した。二十二～二十三年には対前年比は三倍に上昇した。昭和二十年七月の日本銀行調の闇値と配給（公定）価格との比較は、次の通りである。

「米七〇倍、　大豆三〇倍、　甘藷二二・五倍、
ビール一六・五倍、砂糖二四〇倍、木綿四〇倍、
絹一〇倍、　代用靴四四倍、石鹸二〇〇倍、
靴下七五倍、　木炭四〇倍、　薪二〇倍」

インフレの激化に伴い、人々は預金を引き出して物資の買い漁りに走った。このため、銀行は企業の貸し出しが焦げ付いたまま、巨額の預金払い戻しの請求を受けることになり、破綻は必至となった。政府は昭和二十一年二月、買出しの防止とインフレ対策として、次のような預金封鎖と新日銀券の切り替えの措置をとった。

① 銀行、信託などの預金、郵便貯金などは、一斉に支払い停止とする。

② 流通中の日銀券は、三月二日限りで失効する。

③ 新円を発行し、二月二十五日から三月七日まで旧円と交換する。交換比率は一対一とする（新円切り替え）。

④ 新円交換の限度は、個人について一人一〇〇円までとし、残余は預金封鎖する。

⑤ 封鎖預金からの払戻し（新円）の限度は、個人については生活資金として所帯主三〇〇円、所帯員一人につき一〇〇円とする。

しかし、日銀券の印刷は間に合わず、当分の間は、旧日銀券に証紙を貼って流通させた。私も父から紙幣に一枚ずつ証紙を貼る作業を手伝わされた。

インフレは、昭和二十四年のドッジの超均衡予算で収束しようとしたが、日本経済は一挙にデフレに落ち込んでしまった。しかし、翌年勃発した朝鮮戦争による特需景気により経済は回復の方向へ進んでいった。

授業の再開

昭和二十年九月十七日、授業が再開された。五年生は前年、繰上げ卒業していたから最上級生は四年生である。授業は戦時中とうって代わって、軍国主義また軍国主義的な傾向のすべてが悪と見なされ、排斥の対象となった。

奉安殿も天皇神格化否定の一環として、占領軍の指示により撤去された。また、それまでの「地理・歴史・修身・武道・教練」の授業は、占領軍の指示により禁止され、修身は社会に変わった。教える先生も戸惑ったと思われるが、教えられる生徒も違和感を感じた。考えてみると、軍国主義時代に生まれ、軍国主義教育の中にどっぷり浸っていた私たちが、戦後、掌を返したように民主主義への転換を迫られたのだから、違和感を感じないほうがおかしい。

二十一年五月、井村校長が離任し、臼杵校長が着任した。暫くすると、五年生からストライキをしようとの働きかけがあったが、事前に発覚して先生から止められたことがあった。ストライキの理由は、校長が横暴だという理由であったような気がする。

昭和二十三年三月二十四日、私たち五年生二三一名は卒業した。六・三・三制と呼ばれる教育改革が実施されるに伴い、三豊中学校は二十二年四月一日から三豊高等学校と改変することになった。このため私たち四五回生は西讃の名門校として長く親しまれてきた三中の最後の卒業生となったのである。約半数の者が高等学校三年に編入され、残りの者は進学、就職への道を選んだ。

三豊高等学校

「六・三制野球ばかりが上手くなり」と詠まれた六・三・三制は、後期中等教育の大規模な量的拡大をもたらした。文部省の資料では、昭和十五年における旧制中学校の進学率は約七％で、高等女学校を含めても二五％であった。ところが二十五年には四〇％に達し、二十九年は五〇％、四十年には七〇％、平成十一年には九七％と高等学校は国民皆教育機関ともいうべきものとなった。

私を含め三年に編入された者は、中学・高校と六年間、普通の人より長く在学し、しかも勤労動員で生死をともにしてきたという意識から団結は強かった。とくに戦後の急激な改革は、政治や社会問題に関心をもつようにな

り、志を同じくする者が集まって社会部を結成しようということになった。そして政治から法律、男女同権問題などの議論を行った。民主主義とか男女同権という言葉が輝いて聞こえた時代であった。

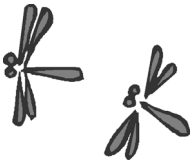
その頃、「青い山脈」の新聞連載がはじまった。高校生の男女交際を巡る騒動を描いた青春小説である。新聞を読みながらプラトニック・ラブに憧れ、それに刺激されたわけではないと思うが、ある日部員から三豊高等女学校にも社会部があるので共同研究をしようではないかという提案があった。

みんなも賛同したので、共同研究の申し込みをしたところ、ＯＫの返事があった。そこで部長以下三名が女学校へ行くことになった。はじめての女学校訪問なので緊張しながらおそるおそる訪ねると、先方も部長以下数人の方が出てこられ、共同研究を快く承知してくれた。共同研究がはじまったが、議論するより、女性と一緒に話をすることが楽しく、何を議論したか今では覚えていない。

現在、デカンショ踊りが観一高名物となっているが、このデカンショ踊りが校内イベントとして行うようになったのは、昭和二十三年十月の文化祭が最初であった。当時、私たち高校生には、旧制高校生に対する憧れがあり、わざとバンカラぶって高下駄を履いて闊歩していた。それからヒントを得たのであろう。「今度の文化祭でデカンショ踊りをやろう」ということになった。その内容は、三年生一同が集まり、運動場で太鼓を叩き、父親から借りてきた羽織袴に藁縄のタスキをかけて、旧制高校のストームのように、バンカラに歌い、踊る。一遍上人の「踊念仏」は、一種の人間解放運動であったが、デカンショ踊りも戦中の抑圧感からの解放を謳歌しようというものであった。次いで町を練り歩こうということになり、警察署へ街頭行進の許可を受けに行った。警察もはじめてのことで驚いていたが、快く許可をしてくれた。先生方は私たちを信用していたのか、この行事に一切規

制しなかった。

昭和二四年三月、三年生一〇二名が卒業したが、式がどういう内容のものなのか、みんなとどのような別れの挨拶をしたのか、全然記憶にない。



豊浜もしもし談義

三中・44回　穴吹　義教

◎　まえがき

過日のこと、同窓会の豊浜支部で総会があった。席上、講演の役を仰せ付かり、「豊浜と１４８０」と題して、雑学を披露させていただいた。他ならぬ「故郷にかかわる電話の語呂合わせ」を、一席弁じたわけだった。

自宅の電話に語呂という貴重な付加価値をつけて、子子孫々へ継承して欲しい、という私のささやかな願いと期待を伝えたかった。

語呂といっても持主の好みがあって、一概に良し悪しを論ずるべきではないが、一般の家庭に相応しい言葉は、探せば存在するものだ、と私は信じている。

講演の事前準備として、故郷の同窓（注）（五八〇名）の電

話について、私流の語呂合わせを試み、それをベースにして、興味の湧きそうな話題を提供しながら、持ち時間を費した次第である。

その一部をここに紹介させていただくこととした。

（注）以下同窓といえば、豊浜町在住の観一高卒業生を指す。

◎　１４８０（とよはま）

電話番号は、単なる数字の羅列にしか過ぎないで、そこからは、何らの感興も湧くものではない。だが、一旦語呂合わせを施してみると、忽ち生気を取り戻し、さまざまな語りかけを生み、「舞踏会の手帳」さながらの誘いをする。

１４８０に纏わる語呂を辿りながら、私の思い出を手繰ってみたい。

1．「トヨハマ」は、私の生まれ育った古里であり、三中を卒業するまでの青春の思い出の泉がある。

いまでは、数名の学友しか住んでいないが、数多くの友人が豊浜とともに、私の脳裏を去来する。

2．「イシヤマ」、この語呂からは、三中の同期の石山良一君（大阪在住）の顔が浮かんでくる。在学中は、それほど親しい付き合いはなかったが、毎年一月十一日の同期の集いで、顔を合わせているうちに親しさを取り戻した。散会後「かんぽの宿」で、酒盃を交わしているが、いつの日か彼が顔を出さなくなれば、私の同期会への足も鈍ることだろう。

「石山」の姓の連想は、さらに飛躍を呼ぶ。

東京都内には、１４８０を持っている「石山」さんが、少なくとも二軒ある。

3．１４８０の末尾の０を省くと、語呂は、「イシヤ」が残り、「石屋」と「医者」の漢字が生まれる。「石屋」は、高松市内の香川石材センターが１４８０を持っているし、「医者」には、徳島市内に０１４８番を持つ医院が一軒あるが、東京にも同じ番号で、治

療研究所が一つ。

なお、ついでだが、同じ東京で０１４８を、伊予屋と名乗る店がいつの頃からか持っている。伊予発祥の屋号らしいので、多少興味がある。

４．豊浜町内で、１４８０番の持主として同窓がいないので、話はこの辺で。

◎　三豊讃歌

三中の校歌のなかに
三豊の平野草も木も／直ぐなるなかに顯れて……
という件りがある。応援歌でも盛んに
ヴィクトリ、ヴィクトリ、三豊！
と放歌したものだ。

三豊中学がなくなり、三豊郡が消えて、三豊市が生まれ、辛うじて「ミトヨ」の地名をとどめてはいる。古里でないが「ミトヨ」が西讃から消えていないだけに、救われた思いでいるのは、私のみではあるまい。

ところで、「ミトヨ」の立役者は、３１０４番ということになるが、若しやその番号を持っている三豊××社があるのではなかろうか。好奇心の趣くままに、全国の電話帳を隈なく調べてみた。それがあったのである。しかも古里の豊浜にちゃんとあった。北原の三豊ケーブル・テレビ社の電話である。３１０４番。

燈台下暗しの譬えを地で行く思いである。

◎　南と港町

３７０３番の同窓が関谷に住んでいる。この電話の語呂は、「南」とも「港さん」とも通じるが、地主に地縁、人縁がないと、この語呂に対する愛着は今一であろう。南は、私にとって生家の属する字である。港町とは、白坂川を隔てて隣りであるだけに、思い出が髣髴と湧き上ってくる。

早い話がミナミもミナトも、電話番号の３７に１が付くのか３が付くのかの違いだけだが、語呂合わせには、

両者ともよく愛用されているもの。その一例を東京の電話帳で確かめると、まず、「ミナミ」さんであるが、０３７３が四軒、３７３０が二軒、さらに３７３３が一軒。

「ミナト」さんも同じである。３７１０が十軒もあるのだが、０３７１は、一軒のみ。

南町、港町、いずれも旧友らが消息を絶っているが、あの友、この友、みな童顔のままである。

◎　桜井の訣別

明治の歌人で、国文学者の落合直文の作詞とされている唱歌のタイトルである。

青葉茂れる桜井の　　里のわたりの夕まぐれ
木の下蔭に駒とめて　世の行く末をつくづくと
忍ぶ鎧の袖の上に　　散るは涙かはた露か

３９６１という番号を耳にすると「桜井」の語呂とともに、この「桜井の訣別」の調らべが耳底をかすめて、楠木父子の別離の心情に思いを至すのである。小学唱歌の影響力を改めて噛みしめることしきり。

全国を探してみると、東京と熊本に「桜井」なる一屋号の店がそれぞれ３９６１番を持っている。時代は古くなったものの「桜井の訣別」の唱歌を幼い頃に歌った方々だろう。重宝にしているようだ。

たかが四桁の番号ではあるが、いざ語呂合わせを決めてみると、されど電話ということになり、豊かな思い出を醸す泉になる。申し遅れたが、３９６１番を持っている同窓が北原に住んでいるのだが、果して、「桜井」という語呂には愛着があるのかどうか。

◎　２２１３（っっぃさん）

いまはどうなっているのか知らないが、昔のこと、合川という書店が本町にあった。豊浜町内では一軒だけの書店だった。同窓のなかに合川姓を見付けると、あの頃の店が髣髴と蘇ってきた。

ところで、そこの電話が２２１３番。

すんなり浮かんでくる語呂としては、「夫婦良いさ」とも「筒井さん」とも。

東京の千代田区にある大平正芳記念財団にも同じ番号がある。ここで、語呂合わせを思い付いても、「夫婦良いさ」「筒井さん」では、いずれも、帯に短しの類で、面白くない。

頼まれたわけではなくお節介めくが、記念財団向きともなれば、こんなのはいかがなものだろう。「ツーピース・(ボール)」である。大平先輩がゴルフを嗜まれていたので、ふと思いついたまでのことだが。

閑話休題

広い東京を調らべてみると、荒川区に住む筒井繁一さんが２２１３番を持っている。「姓は筒井でデンワもツツイさん」と洒落れ込んでおられるようだ。偶然にこの番号を入手されたのでは勿論なかろう。

◎　２２××は夫婦××が大半

同窓のうち、二十九名が２２××番を持っているが、その七〇％は「夫婦××」の語呂が相応しいようである。

「夫婦円(まる)や」とか「夫婦良いな」など。これらのなかで、少し手を掛けている語呂を二つだけ選んで紹介してみたい。

２２０４番、これは全国的によく使われている語呂例で、いわゆる掛け算語呂。

つまり、２×２＝４「ににんがし」である。

これでは「夫婦」の出る幕がなさそうだが、然にあらず、「夫婦鴛鴦(おし)」という語呂が浮かんで来る。「おしどり夫婦」のこと。

２２９２番、いまでも活躍しているはずだが、大阪のある食堂で「夫婦食い逃げ」と語呂宣伝をしていた。食堂のご主人の商売抜きの洒落には、脱帽した覚えがある。

２２の「夫婦」以外の語呂としては、まず「フジ」があり、漢字では、富士、不二、藤など。

例示すると、２２８３＝不二屋さんと屋号めいて、一般の家庭向きではないかも知れないが、２２７３＝藤波ともなれば、愛好されるかも知れない。だが２２３４＝藤差ともなると、これも能舞台めくので、敬遠されそうだ。仲々折り合いはムズかしかろう。

２２を「ツツ」と語呂合わせする話に移ろう。

東京の筒井さんの実例もあるので、この語呂には異論がなかろう。本町に２２７７番の同窓を名簿で知ったとき、「つつじ」の語呂が、ふと脳裏へ浮かんだ。７７を「しち」と語呂を合わせ、それを「じ」ともじったまでのこと。

豊浜駅のつつじが私の記憶のどこかにあったせいかも知れない。いまは、無人駅だが、つつじの美事な花は、車窓から旅愁を癒やしてくれる糧として、その役割は評価できないくらい大きい。この花壇は、昭和十六年十月三十日に完成された、と聞く。戦雲たなびく頃に、今日を見越された植樹とは思えないが、当時の原田嘉寿駅長の尽力の賜物である、と亡母に聞かされた。観音寺へ通学していた頃だが、駅頭の花壇に感動する余裕を私は持たなかった。若気の至りであり、恥かしい。

この原田駅長は、上部機関へ退職金の前借りをして、この花壇の設置を申請した、とか。真似のできない美談である。

さしのぞく窓につつじの日ありかな　丈草

２２には「つつ」のほかに、「につ」とも語呂が広がるようだ。２は、英語のtwoから来た連想である。箕浦の同窓に２２９７番の持主がいるが、この語呂がどうやら「ニッキイ」と似ている。

「ニッキイ」こと肉桂は、クスの木の樹皮から取られる、あるいは掘った根から得る、などとその昔誰れかに教わった。幼なごころに八幡神社の境内の楠の大樹を嗅ぎ廻った覚えが昨日のように思い出される。

私の生家の近所に、甘美堂なる菓子屋があって、肉桂の芳香の強い餅菓子を造っている。「梅が枝」という銘菓

である。近所の誼で、この餅屑を安く売ってもらい、貪り食ったものだ。先達て、知友から「なつかしいだろう」と手土産に頂いたが、さまざまな思い出につまされて、眼頭が熱くなった。

堺市内に、肉桂餅なる銘菓がある、と聞く。

いまだに賞味したことがないが、あるいは豊浜の「梅が枝」は、その流れを汲むものではなかろうか。

◎ 鰆（さわら）と狭腰（さごし）

３０６６、３５４０の電話を、上田井、大平木の同窓が持っている。

狭腰は鯖の小さいものだが、それを見分ける眼識を私は持っていない。豊浜に生れ、三中時代まで、下手な釣りに興じたものの、沖釣りの経験がない。精々、５７５７の語呂合わせを「鯒（いな）々」「鯔（いな）々」どまりにできる雑魚の知識程度しか持ち合わせていない。

豊浜という町名は、明治三十二年に生まれた、と伝聞するが、豊かな浜を祈願しての命名らしい。その頃は鰆の水揚げも少なくなかったようだ。豊浜町誌によると、四月の伝承行事のなかに、

「さわらの出盛りの頃、これを一匹買い求め、新豆を用いた押抜きずしをつくり、親類、知己を招いて、ご馳走した」

と記されている。当今では、鰆のさの字も耳にすることがなくなっているようで、その仕来りも語り継がれなくなる運命だろう。だが、せめて３０６６、３５４０の電話を通してでも、鰆の語彙を子孫に伝えて欲しいものだ。

高浜虚子が、鰆の祝いごとの伝承に因んでつぎの句を詠んでいる。

一匹の鰆を以てもてなさん

この句は、大正十年二月十三日に、牛込神楽坂倶楽部で披露されたもの。その前年十月に軽微の脳血栓を患い静養していた虚子が、病後はじめての句会に出席したと

きの作だが、全快祝いか誕生日祝いかが、念頭にあったようである。四十七才の誕生日は、二月二十二日。

◎　西郷隆盛と３１５１

篤姫のテレビ放映で、昨今は西郷さんも一躍名声を取り戻したようだが、３１５１の語呂は、「西郷」がぴったりとする。

幼なかった頃に、つぎのわらべ歌を童女らが歌っていた記憶がある。

もしもし姉さんどこへ行く
私は九州の鹿児島の西郷隆盛娘です
明治十年三月に切腹なされた父上の
お墓の前で手を合わせ
なんまいだぶつと拝みます

聞き違いがあるのかも知れないが、歌詞では「三月」とうろ憶えていた。城山で自刃する前に、西郷は「東京はどちらでごわす」と言ったそうだし、季語として「西郷忌」は秋になっていて、九月二十四日である。

そういえば、江藤淳はその著「南州残影」の末尾に、良く似た数え唄を引用していたが、それには「三月」の件りが「戦役」と改められている。これならば無難というべきだ。

散りいそぐ西郷墓地の山桜　　内薗　富恵

３１５３の電話が東京の西郷隆盛記念館に設置されているが、これは明らかに「西郷さん」の語呂見合いである。そういえば、五十年程前に、宮崎市のさる鉄工所が同じ３１５３番を華々しく「西郷さん」と宣伝していたが、いまはどうなっているのだろうか。

鹿児島市内では、同番の持主が「西郷さん」呼ばりをしているのかどうか、未確認。

それは兎も角として、もともと３１５１番を中の町に住む同窓が持っていること、これが切っ掛けとなった話である。が当の持主はこの語呂に気づいているだろうか。

◎　稲葉と因幡

１７８０番の語呂合わせの一例である。

「稲葉」といえば、秋の季語であり、昔から「稲葉の衣」「稲葉の雲」「稲葉の露」など、と親しまれてきた。

また「因幡」と書けば、鳥取県の旧地名として、「因幡の白兎」の童謡が耳底に蘇ってくる。小学生だったから、「イナバ」が何やら知らず、使い分けができないままに、覚え込んだ歌詞だった。

椎の実を干して因幡の日和かな　　井上久枝

中の町に平山姓の同窓がいるが、ここの電話が１７８０番である。７が６であれば、１６８０番となるので、語呂は「ヒラヤマ」、同姓同番と相成って、目出度く納まるのだが、物事は巧く行かないものだ。

平山といえば、三中の大先輩に平山勝己さんがいた。私の小学校時代の体操の先生だった。私の亡兄さらには、三中時代の私の師牧忠雄先生とも同期だった。メガネ越しの優しい笑顔がなつかしい。

話を同姓同番に戻そう。

東京の電話帳には、１７８０番の持主が一軒あるが、０１７８、０５７８などの「イナバ」さんが散見される。ついでの話だが、１６８０番の平山さんが、これも一軒だけある。

◎　佐久間は３９０

三中の一期先輩で、本町に住んでいる佐久間淳さんは、２６６２番の電話である。どのような語呂合わせを楽しんでおられるのか、伺ったことがない。私なりに思いつく語呂としては、「フロム、ツウ」がある。直ぐにご理解いただけないかも知れないが、昔、キングス・クラウンで、秋山協先生に「from flower to flower」と教わった。あの「フロム・ツウ」である。佐久間さんで思い出されるのは、３９０９番のこと。私の知人で、「佐久間君」と電話番号にわざわざカナのルビーを振った名刺を使用していた男がいた。

東京都内に、３９０２（佐久間に）、３９０３（佐久間さん）と、それぞれを同姓の会社が轡を並らべている。社長の名刺にも、「サクマクン」と似たようなルビーが振られているのかどうか知る由もない。

◎　大西さんは００２４

北原町に真田屋という八百屋があった。そこの息子は「やっちゃん」という愛稱で、私の一年後輩だった。豊浜町には在住していないらしく、同窓の名簿から欠落している。

大西姓だった「やっちゃん」がいないものの、豊浜町内には、大西姓の同窓九名が健在である。ここで大西の姓が、００２４の語呂にぴったりなので、重宝がられていることを紹介しておきたい。

東京の電話帳には、九軒の大西さんが００２４番である。東京に限らず、全国的に人気があるもの、と見えて、西讃地域の観音寺市にも、「おおにし酒みせ」、三豊市にも「大西進」、それぞれ００２４番。

ただ、豊浜町内の同窓には、１０００番未満の番号の持主がいないので、この話は蚊屋の外になる。

◎　４２８９は渋谷区

直場には、土井姓の同窓が九名ほど集っている。私の記憶誤りでなければ、この地に土井牛乳店があった。店主の柔和な笑顔とともに、亡父が牛乳を飲んでいた頃を思い出してなつかしい。

いまも、牛乳店があるのかどうか知らないが、もしあるのなら、電話番号としては、３０６９（ミルク）なり、３６９３（ミルクさん）が似合わしいのだが、前者は北原の、後者は須賀の同窓の持物。

九名いる土井さんのうち、同居者を除くと、電話は４件で、２１４０、２４１５、４２８８、４２８９となっている。耳障りになるかも知れないが、私流の語呂合わせを申し上げてみよう。

２１４０＝対（つい）よ（同居者三名が同番の意）
２４１５＝強い子（同居者二名のため）
４２８８＝出発（シュッパツ）（住い門出の意）

最後に残る４２８９はどうだろう。４２も８９もともに語呂合わせには難儀する。

二つほどの語呂が浮かんでくる。

まず「四つ葉のクローバ」である。この語呂は、見つけると幸運が訪れる。といわれていて、誠に目出度い。申すまでもないが、本来三つ葉であるクローバが四つ葉になる確率は、一万分の一とも十万分の一ともいわれていて、稀少価値の高い代名詞である。

余り地縁として馴染みがないのかも知れないが、「渋谷区」もピッタリの語呂なので、少し触れて置く。

「渋谷区」は、「渋谷」姓を東京都内に流布したメッカとされている。その名残りとして、練馬区の渋谷春夫さん宅に０４２８番、足立区の渋谷禎三さんが４４８１番を持っている。余談になるが、後者の４４を「４が二つ」で「シブ」と合わせている手並みは、仲々の粋人だ。

なお、４２８は、このほか「四谷」姓の語呂にも発展しそうだが、この辺で筆を省く。

浅漬を提げて渋谷の夕月夜　　久米三汀

◎　舶来の語呂

豊浜の同窓会の元副会長だった、久保一臣さんの電話は、３０３０番である。改って語呂合わせには及ばない類いの番号だが、いざ語呂合わせをしてみようとすると、少々頭をひねっても直ぐに切れ味の良い語呂が浮かばない。

そこを「スマイル、スマイル」と如何にも笑みを誘いそうに宣伝している会社が東京にあるのである。しかも会社名が「スマイル」となっていて、念が入っている。

最近は、外国語ネームの会社が氾濫しているので、勢い電話の語呂も、そのネームにマッチした傾向が強く、つぎの諸例がそれ。いずれも会社名がそのまま電話番号

である。

２０４０＝フレッシュ

３０６０＝スマイル

４６９０＝シルク

こうみると、カタカナの語感に魅了されそうになるから、不思議である。

外来語は、語呂として、まだ十分に馴染み切れていない感がする。試みに俳句を添えてみると、多少親しみが湧きはしないか。

同窓の番号のなかから、外来の語呂に対応できそうなものを、選んで俳句付きで紹介しておく。

２０９０＝フオーク　（北原）

白桃を刺すべく置かれ銀フオーク　新井士筆

２６１０＝フルート　（須賀）

青嵐フルートの音さらひけり　関ただお

３０９３＝ミキサー　（上田井）

ミキサーに七彩野菜巴里祭　連　宏子

４０１６＝ヨーデル　（西原）

ヨーデルに合はせ燕の翻る　杉村宝春

４４３２＝シミーズ　（本村）

シミーズの腕をあらはにあぶなき夏　山口誓子

４９７０＝シグナル　（梶谷）

シグナルの青に夜桜散り初むる　下間のり

５３２９＝コミック　（須賀）

コミックを並べし書架や雛飾る　佐野敏子

５６２９＝コロッケ　（須賀）

コロッケの菜の花入りを買ひにけり　小野田健

６９９８＝ロック・バンド　（北原）

月の出やロックバンドのひた止み　平林寿美江

（注）引用の俳句は、次の書に拠った。

俳句外来語辞典（大野雑草子編）

俳句カタカナ語辞典（高橋悦男編）

◎　三国志と三四郎

３５９４番（箕浦）、４４４６番（大坪）、この番号の語呂合わせに妙案があれば、持主に伺ってみたいものである。というのは、前者は「三国志」、後者は「三四郎」といずれも有名な文芸作品名に語呂が結びつくからである。

両書とも若い頃に耽読されたご経験が読者にはある筈。

東京には、「三四郎」と名乗る居酒屋が三軒ほどあるが、いずれの店にも電話は、０３４６となっている。同窓の４４４６番を「三四郎」とドッキングさせたのは、４が三つ揃えであるところに着目しての発想であり、私流の語呂合わせだが。

恐らく、４４４６番の持主は、そこまで気付いていないだろうが…。

漱石には「こころ」という作品もある。ついでに、触れておくと、「こころ」は、５５６であり、東京都内には、「こころ」名儀の店が十数軒あるが、このうち０５５６番の持主が二軒。

須賀に住む同窓も５５６６番であるが、「こころ」の語呂がぴったりと持って来いではなかろうか。

話を東京へ戻すと、「三国志」とは、店か会社か知らないが、企業名であり、二軒とも３５９４番。企業名が先にでき上っていて、その名に似合う番号を求めたのかどうか、知る由もない。

３５９４、４４４６、いずれも文学嫌いでなければ、自家薬籠中物と重宝にしたい語呂だ。

三四郎の池のさざ波五月来る　　荒川優子

◎　六味丸とむささび

野々池の同窓に６３３０番がある。どのような語呂をお好みか存じ上げないが、この番号、言わずもがなだが、「六味丸（ろくみ）」に通じる語呂。強精剤として昔から、その名が知られていて、誹風柳多留にも

あごで追ふ蝿は六味へたかるなり

という句があるくらい。あごで蠅を追ふというのは、体力の衰えを意味することわざである。

ところで６３３０から一つ番号をずらすと、６３３１になる。これは関谷の同窓の電話だが、語呂としては、あの夜空の旅人である「むささび」が相応しいのではなかろうか。好き好きもあろうが、好感の持てる獣ではなかろうか。

むささびや吉野は昼も杉の闇　　深井いづみ

◎　夏越と通

同窓の名簿から、旧友の松本央君の名前が欠落しているのを知った。本人がわざわざ支部総会に出席されて、私と語り合うことができた。松本君の電話は、３７５４番、「皆なご用」あるいは「皆な良いよ」と誠に商売向きの語呂であるが、いまは店を畳んでいるご様子だ。店仕舞い後の語呂を聞き洩らしたが、俳句を嗜んでいる手前、私流にこの番号を、「ミナゴシ」つまり「御夏越」が相応わしいのではないか。

夏越の祓は、豊浜町の八幡神社で、毎年のように茅の輪くぐりが催されていた当時を思い起す。

「輪ぶり」といわれ、旧六月一日に悪病除けとして行われる神事であり、父母や姉妹とともに、夏の夕暮れに畏まってくぐったものだった。

海を出づ汐垂れ月も夏越の夜　　井沢正江

いまも、あの神事が継承されているのかどうか。

総会では、もう一人の親友と語り合うことができて、楽しかった。須賀の合田忠邦君である。彼の家の電話は、２０４９番。

私は長らく「不等式」と、ニック・ネームめく語呂合わせをして、密かに娯しんでいた。三中時代に、比較的理数系に強かった友に相応しい語呂と思っていた。

ところが、何かの折りに、ある料亭で「通（つう）は良く」と箸袋に刷り込んでいるのが目に止まった。「通」とは「通（かよ）うこと」で、頻繁に「通（かよ）ってくれ」という宣伝文句らし

い。

忠邦君は、駅前でその名の通っている浜田屋旅館の御曹司である。「不等式」などよりも、「通は良く」の方が遥かに似合っているようだ。早速乗り替えて、今日に至っているが、この成行き忠邦君は関知せず私の独り善がりに過ぎない。

◎　洋服とほおづき

妙な取り合わせだが、両者とも４０２９番に似合う語呂である。まず「洋服」の方から話を始めよう。東京都内の洋服店には、０４２９とか４２９０、さらには４２９８などが散見されるが、糅（か）てて加えて４０２９が二軒ほどある。

この４０２９番は、北原の同窓が持っているが、洋服店でも営んでいなければ、「洋服」の語呂は伝家の宝刀にはならないだろう。そういえば、港町にある同窓の５２９８番もそうだ。呉服屋でなければ、語呂の面目は立たないだろう。５２９８には、別の語呂として「扱葉（こくば）」という懐旧の語呂が浮かんでくる。広辞苑によれば、「扱葉」は、中四国地方の方言とされていて、松の落葉を差すようだ。昔、一の宮で松籟を聞きながら、扱葉掻きをしていた亡母の姿がなつかしい。

４０２９番の語呂へ話を戻そう。「洋服」以外の語呂で、郷土に縁（ゆか）りのありそうなものが、あれこれ思い浮かんで来る。

その一つ「ほおづき」の方はどうだろう。４は、英語の four、０は oh、２は two、いずれも語呂が合っているだけに、９を「き」と多少無理して読んでも、強ち抵抗もあるまい。鬼灯には田舎育ちの私にとっては、さまざまの思い出がある。

少年に鬼灯くるる少女かな　　高野素十

素十の秀句である。

昔、近所に住んでいた女の子が、よく口に入れて鳴らして遊んでいた。私も真似て鳴らそうとしたが、生来不

器用なゆえかどうしても音が出ず仕舞いで、遂に諦めた覚えがある。この少女は、長じて伊予へ嫁いで行ったが、薄幸で天折した、と風の便りに聞いた。

４０２９には、もう一つの語呂が浮かんでくる。大口を開けるところから、「バカ貝」呼ばわりをされている「潮吹き」がこれ。

潮吹きに見られてゐるや白き脛　　奥抜良人

という粋な句がある。三中時代には、一の宮の遠浅で、大潮の退け際に馬手とか白貝などとともに随分獲った思い出が深い。北原の合田雪太という友と競争し合っていたが、雪太君はいま大阪の大規模な工場の持主になっているようだ。できれば会って語り合いたいものだ。

◎　風呂沸くと鶴嘴

表題は、２６８９番と２６８４番の語呂の一例であり、持主は、北原と関谷の同窓である。

２６８９は、語呂が豊かで、運道具店では「プロ野球」という宣伝文句を広告している例もあり、「フルバック」といえば、サッカー用語としても、名が知られている。

「風呂沸く」というのも、銭湯が盛んな時代には、よく活用されたものだった。

私の生家の隣に、竹屋という風呂屋があった。そこの息子が小学時代に、私と同学年だったので、よく水運びなどを遊びがてらに手伝ったものだった。

いつだったか、「タケヤガヤケタ」という回文を聞き覚えて、「ヤケタ、ヤケタ」と面白がっていたところ

「縁起でもないことを云うものではない」

と母に窘められた。

その竹屋も、十一号線が出来て、いつの間にか、どこかへ一家離散してしまった。

２６の語呂には、「釣り」がある。８９が「箱」の語呂になるから、２６８９は「釣り箱」。三中時代には、波止へ夜釣りに出掛けて、釣り箱に座布団を敷いて坐っていたものだ。

つぎの句は、その頃の景がそのまま

黒鯛（ちぬ）夜釣月の出端のくらがりに　　遠藤湘海

２６８４も、豊かな語彙を蔵している。「古橋」姓の方が全国で幾人か、この番号を持っているし、運道具店向きの語呂には、「ツーラン走る」が好まれている。２６を「吊り」を読むと「吊り橋」となって、祖谷のかずら橋が思い出されよう。

私にとっては、三中の動員中に親しんだ「鶴嘴」のことがどうしても頭から離れない。粟井の飛行場の建設に駆り出されていた頃、徴用の韓国人が振り上げながら歌っていた、あの鶴嘴がアリランの哀調とともに蘇ってくる。

◎　４３９１

民謡の「よさこい節」は、土佐の伝統的な唄だが、それに対応する電話といえば、４３９１番である。多少とも語呂合わせに関心を持つ人であれば、４３９１は「よさこい」と鼻歌が出てくることだろう。この番号を、東町の同窓が持っている。電話をかける側もかけられる側も、ともにほのぼのとなる語呂ではないか。

よさこいの土佐の踊子草をどる　　高石幸平

歌謡の題目が頭に浮ぶような番号には、どのようなものがあるのか。目に留まった順に挙げてみると、（　）内は所有する同窓の居住字名

３０３５＝さんさい踊　（本村）

富山地方の踊

３３３９＝三朝小唄　（関谷）

鳥取県三朝温泉の民謡で、この唄がレコード化されて、一躍温泉名が全国に知られた

３４７７＝三吉（みよし）節　（須賀）

秋田市の梵天祭（二月）にうたわれる唄

４０５０＝塩釜甚句　（本町）

宮城県塩釜地方のお座敷唄

４３３０＝よささ節　（東町）

神奈川県三浦市の踊唄

５１０６＝子とろ　（須賀）

童唄（子とり鬼の遊び）

５５０１＝御祝い　（関谷）

岩手、青森地方でうたわれる唄

◎　３３７４と耳成山

講演終了後、幾人かの同窓から、自家の番号の語呂に関する含蓄をご披露いただき、有難く拝聴した。そのなかで、記憶に残っている一例を紹介しておく。３３７４番の語呂である。

３３にしろ７４にしろ、「散々」とか「無し」とか、兎角明るくない語呂に結びつきがちだが、この方は、文芸愛好家らしく小泉八雲の怪談「耳無し保市」を念頭に置いておられた。文芸作品に裏打ちさせた語呂とは、誠にご立派だ、思わず膝を乗り出した。

実は、私もこの語呂を腹案の一つに持っていたが、文芸に関心のない方々の用として、大和三山の一つ「耳成山」を別案に準備していた。私の手の内を知って、「耳無し」よりも「耳成」の方がよかろうと、さりげなく軍配を上げていただき、ほっと安堵した次第。

同じ「ミミナシ」といっても、漢字で書けばかなり意味が異なるものだ。

耳成も滴る山となりにけり　　川崎展宏

◎　季語の転用

季語という日本語の美しい伝統語を大切にしてゆくためには、俳句にとどまらず、電話の語呂合わせにも輪を広げるべきではないか。こういった考えで、試みに季語を篩にかけて、同窓の電話について心当りのルビを振ってみたところ、思いがけない季語との取り合わせが浮かんでくる。

季語を語呂合わせに活用して、電話番号に新しい息吹を与えていただく切っ掛けにもなれば、と考えて、以下

季別に列記してみた。

春

春の季語のなかから、電話の語呂に相応しいものを選んでみた。（　）内は所有者の居住字名

２１９３＝新草（にいくさ）（関谷）　２３９３＝摘草（つみくさ）（雲岡）
２６５５＝ふらここ（南）　２８５０＝椿（上田井）
３０３５＝山草（梶谷）　３２８８＝みつば（須賀）
３４０５＝挿床（さしどこ）（大平木）　３４６０＝さより（北原）

このほかに、既述の

２２７７＝つつじ（箕浦）　３０６６＝鰆（上田井）
３５４０＝狭腰（大平木）

海辺で遊んだ思い出ばかりの私にとって、季語といっても、花摘む野辺より魚の語呂にどうしても目が移り易い。

ちりやすくあつまりやすくサヨリらは　篠原　梵

夏

１０４０＝桃葉湯（とうようとう）（大平木）　２２０６＝筒鳥（つつどり）（中の町）
２４２４＝虹（須賀）　２４５１＝錦鯉（関谷）
２４５６＝藤衣（ふじごろも）（須賀）　２９８７＝ふくべの花（上田井）
３２９０＝三伏（本町）　３８０９＝三白草（さんぱくそう）（長谷）
３５８７＝珊瑚の花（梶谷）　４００５＝余花（よか）（須賀）
４０２６＝夜釣（本町）　４２７０＝渋団扇（しぶうちわ）（道溝）
４４２０＝葭簀（よしず）（中の町）　４４９６＝葭切（よしきり）（直場）
４６８６＝白薔薇（上田井）　６４０９＝虫送り（関谷）

松明の畦を駈けゆく虫送り　甲賀山村

秋

２０９７＝妻恋草（須賀）　２１０４＝葡萄酒作る（東町）
２３２９＝文月（ふみつき）（南）　２９４６＝月白（つきしろ）（本村）
３２４６＝身に沁（し）む（上田井）　３５５５＝実珊瑚（みさんご）（本村）
３６３２＝澄む水（関谷）　４０７３＝穂波（関谷）
４５８３＝宵闇（東町）　４６４２＝白式部（しろしきぶ）（関谷）

５６７９＝色なき風（直場）　５７５９＝蝗食ふ（港町）
岡海老といふ信濃路の蝗食ふ　田中輝山

冬

２１１７＝追儺（須賀）　２５５０＝ふいご祭（港町）
２８２９＝つわぶき（大平木）　２９５０＝煮凝（本村）
２９９６＝梟（三軒屋）　３０３５＝三十三才（梶谷）
３３３９＝山茶花（関谷）　４０２６＝塩鰤（本町）
４４９６＝しぐれ（直場）　４９２０＝敷布団（長谷）
父の死や布団の下のはした銭　細谷源二

新年

２９１９＝福引（梶谷）　４４０７＝獅子舞ひ（梶谷）
獅子舞の獅子がご祝儀くはへけり　島崎ユウ子

石鎚登山の想い出

三女・41回　西山　久子

同窓会誌の原稿を四十一回生にとの御名指があり幾人かの方に御相談しましたが、皆様御遠慮なさる方ばかりで、皆様の代りに何の面白いお話もない私が書く事になり、何年か前迄は峠歩きの好きであった私が書かせていただく事となりましたが、昔の思い出しかない私にとっては九人の先生と十七人の生徒で愛媛の石鎚山に登ったことしかありません。昭和二十二年の夏、部長の森塚先生が「是非に先生を助けると思って」とのお話で、陸上部を助けていただいた事の御礼という思いで、幸い仲好しの安藤照子さんも、お母様のお許しがあったとの事で、それまで高い山と云えば疎開前に神戸の六甲山しか上った事の無かった私が二千米もあるという事の苦しさも知

らないままに同行させていただくことになりました。伊予小松から登山口までの一時半のバスだけで弱り込んでしまいバスの床にリュックを背負ったままで座わりこんで早く着かないかとそればかり願っておりました。同乗のどこかの中学生にいたずらされたり、二重苦、三重苦で、登山口に着いた時には、森塚先生が「皆大丈夫ですか」と言われたのに対し、私が一番に「大丈夫じゃありません。」と声を張り上げました。今では車の道が可成り上までついたとの事ですが、その時にはバスを降りたこと、どれほど嬉しかったことでしょう。然し歩くにつれて二千米の山のきびしさを思い知らされることになりました。一人で帰れるものなら帰りたいと思いました。道端に無人の店で藁ぞうりが置いてあったのを買い、運動靴をブラさげて歩きました。フト見ると靴は大変なことに、森塚先生のリュックの下にブラ下っていました。お友達に、あんた誰に靴を持たせてるの、と言われ、驚いて「先生持ちます」と言いましたが、先生は「いいですよ」、とそれをかえして下さらず、申し訳なくて顔を上げる事も出来ませんでした。ただひたすらに歩く一日の長さに、何度も、どうして来てしまったのだろうと後悔ばかりでした。然しそのうち鎖登りのところに着くと、いの一番に登り始めたのが私でした。その時下をみると、先生方が顔を俯(うつむ)けて生徒達が登るのを待っておられたので、何故上の私達を見守っていて下さらないのかとその時は思いました。あとで考えてみると全員がスカートで鎖を登っていました。本当に恥かしい事でした。大きな石ばかりの石と石の間に足先をかけるようにしたものですが、鎖の環の中に足を入れると滑り易いので鎖には手を掛けるだけで、そうして昇りかけたらそのうち、あまりに大きい石のところは、上の石とのすきままで足が届かないところがあり、思わず「先生足が届きません。」と下に向ってどなりました。先生が「待っておれよ」と言って、横の鎖から登り、上からロープを降し「脇の下にかけろ。」と云われましたが、本当に必死でした。こう

して漸やくにして頂上に登ることが出来ました。頂上からの眺めは素晴らしいものでしたが、もし落ちたら、どこまで落ちるのだろうかと震え上る思いでした。どなたかの先生が「天狗岳の先まで行って来なさい」と言われましたが、手のひらを合せた指の先の上を歩くような狭い尾根で、道など無いようなところは、とても歩けそうなものではありませんでした。然し今になってみたら、連れて行っていただいた事を心から感謝しております。年をとってからの私は、主人が泊りがけで釣りばかりに行くので、私は生駒などの峠道を行くのが趣味になり、それとかお城跡巡りばかりになりました。面白い想い出は、峠で男の人と出合うと、どちらもがギョッとなり、どちらもがお先にどうぞ、と言ってゆずり合いますが、すれ違う時には男の人は私を狐が化けているのかと思い、私は首でもしめられるのではと思い、せまい雑木林のすれ違いは命がけで雑にまで脅かされます。私達も、もうどこにも行けない年令になり、ソロソロ友人の亡くなられたことなども耳に入る事もあります。

あとになりましたが、森塚先生もお嬢様から昨年お亡くなりになったとお知らせいただきました。

（沢渡会）こんぴらさんで会食

観一・11回　渡里　典子

五月は爽やかで清清しい季節と思っていましたが、今年は、急に暑くなって夏服を出すと、逆もどりして寒くなり、加えて新型のインフルエンザの発生と、当惑することが多かったようです。そのような中で、初夏らしい五月三十日、仁尾沢渡会は、荻田幸江会長様（三女・三十八回卒）と共に、十名程で食事会を致しました。

車に乗り合わせて、琴平へと出発しました。

高瀬を過ぎ、大麻山を仰ぎながら、うどん工場の横から入ると、出発時の太陽の眩しさを忘れたかのように、深い木立に囲まれた静寂な空気はもう、神が宿る金刀比羅宮の山の中でした。鶯の澄んだ声に迎えられ、駐車場の警備さんからは、レストランへと案内されました。

予約のディナーまでには少しの時間の余裕があるので、数名で本宮や表書院の方へ足を運びました。

毎年蹴鞠が催される庭に面した表書院の各部屋には、重要文化財の円山応挙の晩年の作といわれる障壁画が多くあります。

これまでも何回か拝見しましたが、穏やかで、まるで猫かと思わせる虎の面は、ほほえましく、特に親子の虎が仲よく水飲む姿は、心が和みます。

順路を進むと、壁一面の椿の間に行きつきます。画家、田窪恭治氏が描いたこの壁画のテレビ放映は、まだ記憶に新しいところです。

白い壁面に描かれた彩やかな緑の繁みと、真紅の藪椿の花が部屋を覆い、若々しく、エネルギッシュです。そしてこれは、完成した作品ではなく、今後も描き加えられていくとの係員さんの説明でした。

去年の「若冲」の美しい花やつばめの襖絵の公開では大勢の人の列がありましたが、今回も次々と見学者が続

いていました。

さて、ディナーはレストラン「神椿」で始まりました。銀座資生堂パーラーによるレストランです。ここにも椿があります。

白地に有田焼の深いブルーの陶板の椿が、百六枚程、一階から地階の壁面に貼りめぐらされていて、静かながら、おしゃれな雰囲気です。今回は、私たちだけの貸切りのようでした。

色とりどりの野菜と生ハムのサラダ、やさしい味のグリンピースのスープ、かつおの焼物、子牛のヒレステーキ等が次々と出されます。皮がココア色に焼けたパンも美味しく、イギリスで作って送られてきているとかで好評でした。

シェフの料理に舌鼓をうちながら、お互いの近況、家族や友人の事、旅行の話など、思いつくままに語り合い、ゆったりとしたひとときが流れました。

フルコースを満喫して、今後の会の予定について話したり、再会を約束したりして外に出ると、まだ夕方の気配もない程の明かるさでした。

再び車に乗り帰路につきます。森の中では坂本龍馬の若い像が建っていて、驚かされます。お土産店を覗きながら、石段を登っていくこんぴらさんの他にも、新しいこんぴらさん、そして未だ私などの知らないこんぴらさんがいろいろあるのだろうと、改めて金刀比羅宮の雄大さに感動します。

それにも増して、今回もまた、幸せなひとときを与えられた沢渡会でした。

沢渡会らしい会合をと、いつも企画を考えて下さいます真鍋和歌子様や、先輩の方々のさりげない優しさのおかげであると、心から感謝致しております。

ありがとうございました。

表書院前で

レストラン「神椿」にて

「仁尾カルタ」草稿

観一・5回　鴨田　英作

このほど、仁尾の「ええところ」をみんなでカルタにしませんか？仁尾のここがええがな、これは珍しいやろ、こんなもんもあるで……という呼びかけに応えて、読み札に応募してみた。

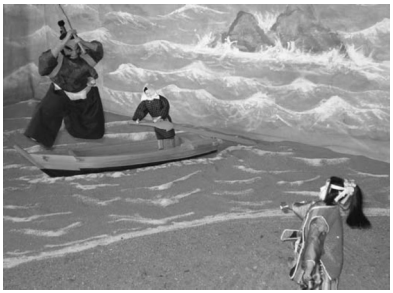
もとより仁尾に限定されたものだし、まだ入選した訳でも採択された訳でもないが、一応あからわまで全部揃っているので、わが郷里仁尾のことを懐かしく思い出し、またよりよく知って親しんでもらうよすがともなればと思い、敢えてご披露する次第である。呵々。

「仁尾カルタ」

あ　青い目のアマナジュリーは平和の使い
い　家の浦の夫婦獅子舞い勇壮に
う　海山の自然豊かな古い町
え　塩田が支えた仁尾の町と人
お　沖合いに浮かぶ平石踊り石
か　火事のため掘った石積みの井戸
き　菊池寛　母堂は仁尾の宿入（しゅくいり）生まれ
く　暗い夜の道案内はこんぴら灯籠
け　県下でも最古の貝塚小蔦島
こ　子どもらの成長願う張り子虎
さ　酒、醤油、お酢で栄えた仁尾の町
し　常徳寺円通殿と大ソテツ
す　すばらしい初鯛あがる仁尾の海
せ　整然と墓石並ぶ軍人墓地
そ　その昔お城があった覚城院
た　たわわにも実ったおいしい曽保みかん
ち　ちょうさかく声も勇まし秋祭り

つ　蔦島は古い歴史と海水浴
て　適塾で学んだ名医中村恭安（きょうあん）
と　遠浅の海が広がる父母浜（ちちぶ）
な　長床（ながとこ）の神事は無形文化財
に　仁王さま守るお寺は吉祥院
ぬ　ぬきんでた偉人は塩田忠左衛門
ね　猫の手も借りたい枇杷の袋かけ
の　野口雨情が来て見て詠んだ仁尾民謡
は　八幡宮ひわだの屋根の曲線美
ひ　燧灘沈む夕日の美しさ
ふ　風光明媚の磯菜（いそな）天神元は島
へ　平安の阿弥陀のおわす端雲寺
ほ　豊作を祈って弓ひく百々（もも）手祭
ま　町あげて大にぎわいの太陽博
み　見晴しのよい八紘山は桜の名所
む　昔から海に開けた港町
め　目を見張る石の大屋根妙見宮
も　門前のお薬師さんに芭蕉の碑

や　山寺の鐘楼国の文化財
ゆ　雄大なしめなわ石の賀茂神社
よ　四百年の樹齢を誇る万寿柏
ら　落城の殿様ねむる金光寺
り　立派に残る辻の札場は告知板
る　類のない八朔人形日本一
れ　例祭に御（お）船で渡御する賀茂明神
ろ　論より証拠仁尾の良いとこ見においで
わ　わらの竜担いで雨乞い竜まつり



人生二毛作
「しぼんでたまるか！ 挑戦記」
詩吟のシンガーソングライター
高嶋　睦徳さん（観一・9回）の紹介

丸亀市内のホールで吟詠する高嶋睦徳さん。はりのある声が場内に響き渡る。聴衆から「すごい響きやなあ」と感嘆の声も。この日の吟詠は、自身が作った七言絶句の漢詩。作品は全日本漢詩連盟会長賞を受賞したこともあり、詩吟の世界のシンガー・ソングライターは県内では珍しい。

額や首筋に汗を流しながら、吟詠する高嶋睦徳さん
（丸亀市生涯学習センター）

建設会社で忙しく仕事をしていた五十歳のころ、退職後のことを考えた。そして、自分に合う趣味を探し始めた。ゴルフや絵画、習字などに挑戦し、「高嶋さん、習字上手にできたね」と、先生に褒められても面白くない。「楽しくなく、しんどく感じました」。

そんな時、左甚五郎のことを書いた本に出合った。「三井寺で作った竜の構想に三年かかったのに、彫るのはたったの三日。寺伝だから、ぎょうさんに伝わっているのだろうが、飲まず食わずで寝なくても彫るのが楽しかったということ。甚五郎の彫刻のようなものが、僕にも何かあるはずだと強く思ったんです」。

それから十年。六十歳で詩吟に出合った。「僕、酒飲みだから、家内に肝臓の〝休肝日〟を一日作ってほしいと言われ、その日を火曜日に決めたのが詩吟に出合うきっかけでした」。

休肝日を守っていると飲み仲間が、粟井公民館で毎週火曜日、詩吟教室が開かれていることを教えてくれた。

ちょうど、徳島の土木会社で副社長をしていたが「週二回の出社でよく、時間がたっぷりあるから」行ってみることに。

訪ねると五、六人が詩吟の練習をしていた。「公民館が揺れていると思うほどすごい声で、この時、詩吟が合っとる」と直感したそうだ。習っていると褒めてくれるし、どんどん詩吟にのめり込んだ。

知り合いに、「漢詩の意味、分かっているの」と聞かれた。大学は工学部。観音寺一高の時、授業で李白や杜甫を習ったが、「なんでこんな中国のおっさんが教科書に載っとんかぐらいにしか思っていませんでしたから」。

詩吟を続けるなら意味が分かっている方がいいと、書店で漢詩の本を山のように買ってきた。

七言絶句を調べていくと二十八字の漢字の迫力に圧倒され、李白や杜甫の詩に引きつけられるようになった。詩の漢字を漢和辞典で一字一字調べ、また新たな漢字に出合えば辞典で調べる。「エンドレスの世界だが面白くなって、漢和辞典を引くのが飯より好きなことを発見しました」。

夢中になって徹夜で辞典を引くこともあるが、「女房が寝られないからと、別の部屋に行ってしまったほどです」と笑う。

これまで百五十九の七言絶句を作っている。「七十五歳までに三百にして、観音寺市民会館で吟詠のワンマンショーをするのが夢です」と顔を輝かせた。

（追記）

平成二十年十月八日（土）付、四国新聞「銀々倶楽部」その三にて紹介された記事を、高嶋睦徳さんご本人より提供して頂きました。

「巨鼇」編集担当記

高嶋さんの吟詠がホールいっぱいに響き渡る

平成二十二年春 生誕百年を迎える

「大平正芳記念館」に居て（その二）

観一・9回　加地　淑久

〝降る雪や明治は遠くなりにけり〟―昭和の俳人、中村草田男の句である。今、又、その昭和が去って二十余年、世人にとってその時代の面影も、年々歳々、古色をおび、セピア色に化しつつある。

しかし、今年「古希」を迎えた私たち世代にとっては、今なお、数々の懐かしい思い出が、鮮明な映像として脳裏に残っている。

当時はまだ、この平成の世に比べて、経済も右肩上がり、街角を行く人々の表情も明るく、将来への希望に満ちていた。

〝歳月人を待たず〟とは云え、この年齢になると殊更に、時の流れとその早さに驚かされる。

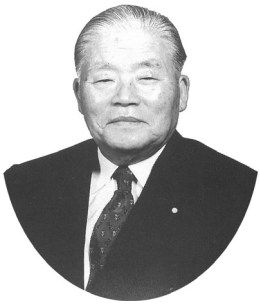
古人は〝月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也…〟と断じ、又〝ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず〟と詠っている。我が身を、その流れに浮かぶ一片の木の葉と観れば、一人、その流れに抗することも出来ず、溜息、吐息である。生々流転、生者必滅、今、人生の黄昏、その晩秋を迎えハラハラと落つる枯葉を見ては、人知れず悲哀、寂寥感におそわれる。人間の一生は生れ落ちて後は「死」への旅路である。一茶も〝露の世は露の世ながらさりながら〟と嘆じ、お釈迦さんでさえ、その入滅に際し、この現世に〝それにしても去り難い〟とその別れを惜しんだとか（？）どうもその道を避けることは出来そうに無い。しかし滅入っていても仕方ない。この老いの身を労りながら、残された時間を大切にしたいと思っている。そして、その先は「輪廻転生」に望みを託し、三途の川を渡り、閻魔大王に謁見した後、直ちに踵を返し、再びこの娑婆の世界に帰って来よう（？）と思っている。

閑話休題――、私がこの記念館に勤務してすでに九年、日々来訪者の話し相手となりながら、朝方は新聞二紙を読み、昼からはその時々、興味を覚えた種々雑多な読書に明け暮れ、又、朝夕、気がつけば下手な陶芸など二・三の趣味に興じている。

大平正芳記念館（観音寺市坂本町）

還暦を過ぎた身の置き処としては、結構な「場所」と「時間」を持つことが出来たと思っている。そして来春、この記念館を去る私にとって、此の九年間は実に意義深く、又、この機会を与えてくれたその「縁」に感謝している。当記念館の主、「大平正芳元総理」は昭和五十五年五月三十日、衆参同日選挙の第一声を新宿で挙げた後、体調不良を訴え、翌未明、急遽、虎の門病院に入院した。当時、私は名古屋に在住、当日会う約束の為上京。その入院を知らせる「号外」を手にしたのは東京駅地下鉄入口であった。そして、わずか旬日の後、六月十二日早朝五時五十四分死去。享年七十歳であった。身近に接した人間にとって、その急逝は返すがえすも痛恨の極みである。来年はすでに没後三十年である。又、生誕百年の節目の年を迎える。時の流れは早く、〝去る者日々に疎し〟と云えども、今だにその慈父の如き人柄に惹かれ、全国各地から数多くの人達が訪れてくれる。そして其処に勤務する者としては、多くの人々に、〝より深く〟、その「人となり」を知ってもらいたいと思っている。大平総理は明治四十三年三月、四男四女の六番目の子として生まれている。当時、中農の百姓家とは云え、大家族の生活は苦しく、一汁一菜の粗食と家事手伝いに追われ、二度の大病、父親の死、と苦難、煩悶の日々を過ごしている。そして、県下二つの奨学金の助けを借りて、東京商科大学（現一橋大学）を卒

業したのである。今、この格差社会に先行き不安を覚え、不透明な世の中に苦悶、苦闘している若者にとって、その生活苦、心労の日々の中にあっても〝己を高めるべく〟日夜、努力を欠かさなかった大平さんの、その濃密な生き方は、必ず何か、そこに得るものがあると思っている。そしてその人生をなぞり、その生き方、考えから、身の処し方を知っていることは、老若男女を問わず、その人の人生の手引き、「手本」となるのではないかと考えている。



記念館の玄関を入ると正面に大きな顔写真がある。大方の見学者はその前に立ち〝優しそうな顔ですね〟〝いい顔をしていますね〟と傍らの私に話しかけてくる。〝四十過ぎれば自分の顔に責任を持て〟とは、確かリンカーンの言葉だったかと思う。私も人間の顔は、その人の人生の集大成であり、時間をかけて練り上げた、その人の「作品」であると思っている。人間の顔立ち、表情の中には、その人の持つ、識見、意志力、性情が見てとれる。私は時折、己の悩み、疑問を胸に、その写真の前に佇むことがある。目の前の人は誠実、謙虚、寛容、寡黙、熟慮断行と評された人であり、何人をも優しくつつみ込む包容力を持っている。一方、私は粗・野・卑の三拍子揃った性格を持ち、歯に衣着せぬ辛辣な暴言（本音？）を吐く人間である。大平さんとは真逆の人間であり、その軽重を天秤にかければ、月とスッポン、提灯と釣鐘である。しかし、目前の慈愛溢れる温顔、眼差しに接すると、不思議と素直な自分に返ることができる。そして、私の煩悶も消え、教えられ、己が非をさとる。毎週の様に当館に来てその蔵書を借りて行く〟Sさん〟も、その自宅に大平さんの写真を掲げ、朝夕挨拶をかわし、又、私と同様、難問を抱えた時は大平さんに問いかけている様である。

その大きな写真の左手奥には「大平文庫」がある。大平さんは生涯に約一万二千冊の書物を手にしたようである。その内の七千冊余が本棚に収められ、一般市民の貸し出しに応えている。現代は活字離れの時代である。利用者の少ないことが悔やまれる。私は時折、参観者から〝大平さんはどんな人ですか〟と尋ねられることがある。そんな時〝己を高め、人に推されて、総理大臣にまで上り詰めた人〟と答えている。そして、その、己を高めた大きな要因が、この「読書」にあったのではないかと考えている。古今東西、その多岐に渉る膨大な蔵書に圧倒される。大平さんは幼い頃から勉学への想いが強く、恩師・先輩を敬愛し、私淑し、その感化を受けながら、一人読書に勤しんだ様である。残念ながら、今ではこの「私淑」「感化」という言葉も〝死語〟になっている感がする。

最近私は、宇宙、地球、生命の誕生とその歴史に興味を覚え、その宏大無辺、神秘、摩訶不思議の世界に驚嘆している。又、人間の肉体、頭脳の組織、機能にも同様の驚きを感じている、この五尺余の肉体には、それを構成する骨格・筋肉の中に、神経・血流が全身隈なく縦横に行きわたり、五臓六腑は驚くべき精巧・精密・精緻を尽くした素晴らしい生産・処理工場である。又、その頭脳の各部位はいかなる超大型コンピューターと云えども、足元にも及ばない能力と可能性、その伝達、連携プレーを保っている。

そして、五感を介して感知した情報は瞬時に脳内に伝わり、集約、精査、統合して適正、的確な指令を発している。従って人間の行動、能力の優劣・可否はその頭脳の働き如何による。そして、それを高める為に、日頃の知識の吸収と蓄積、思索、経験と修練、加えて豊かな想像力（創造力）が求められる。即ち、〝能力＝脳力〟である。そして人間の身体は、六十兆個に及ぶ細胞が昼夜を分かたずこの命を守り続けてくれている。私は朝夕の散歩の折、足を止めて、道端の草木や昆虫、小動物を見るにつけても、人間として生まれた喜びを覚え、彼らの

〝いのち〟を戴いて生き永らえていることに感謝している。私も案外真面目な（？）人間であり、仏門（？）に近づいているのかもしれない。又、最近の世の中の風潮に疑問を感じている。粗悪なテレビ番組、ゲーム、ケイタイに依存し、その行動基準が外見、世間体、風聞に左右され、目先の物欲、拝金に流されているように思えてならない。仏門では貪欲・瞋恚・愚痴を人間の三毒とし、其処からの脱却を教えている。もっとも、傍らの私の妻も同様に、軽佻浮薄なテレビ番組に興じ、化粧品、サプリメント食品のチラシに見入っている。

私は時々〝肉体へのサプリメントもいいが、少し頭脳への栄養補給をしては？〟と皮肉を云っている。「人間は考える葦である」従って人間から、知識の吸収、思考、思索を除けば只の生物・動物である。最近の政治家、一般人に拘わらず、首を傾けたくなる言動が多い。半世紀も前、すでに大宅壮一が警告を発し、数学者岡潔が予告している。又、人間の頭脳は二～三％しか使われていない様である。残る九十七％は未使用の「新品」である。しかし使わなければ只の肉片である。勿体無いことである。肉体は二十代以降劣化の一途をたどるが、頭脳、その知性・感性は使うほどに鋭敏になり、その回路は進化するそうである。従って老人だからといって悲観することもない。私は還暦を過ぎて、暇つぶしにボーリング場に通ったことがある。偶然、まぐれとは云え、二、三度、二百点をクリアしたことがある。又、同級生仲間と「月いちゴルフ」を楽しんでいるが、時には八十台がでることもある。左程、若い頃と変わらない。劣化する体力を技術とメンタル面で補っている訳であり、またスコア的には可能性が残っていると思っている。老いの身を労りつつ、適度な運動と知的好奇心を失わず、日々の新聞、読書をはじめとして、頭脳への刺激を心掛けたいと考えている。

再び閑話休題――、二階への階段を上がると、右手に床の間付きの和室に、古色をおびた座卓がひとつ置かれ

帰郷時、大平総理が寝泊りした２階の和室

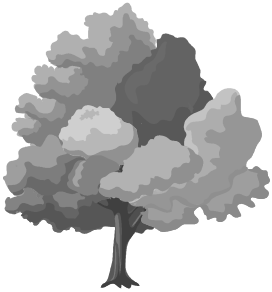
ている。大平総理が帰郷時、寝泊りに使用した部屋であり、当時のままに保存されている。質素倹約を信条とした六畳一間の小さな部屋である。その奥のフロアは四方の壁面に沿って展示ケースが並び、写真、資料、遺品等々が収められている。その一品一品に、大平さんの熱い想いや事蹟、足跡が窺える。その中に私の〝お気に入り〟の写真がある。昭和二十七年衆議院選に初出馬した時のものである。遊説途中、田舎の畦道に腰を下ろし、昼食後のつま楊枝を使っている姿である。飾らない、素朴な自然体である。大平さんは、その庶民的な姿・心を終生変わらず持ち続けた人であり、〝政治家である前に一人の人間として〟生き、その生涯、誠実、謙虚な姿勢を貫いた人である。そして常に、庶民の心を忘れず、公僕に徹し、志を抱き、国民・国家の将来に熱い想いを馳せた政治家ではなかったかと思っている。そして、私が最も大平さんに魅かれるのは、貴賤上下を問わず、どんな人達とも、目線を〝相手と同じ高さ〟に置き、心を無にして静かにその話を聴く姿勢である。某テレビ番組ではないが、口角沫を飛ばし相手の話に耳を傾けることなく、罵声を浴びせ、その言葉じり、片言隻句を、声高に責めたてる姿を見てウンザリする。この人間社会に於いて、対話、コミュニケーションは基本であり、まず相手の話、言い分をよく聞くことが大切である。大平さんは、招かれざる深夜の酔客に対してさえも、嫌な顔一つせず、従容としてその相手の話にうなずきながら、明け方まで聴いていたという。そして、当日、関西方面への出張の為、やむなくその事情を話した後、そのまま東京駅に向かっ

たそうである。私はその忍耐強さに驚くと共に、そこには、クリスチャンとしての深い人間愛を感じる。山頭火の歌に〝わけ入ってもわけ行っても青い山〟というのがある。大平さんは知れば知るほど魅力のある人である。そして、その人の生涯を見る時、其処に「桃季無言下自成蹊」の風景が目に浮かぶ。

来春、この記念館を辞した後、世の毀誉褒貶と少し距離を置き、小さな空き農家でも借りて、晴耕雨読、その納屋で陶芸などの趣味を楽しみながら、小欲知足、自然の恵みと、朝夕、その四季を感じつつ、少しの好奇心とその可能性を求めながら過ごしたいと考えている。そして〝人に縛られず自分を縛らない生き方〟(曽野綾子)をしたいものだと思っている。

〝明日ありと思う心のあだ桜　夜半に嵐の吹かぬものかな〟(親鸞)――、ということもある。その時が来るまで大平さんの色紙に見る「不苦去日多、只求失日少」の日々を送りたいものである。

最後に――、饒舌、且つ不遜な拙文を謝すと共に、文中の誤謬、過不足、お許し下さい。



在岡山半百歳
―「水道工事屋」の日々―

観一・12回　片山　泰弘

観音寺から国鉄予讃線に乗り、宇高連絡船でうどんを頬張り、宇野線を乗り継いで弱冠に充たざる私が岡山駅頭に下り立ったのは、昭和三十六年春の盛りでありました。人に流されるまま駅舎の外に押し出され、初めて見る町の埃っぽさには驚きましたが、国体開催に向けての再開発工事の所為と後に納得したものです。

これより春暉（シュンキ）あふれる学生生活が開始され、種々の点で故郷との違いに気付かされました。中でも日々口に入るものにその差を感じました。まずは水。水道の水さえも甘露でした。そして米。学食、一膳飯屋、どこで食っても備前の米は美味でした。逆なるものは豆腐、油揚、練物の類。これらの印象は今もってインプットされており、所変れば品変る、地方の文化、風習の違いを学ぶ出発点となりました。

今一つ驚かされたのは備前の三川。夏日何日雨降らずとも、三川の水は揺らぐ事なく悠々と滔々と去りまた来たりで、水不足の辛さを肌で知る身にとり、岡山県の懐の深さを感じずにはいられませんでした。

そして医師となり泌尿器科に入局したのは昭和四十三年。ここは体の中を流れる尿の通り路、則ち腎、尿管、膀胱、前立腺、尿道等を担当する科で、私は体の水道工事屋と自称しています。水に関する臓器を専門にしたのも備前三川への強い憧憬があったのかもしれません。

さらに歳月は巡り巡って、昨年定年を迎え悲喜こもごもの権利？（前期高齢者、介護保険支払、ジパングクラ

ブ会員、県立施設無料等）を頂戴し、晴耕雨読の緒につく予定でありました。しかしながら種々の報道にも見られる如く、勤務医不足による医療崩壊がますます深刻化している昨今、今しばらく地域医療の一翼を支えねばの思いから現在岡山市西大寺の岡村一心堂病院―ここは三川の一つ吉井川畔に在り眺望絶景―で若い先生方に交じって切磋琢磨の日々です。ここまで事無く到る事が出来たのは、同窓、同僚の面々、そして香川県人会、観一青春会をはじめとする同郷の方々のお陰と心から感謝している次第であります。

さて瀬戸大橋開通後既に二十年余を経ましたが、当時讃岐と岡山を結んでくれた宇高連絡船、その岡山の玄関口たる玉野の病院に赴任するに到ったのも、思えば不思議な縁でした。病院からは行き交う船舶、四季折々に色合いを変え、時には水光天に接すが如き穏やかな、また時には白馬の疾駆するが如き荒々しい瀬戸の海を眺める事が出来ました。その海はいつも有明浜と伊吹島のそれと重なり、私を慰め励まし続けてくれたのです。

その故郷との絆であった連絡船が役目を終えるに伴い企画された「さようなら宇高連絡船」に乗船したのは、昭和六十三年四月のある晴れた日の午後でした。航路を指示する大きな声が交錯する操舵室の中で、制服姿も凛々しい船長さんの説明に聞き入りつつ、二度と見られぬであろう宇野、高松両港の埠頭を、瀬戸の島々を脳裡に焼きつけた一時でした。

「さようなら宇高連絡船」に乗り、船長さんと並んでパチリ

先述の如く老壮青程よく交じる病院で心身とも充実した第二の勤務医人生を歩んでいる私ですが、趣味的なものと言えば吉川英治の三国志を読んで以来の古代中国歴史物が好きで、今でも史記の項羽本紀の四面楚歌の一節

等を諳じて独り悦に入っています。また、最近は呆け防止も兼ねて漢詩作りに独学で挑戦中。拙文が目を汚すのは薫風五月、苦慮の今は梅花二月の故、如月の一詩を奉じて筆を置かせて戴きます。

如月偶作

泰山

凛然如月晨　凛然如月晨（リンゼンタルジョゲツノアシタ）
躊躇寒衣抱　躊躇寒衣抱（チュウチョシテヲイダク）
乳靄庭隅満　乳靄庭隅満（ニュウアイテイグウニチ）
日色東山微　日色東山微（ニチショクトウザンニカスカナリ）
霜草一枝香　霜草一枝香（ボウエンシュウジャクトブ）
茅簷衆雀飛　茅簷衆雀飛（カンシュウジャクトブ）
衣冠四十年　衣冠四十年（イカンシテアゲントタガウ）
欲揚心事違　欲揚心事違（ヨレカツヲタダキテ）
著褐但一霜　著褐唯一霜（キレカツヲタダキテ）
日夜余殃稀　日夜余殃稀（ヨヨヨオウマレナリ）
残年復幾何　残年復幾何（ザンネンマタイクバソ）
一樽仙界帰　一樽仙界帰（モテニセンカエル）

略歴

片山泰弘　S18・2・20生

昭和36年3月：観一卒
36年4月：岡大医学部入学
42年3月：岡大医学部卒業
43年4月：岡大医学部泌尿器科入局
47年4月：岡大医学部助手
52年4月：玉野市民病院部長
60年4月：玉野市民病院副院長
平成8年4月：玉野市民病院病院長
17年8月：玉野市民病院名誉院長
20年4月：岡村一心堂病院顧問

隣の席の人

観一・16回　新田タエ子

平成八年五月、ゴールデンウィークの後、数日ぶりに出勤した机の上に高校同窓会の案内状が届いていた。

「空白の三年間」と思い続けてきた高校時代にほとんど懐かしさはなく、すぐにも欠席の返事を出そうと万年筆を取った。ところが、急に一人だけ会ってみたいと思う人が頭をよぎった。

出席はしないけれど、返事も出さないことでその想いに折り合いをつけた。

「先祖が勤皇の志士である」「屋号があった家」「阿波のどこかの城主の姫君が輿入れしてきた」ことなど、何の価値もないと思える家柄にプライドを持っていた両親から、「この家は後継者がいるんや、お前が継がないかん。」と言われ続けて私は思春期を迎えた。両親の言う「絶やしてはいけない家系」の、三姉妹の長女というだけがその理由であった。名字が変わらない自分の人生を怨んだ。先が見えないからこそ、その後の人生を夢見ることができる。可能性も広がる。女に生まれながらも嫁ぐことができない人生の空しさ、夢をもてない無念さを表現するには私の語彙はあまりに少な過ぎる。私は全てに努力することを捨て、夢遊病者のように意志もなく高校に入学した。

私の隣の席は空いていた。「盲腸で入院しとるらしいわ。」と隣に座るべき人の噂を上の空で聞いていた。「盲腸」が完治したらしい五月のゴールデンウィーク明けに「隣の席の人」は初めて席に着いた。田舎の中学から入学した私はショックを受けた。まず男性にしては色が白いこと、これは病院に一ヶ月余り入院していたことが理由かもしれない。次に足の長さである。小さな机と椅子

のセットから誰よりも長くはみ出している。さらには、一ヶ月余り遅れた高校生活に微塵の不安も感じさせない威風堂々の構えである。正義感は最強。「またケンカしよるわ。」という話をよく聞いた。ケンカはほとんどが友人をかばうためのものであった。勉強もよくできた。日常生活にほとんど関係ない代数、幾何とその証明問題、ベクトル、微分・積分、サイン、コサイン、タンジェントなど「高等数学」を完全に理解できているふうであった。中学の時は好きであった数学がとたんに理解できなくなった私にとっては神にも見えた。「上の空」は吹っ飛び、私の興味は一瞬のうちに彼に注がれることとなった。

単純な私は彼への興味を友人に見破られることとなり、おせっかいな友人がある日、その旨を彼に伝えたようである。「意中の人がおるそうやからあきらめた方がええよ。」と、これが友人のお節介な介入の顛末である。もともと女として普通には送れないと諦めの人生、夢見るような男性との出会いなどあってはならないと覚悟してはいたけれど、諦めはこれで完璧なものとなり、私は高校時代を心の中で「空白の三年間」と名付けた。

同窓会のクラス幹事から「返事届いてないよ。」と電話がかかった。「行く気ないから欠席にしといて。」「うちのクラス、出席者少ないんよ、私の顔、立ててよ。」などのやりとりがあり、返事を出さなかったにもかかわらず、幹事への義理で不承不承出席することとなった。

ところが、八月十五日の同窓会の前日に大型台風上陸で高速道路が閉鎖された。当時の転勤先は自宅から二〇〇キロ余り離れていたため、私の故郷への道はこれによって閉ざされた。急遽その旨、幹事に電話を入れた。

「台風なんかすぐに通り過ぎるよ。朝になったら高速の通行止、解除されるわよ。明日の朝帰っても間に合うがな。」「朝、帰っておいでよ、帰って少し寝たらええがな、間に合うように電話で起こしてあげるよ。」参加しなくてよい理由ができたと内心よろこんでいたにもかかわ

らず、優柔不断な対応の結果、幹事の強制に応じた形でまたまた参加へと転じた。

数少ない友人の一人が幹事であったことが、度重なる障害をクリアしての同窓会参加へと繋がった。

同窓会当日、五四〇名の同級生のうち一五〇名余りの参加のもと、三年時のクラス毎にテーブルが準備されていた。「隣の席の人」と三年時のクラスは別であったから、離れたテーブルにきっと参加しているであろう彼を、伏目がちに探しはじめた。彼は誰もが認める学年でも有数の有名人、それにひきかえ私は、ほとんどの人の記憶にないであろう超目立たない存在であった。彼の記憶にも全く残ってはいないと思っていたから「空白の三年間」以来の彼を、かすかに確認できるだけで充分であった。突然、横に座っていた別の友人が偶然にも彼の所在を私に聞いてきた。

「娘の資格試験のことで相談したいんやけど彼は来てるんかな？。」結果、堂々と彼を探すことができた。まるで奇蹟に近いような展開である。

初対面から実に三十五年、長い足と、男性にしては色白なくせに精悍、スポーツマン体型など高校時代そのままであった。「ちょっと話してくるわ」という友人の後にわけもなくフラフラと追随していた。もし視線でも合うようなことがあれば「一年の時、同じクラスだった者です」とでも言ってみようか、などと考えていた。

ところが、用事があったはずの彼女よりも、黙って後ろに立っている私に反応してくれた彼は「ああ、卒業以来ですね。今どこの病院で勤務しているんですか？」と言った。

それからさらに一〇年、我々同級生は還暦を迎えた。同窓会以来、二〇名近くのメールアドレスに同胞配送という形のメール交換が始まった。メール上で誰からともなくみんなで還暦旅行をしようという話が持ち上がり、

忙しい日々をお互いにやりくりし一泊二日の京阪神旅行を行った。京都祇園祭の宵々山から帰ったホテルでシャワーをし、パジャマに着替え、一室に集まっての昔話は当然のように盛り上がり、隣室の客に壁を蹴飛ばされ、その度にヒソヒソ話となり、盛り上がったらまた蹴飛ばされヒソヒソ。何時間そうしていただろうか。心の中にまだ話していたいと言う余韻と未練を残し「もう解散しようよ」と言うことになったのはすでに朝方近くであった。無邪気にはしゃぎながら高校時代にタイムスリップした実にピュアな一時であった。それぞれの部屋に戻っていく還暦であるはずの後ろ姿に、共通の不思議な情緒を漂わせていると感じた。同じ文化、教訓、校訓のもと、同じ期間、同じ空気で呼吸した高校での三年間、その後は異なった道に歩を進めてきたのではあるけれど、同級生ならではの郷愁にも似た旧友への想いが確かにあると感じた。

言葉には出さないけれど、必ずや再びこうした時間が共有できるであろうと誰もが確信している。このメンバーの中に長年、はるか遠くに感じ続けてきた「隣の席の人」がいることが未だに不思議でならない。

（厚生労働省第二共済組合本部
共済文芸第五十一集にて
特選・新人賞受賞文）

古本屋三十年　第七回「与謝蕪村」

観一・19回　中尾　隆夫

大阪の北船場、現在の中央区今橋通りを御堂筋から四本東へ入ったところに大阪美術倶楽部がある。これは旧鴻池邸の跡地で、ゆかりの茶室松筠亭を今も引き継いでいる。美術倶楽部は道具屋さん、今は古美術商というが、その業者達の組合で、月二回オークションが開かれている。茶道具から始まって掛け軸、陶磁器、刀剣、油絵、西洋骨董など古がつくあらゆるものを扱っている。このクラブに入会する資格はかなり厳しいものがあるが、中尾松泉堂も戦後会員になり、現在に至っている。私の専門の浮世絵や古書が出品されるとなると他の業者に負けないように競り合って買うようにしているが、うまく行ったり行かなかったりである。私は古書が専門なので普段のお付き合いは古書業者が殆どであるが、最近はこの美術商とのお付き合いも結構増えてきた。その中に茶道具商の戸田政（とだまさ）さんがいる。

四年前の三月、この戸田さんに「中尾君、六月になったら徳島へ鮎を食いに行かへんか！」と誘われた。茶道具商は大体、表・裏・武者小路の三千家のいづれかに属してお茶会などのお手伝いをするので、茶道具に詳しいのは勿論であるが、料亭や料理のことに精通していて特に料理に関してはうるさいのである。その戸田政さんのお誘いであるので無論断るわけにはいかない。二つ返事でＯＫ、同行は大阪美術倶楽部の重鎮、坂田さんと樋口さんと教えられた。坂田家は大阪を代表する表流の茶道具商で、その大阪の組織である同門会を宗匠の陰から四十年以上も支えてこられた名家である。樋口さんは裏千家で、八十五歳の今なおバリバリの現役である。

六月初旬、四人を乗せた車は淡路島を縦断して鳴門大橋を渡り、徳島市内より眉山を右に見て田舎道へ入る。

やがて車は山間部に入り佐那河内村を過ぎた田んぼの真ん中の小さな家の前で止まった。入口の板の看板に「虎屋」と小さく墨で書いてある。お抹茶を頂いて気分が落ち着いたらさっそく料理が運ばれた。付き出しとお吸い物の後に、緑の笹の葉っぱにのった十二、三匹の鮎が出てきた。女将がまず一匹を皿に取って一番の年配と思われる樋口さんに差し出す。次いで坂田、戸田政、中尾の順番で、「さあどうぞ。」の声がかかる。私は初めてなのでどうやって食べたらいいのかちょっと躊躇していると、戸田政さんが、「頭からがぶっといきなはれ。」と言ってくれた。言われた通り頭からがぶりといった。焼きたての香ばしさが口いっぱいに広がり、頭も骨も自然にとろけて鮎独特の苦みと共に私の胃の中におさまった。次の一口で残りの尾っぽのほうを味わう。「鮎ってこんなにうまいもんやったんや。」思わず発した私の感嘆の一言に樋口、坂田氏も肯いている。戸田政さんは慣れているかのように泰然としていた。この瞬間から、鮎に対する私の考えはすっかり変わってしまった。

聞くところによると、ここのご主人は嵐山吉兆で修行した料理人で、おかみも京都の人だという。その二人が徳島の山ん中で、静かに客をもてなしている。私は何か世の中の不思議を見たような気になり陶酔してしまった。中国でいう桃源郷とは違うとしても、何だかそうであって欲しいと思ってしまった。後で分ったことだが、鮎は虎屋の主人が前日に吉野川の支流で獲ってきたものだし、何気なく美味しく頂いたあのお吸い物の中身は、鳴門で獲れたばかりの鮑をすり潰して団子状にしたものであった。戸田政さんは、徳島の茶道具屋さんにここを紹介されて以来数年間、続けて通っておられるという。

今年もまた六月四日に行って、初鮎を頂いて来た。今年は最初に出された、から揚げの二匹の鮎が言いようもなく美味で、毎年育ちの違う鮎を味わえる幸せを心から感じた。日本の、その中でも特に四国の自然の恵みは本当に有難い。一年に一回の贅沢ではあるが、私を誘って

くれた戸田政さんには特に感謝しなければならない。

さて、私の古本屋談義も今回で七回目、書物に欠かせない文字や紙の話、世界の本の歴史などは一通り書かせて頂いた。また日本が世界に誇る木版芸術である浮世絵の話も書かせて頂いたし、前回は源氏物語のことについて書かせて頂いた。今回は年末より中尾松泉堂の社長に就任した多忙のせいもあり、何について書こうか実際六月までは全く考えてなかった。原稿は六月末までに書き上げなければいけないので、時間がない。そこで思い付いたのが「与謝蕪村」である。数年前偶然手に入れた三点の蕪村の肉筆がきっかけで私は蕪村のことを懸命に勉強した。調べるにつれ、蕪村という俳人の面白さに私はどんどん引き込まれていった。名前は勿論知っていたが、蕪村について詳しいことは何一つ知らなかった私にとって、何か新しい彼女が出来たような、そんな楽しい気分にさせられた。三年間ほど取り付かれたように毎日蕪村と向き合った。お蔭で蕪村についての知識が随分身に付いた。この蕪村さんだったら書ける筈である。

七年程前の春だったと思うが、神戸に住むお客さんから、掛軸を処分して欲しい、との電話を頂いた。この家は江戸時代から代々灘で酒造業を営んでいたが、昭和初期の当主が病弱の故をもって、それを人に譲って隠居した。隠居後は茶の道に入り、風流三昧の生活を送ったという。私に軸の処分を依頼されたのは、この茶人の息子さんである。今からもう十五、六年も前であろうか、この人から沢山の和本を買わせて貰ったのが我々のご縁の始まりで、それ以後数回、茶道具や掛け軸の処分を手伝っていた。家に行ってみると、軸類が二十箱ほど用意されている。その中に蕪村の絵が一本入っていた。

軸類は総て大阪美術商倶楽部で売ってあげたが、蕪村の絵は私が自分で買った。当時は特にその軸が良いとも悪いとも殆ど気にせずにいた。それから暫くして美術クラブに俳人の貼り混ぜ屏風が出た。見るとその中に、署名は無いが蕪村に似た筆跡の俳句の原稿が一枚貼ってあ

った。蕪村のほんものとの自信は無かったが、何となく欲しいと思って競っていると、運よくそう高くない値段で落ちた。この原稿には俳句が十七句書かれていたが、その中の一行に、「岩倉の遊女恋せよほとゝきす」という句が書かれていた。そしてこの句の上部に「狂女」と書かれていて「狂」の字の横に小さな片仮名で「キヤウ」とわざわざルビを振ってあった。もう一度句を見てみると、遊女の字の上を〇で囲んであるのがわかった。ということは遊女を狂女に書き直したことを意味している。こんなことが出来るのは蕪村さん本人しかいないので、私はこの原稿は蕪村本人が書いたものに間違いないと確信した。が、念の為に知り合いの蕪村研究家に見てもらった。その先生も「蕪村に間違いありません」と言ってくれ、おまけに「中尾さん、この中に今までに知られてない句が三句入ってますよ」と教えてくれた。

二度あることは三度ある、とは誰が言ったか知らないが、この年の秋に私は蕪村の手紙を一通手に入れた。京都の古本屋の会に出たのである。同じ年に、偶然にも三つの蕪村が私の手に入った。この不思議なる偶然が、私のそれまでの三十年余りに及ぶ古本屋人生を大きく転換させる契機になろうとは、当の本人にも全く予測が出来なかった。

それから一年か一年半も経った頃だろうか、美術クラブのオークションで私は蕪村の短冊を買った。いい物だとは思ったが、確信がない。そこで写真をいつもの先生に送って意見を伺った。いつも機嫌良く教えてくれる先生なのに、一か月たっても何の返事もこない。病気でもされているのかと不審に思って電話をすると、何だかちょっと怒っているようである。何故怒っているのか、直ぐには理解出来なかったが、どうも京都で買った蕪村の手紙のことを言っておられる。その手紙も実は買ったすぐ後、先生に見てもらって本物とのお墨付きを頂いていた。先生は相当気に入られて、私に譲って欲しい旨を申し込んだのに、私から何の返事もないのが気に入らなか

ったようである。私はその蕪村の手紙を先生にお売りする、と言ったこともないし、先生から値段を聞かれた記憶も無かったので、少々誤解があると直感したが、一言謝りの言葉を申し上げて電話を切った。

自分で判断する能力が無いからついつい先生に甘えてしまう。我々古本屋と先生がたは昔から教えられたり教えたりで、お互いある種の信頼の上に付き合っているのが普通であるが、当然我々が教えることより先生方から教えられるほうが多いのは当たり前である。分らないことがあれば専門の先生方に聞けばいいように簡単に思っていた私にとって、この事件は一つの戒めとなった。その先生が怒るのも、ある意味では当然かも知れない。見てもらうだけで売らないのは確かに相手にとっては気分が悪いはずである。この一件で私は、自分の無力さがいやというほど身に沁みた。では一体どうすればいいのか！話は実に簡単である。自分でわからないなら、勉強して自分でわかるようにすればいいのである。

ともかくも蕪村について色々なことを学ばなければいけない。さっそく次の日から蕪村に関する書物探しが始まった。五十五歳だったか、或いは五十六歳になっていたかも知れないが、五年位前のことだったと思う。先ずは講談社の『蕪村全集』を手に入れ、それから『蕪村事典』『蕪村の新研究』等々とにかく蕪村に関する研究書は目にするもの全てを買っていった。すぐ三十点ばかり集まったように記憶する。今から思うと本当に恥ずかしい気がするが、当時の私の蕪村に対する知識といえば若干の俳書に関するものだけであって、それ以外は殆ど何も知らなかった。集まった参考書の中からまず読み易そうなものを拾って読んでいった。二～三ケ月すると大まかな蕪村像が見えて来たが、年のせいもあって読んだ後からすぐ忘れるような有様であった。それでも毎日々々、自分でも不思議なくらい熱中出来た。ともかく誰にも頼らず、蕪村のことなら何でも自力で判断できる力が付くまで努力しなければいけない。そんなに勉強するのは受

験勉強以来のことだが、苦痛は少しも感じなかった。それどころか、蕪村に関する知識が増えてくるにつれて、むしろ喜びや楽しみを感じるようになっていった。あくまでも知識の対象として始めた蕪村研究であったが、毎日蕪村さんに接しているうちに、この蕪村さんという江戸時代中期の人間が、いつの間にか私の中にじわりじわりと入ってきて、私の心を捉え始めた。俳人として、また絵かきとして二つの顔を持つ蕪村さんの魅力に私は次第にはまり込んでいった。

蕪村は天明三年に六十八歳で亡くなったから、逆算すると享保元年（一七一六）に生まれたことになる。出生地は大阪の毛馬村で、家は庄屋か何か大きな家柄だったようだ。だから小さなころから絵や俳句に親しむ環境は整っていたと考えられる。十五歳のころ家を継いだが、何らかの理由で財産を潰し二十歳過ぎに江戸へ出た。江戸では巴人という人の内弟子となって俳句を学んだが、蕪村が二十七歳の時巴人が亡くなったので、下総結城の友人、雁宕（がんとう）を頼った。以後十年くらいその近辺に住んで俳句や絵の勉強をしながら、芭蕉を慕って芭蕉が歩んだ奥の細道を辿り、東北方面へ旅したことが知られている。三十六歳の夏、突如として関東を去って上京、京の都での生活が始まった。ところが三十九の春過ぎ、今度は京都を去って丹後宮津に行く。宮津はどうも彼の母の出所らしく、また古い俳句の友人もいた。ここで三年を過ごし、宝暦七年の九月、四十二歳で再び京に上った。これより九年間はここ京都でじっくり俳諧と絵に向き合って暮らすことになる。やがて結婚して娘を儲けたが、五十一歳の秋、突然讃岐へ旅立った。三年間を讃岐で過ごし、五十三歳の四月二十三日、讃岐を発って三度京へ上った。これより亡くなる迄の十六年間が蕪村の事実上の活躍の時期で、大成期である。この時期は絵かきとしての進歩が特に著しかった時代と言えるが、明和七年五十五歳で夜半亭二世を継いだ頃は、俳諧の活動も盛んに行った。しかし蕪村にとって俳諧はあくまで

も好きもののいはば趣味の世界であって、彼の職業ではない。日々の生活の糧を得るものは彼の描く絵であって、俳諧では飯が食えなかったのが実情である。それは彼の強い決意と意志の表れであり、本当は俳諧でも飯は食えたかもしれないが、そうしたことを蕪村は潔しとしなかった。安永四年十一月刊行の『平安人物志』という当時の名家案内書に、蕪村は画家として載っているので、この頃には一流の画家として公に認められていたことになる。蕪村は六十歳を過ぎて小糸という祇園の若い芸妓に惚れて、年甲斐もなく祇園通いを始める。当時では別にどうこう言うことも無い行為であろうが、お硬いはずの蕪村さんがやったということが大変面白い。蕪村の俳句には時々艶っぽい句がみられるが、これもまた蕪村の魅力の一つであることは間違いない。一般的には安永七年、蕪村六十三歳の時に謝寅の画号を得て、蕪村の南画は最高潮に達したとされる。蕪村の絵で落款に「謝寅」と署名のあるものは、最晩年の作で最も尊ばれ、値段も一番高いということになっている。

蕪村の名前は現在ではかなり広く知られている。芭蕉程ではないかもしれないが、とにかく江戸時代の俳人の中では知名度が高い。芭蕉といえば「古池や…」の句がすぐ浮かぶし、蕪村といえば「春の海ひねもすのたりのたりかな」である。最近では芭蕉と蕪村は俳諧の双璧のようにいわれるが、その辿った歴史は全然違っている。芭蕉は生前から俳句の第一人者で、死後は俳句の神様、いわゆる俳聖である。生前から多くの弟子が育って、その弟子達がまた芭蕉の俳諧をずっーと引き継いだので、常に俳諧のチャンピオンたりえた。現代に至るまで揺るぎなき王者である。蕪村の俳句は、実際は芭蕉にも劣らない実力の持ち主であったが、絵かきとの二足の草鞋を履いたため、その後継者に乏しく一時は巷に消え去ってしまう。明治の時代になって松山から正岡子規が現れ蕪村顕彰を提唱し、次いで萩原朔太郎がそれに続いたので蕪村は再び蘇った。芭蕉研究は今やもう殆ど百％に近い

状況で進んでいるのに比べると、蕪村の場合はまだやっと五～六十％を過ぎた所といえるのではないだろうか。蕪村の場合、俳人と画家の両面から研究しなくてはいけないので相当に厄介なのである。何故なら蕪村の俳句を研究する人達は画を解せず、画を研究する人は俳句を解せず、という風だからである。未だ両方に通ずる人を聞かないのが現状である。

蕪村は大坂毛馬村の庄屋の子といわれるから、小さいころから相応の教育を受けたと考えられる。学問をさせられた半面、またいつしか興味を持った俳句や絵にいそしんだ可能性も十分である。事実狩野派の画家について学んだことが知られている。ただ、その家を壊して大坂を逃げるように出て行った蕪村が、江戸に出て生活するには当然誰かの世話になるより仕方がない。勿論俳諧は自分で志した道ではあっただろうが、それより他に選ぶ道が無かったともいえよう。俳諧の宗匠の弟子になればともかく食うのは食えることだろう。数年経って俳諧の腕が相当に上がったころ、師匠の巴人が亡くなったため俳句の先輩である砂岡雁宕を頼って結城に行った。雁宕の家は名門だったので、その取巻きの俳人達との交流も盛んだったようである。結城のあるお寺の襖に描いた絵が今も数点残っているので、この頃蕪村が絵を描いていたことは事実である。お寺で寝泊りさせて貰っていたのでそのお礼に描いたものであろうが、このことは当時の蕪村が既にいっぱしの絵かきであったことを示唆している。俳句の道と絵かきの道と、どちらも捨て難いし又どちらも蕪村には可能であった。

三十六歳の時上京して、三十九歳の時宮津に行く。宮津へ行った理由は母親との関係でよく言われるが、間接には八僊観彭城百川との関係も見逃せない。宮津でも俳句と絵画の両方が残っている。四十二歳の時京へ帰って来てそれより九年間は比較的おとなしく暮らすことになる。この時期の一番の出来事は結婚である。四十五、六歳の頃であろう。結婚は生活がある程度落ち着いたこと

を示すのだが、蕪村の場合はよくわからない。与謝蕪村の与謝氏を名乗るのもこの頃からである。やがて娘が出来て、「くの」と名付けた。この頃の俳諧活動は結構盛んで俳句仲間も増えている。居を三菓軒と号し、絵の落款に三菓居士と書いたものが見られる。絵の方は、京都の古いお寺を回って寺に伝わる名画を模倣して勉強したり、また中国の絵の手本『芥子園画伝』などから漢画をよく勉強したらしい。またその当時長崎に入ってきた中国人沈南蘋などの絵もよく写している。後の画家、与謝蕪村が出来上がる下地がここに見られる。

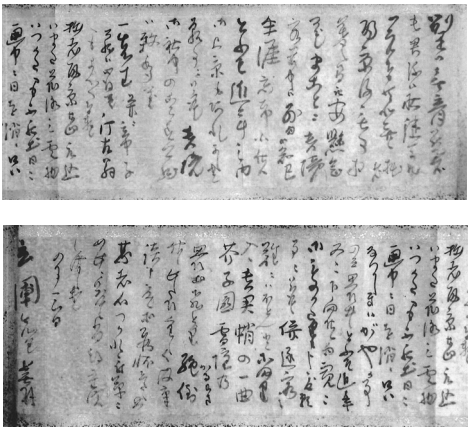
明和三年、五十一歳の秋、蕪村は突如として讃岐へ旅立つ。この理由はよくわからないが、人生五十年という当時の常識からすればなかなか判断し難い。まだ幼い娘を残してもどうしても行かなければならない理由があったことだけは確かだろうが、どの本にも明確な説明はない。讃岐には三年間滞在したが、この間結構多くの絵を残している。丸亀の妙法寺で書いた蘇鉄の絵は讃岐時代の代表作で、その他「猛虎飛瀑図」「寒山拾得図」や「晩秋遊図」という鹿の絵などがある。この時代、俳句よりは絵の名品が多く残っているということを考えると、どうも絵の為に行ったとする方が当たっているように思える。また金毘羅と蕪村の関係も非常に深いものがあるようで、象頭山下臨川亭で描いた山水図や、象頭山下客舎で描いた秋景山水図が残っていることからも肯ける。琴平の菅家は当時の名家で、蕪村の後援者であった。蕪村は明和三年の秋から明和五年の四月まで讃岐に滞在したが、最初から三年間も讃岐に居るつもりは無かっただろう。案外居心地が良くてついつい三年にもなってしまったのではないだろうか。讃岐の人からは「もうちょっと居れや」と言われ、京都の人からは「早く帰ってこい」と言われ、遂に四月二十三日慌てて京へ帰った。その前日二十二日に丸亀の玄圃に宛てた書簡が残っている。それには

…拙明日出足仕候　まことに滞留

中は別而御懇意実に旧相識何とそ
今一度接席仕候而寛々御いとま乞も
可仕存候処そのことなくもはや今明日
斗之讃州と存候得山川雲物共ニあわれを
催申候事に御座候兎角京師より寛々
可得貴意候…

と書かれている。当時讃岐から京へは十日ほど掛かったらしいから、五月の初めには京都に着いたことだろう。それから三カ月間は俳句仲間に引っ張り凧にされ、溜まった注文の絵を描くのに超多忙で、讃岐で世話になった人達に礼状を書いたのはやっと八月になってからであった。その当時の状況を書いた蕪村の自筆書状が残っているので、その一部を紹介してみよう。

…拙老帰京甚取込
いまだ花洛之雲物
いつかたへも不罷出日々
画中ニ日を消候　只
なつかしきハがやか事
のミ思ひ出候　とふぞ近年
又々下向仕候而寛々
御ものがたりも申度願
事ニ御座候　併遂客之
難ニハ不とんとこまり
入候…



蕪村自筆書状　玄圃宛　明和五年八月三日

画中ニ日を消す、とは毎日毎日絵を描いていることを指し、遂客之難ニハ不とんとこまり入候、とは客人が多くてその対応に困り果てているのである。だから礼状を書くのが遅れた、というのである。宛先はやはり玄圃である。讃岐を去る時の手紙も、京都へ帰ってから初めて描いた手紙も、宛先が玄圃であるということは、蕪村さんはこの人に余程世話になったらしい。お医者さんらしいが、それ以上のことはわからない。

実をいうと、この手紙は現在私のところにある。もう二十年も以上前に詫間のある人から譲り受けたものだ。当時の値段としては途方もなく高価だったように記憶するが、この人からは観音寺の浮田家文書を頂いたり、他にも結構良いものをわけて貰っていたので、仕方なく相手の言い値で買ったのである。『蕪村全集』の中でこの手紙の写真版を目にするまで、私はこの手紙のことをすっかり忘れていた。うちの倉庫の片隅で二十数年もの間眠っていたのである。さっそく取り出して読んでみると中々面白い内容である。講談社が私に無断でこの手紙を載せたのはちょっといただけない気もするが、こうして再会出来たことを思うと、「ラッキー」と感謝したくなる。

讃岐から帰って以後、明和七年五十五歳で夜半亭二世を継いだ蕪村は、翌年大雅の十便図に対して十宜図を描いて、ここに俳人としても画家としても一流人として人生の晩年期に入っていった。特に絵の分野での上達は急激で、独特の南画の境地を切り開き、また俳画と後に呼ばれる略画を、軽妙ながら奥行を想像させる手法で描いて見せた。まさに蕪村独自の世界である。屏風などの人物を描かない風景画の大作の中にも常に、生きている人間の匂いが感じられるのは、俳句を通して人間と自然の関係を鋭く見つめ続けてきた蕪村ならではの創作であろう。逆にいうならば、人物画の中にこそ蕪村の本領が発揮されているのである。

蕪村の生涯の傑作は、今年国宝になった「夜色楼台図」と言われるが、確かにその通りである。あの京都か中国

のどこかの街を連想させる雪の夜の風景には、人は一人も描かれていない。だが明かりが漏れる楼閣からは明らかに人間の匂いがもれている。人はいないが、その中でひたすらに生きる人間の姿が思い浮かべられる。この絵は蕪村単独の絵として初めて国宝に指定された。

俳画の中に「浮世又兵衛」の絵が逸翁美術館にある。浮世絵の創始者とされる又兵衛が、酔って踊っているだけのごく簡単な絵である。そしてその又兵衛の下に瓢箪が一つ打ち捨てられている。中身の酒は飲みほされて空っぽになったので、ほったらかされたのである。絵の上に三行の賛に続いて俳句が一句書いてある。

又平に遭うや御室の花さかり　　蕪村

私はこの絵がとっても好きだ。蕪村は、酔って一心不乱に踊る又兵衛に、明らかに自分の姿を重ね合わせている。そういう私もまたこの絵にあやかりたい一人である。この絵に勝るとも劣らないのが「澱河曲」の図である。伏見の渡し場で一夜を共にした遊女が客を見送る、簡単な絵である。二人の人物が実に巧妙に描かれており、見る人は思わず遊女と客の一晩を詮索したくなる。ちょっとだけ見せて、広く想像してもらう。蕪村の俳画の世界は宇宙のように広がりをみせる。

六十を過ぎても若い女に惚れるような、いかにも人間味のある蕪村はん、あんさんは本当におもろい人でんな。

「文楽」を観ましょう

観一・21回　荻田　清

大阪が世界に誇れるものの一つに、文楽という古典芸能のあることはよく知られています。しかし、実際に劇場でご覧になった方は、意外に少ないかもしれません。そこで、文楽のご案内をさせていただきます。

大阪日本橋にある国立文楽劇場は今年二十五周年を迎えました。地下鉄日本橋駅でおりますと、駅構内に看板やポスターが賑やかに飾られています。案内に従って地上に出ますと、千日前の通り。すぐに劇場の幟が眼に入ります。文楽は三業といいまして、三つの部分から成り立っています。物語を節をつけて語る大夫、その語りを助け情緒を醸し出す三味線、その物語を舞台で演じる人形。大夫の語りは、浪曲に似ていて節と台詞が混じり、基本的には一人で語ります。三味線は太棹といって、低音のよく響く弦楽器。人形は一体の人形を三人の人形遣いが遣い、人が演じるのとほとんど変わらない細かな動きを出し、表情のないはずの人形が生きているように見えます。ですから、文楽を楽しむには、いろいろな楽しみ方がありまして、眼を閉じて語りを聞く、三味線の音色に耳をすまし、音楽として鑑賞する。写実的な人形の動きに感動することもできます。内容は、親子・夫婦・恋人同士の情愛を描いたものがほとんどでしょう。封建的と敬遠されそうですが、人情は時代を超えて胸を打つものがあります。

はじめての方はむつかしいのではないかと心配されますが、今日では舞台の上に字幕もあり、有料ですがイヤホンガイドのサービスもあります。プログラムを購入しますと、解説もあり、あらすじも詳しく記されています。大夫の語りをそのまま文字にした「床本」も付録についています。料金も気になるでしょうが、今年の四月公演

の場合、一等席が五八〇〇円（学生は四一〇〇円）、二等席は学生・一般ともに二三〇〇円でした。上演時間は休憩も入れて、約四時間余り。時間の長さと生の舞台だということを考えますと、映画に比べても高くはないと思います。能や歌舞伎、オペラやコンサートなどに比べると、断然安い！？。昼夜二部に分かれていますが、両方をみますと、現在六人います人間国宝を含めて、総ての演者（文楽では技芸員と呼んでいます）が見られるのです。

ロビーも広く豪華で、ぜいたくな気分にさせてくれます。ただ、いつも文楽を上演しているわけではなく、正月、四月、六月（鑑賞教室）、七・八月（三部制で子供向けの作品もあります）、十一月に行われます。切符はインターネット予約もできますが、今のところ当日でもまづ大丈夫。ただし、貸し切りの時がたまにありますので注意が必要です。

このように申しますと、何やら劇場の回し者のようですが、実はそうなんです。私の研究の専門分野は上方の歌舞伎史ですが、文楽も広い意味では専門になります。文楽に近づいたいきさつは、小著『笑いの歌舞伎史』（朝日新聞社）に述べましたが、学生時代に通った橘ノ円都という落語家さんの影響でした。そして、劇場設立後まもない頃でしたが、一階ロビーの奥にあります展示室の展示の手伝いを何度かさせていただき、係の職員さんとも親しくなりました。八年前からは、研修生に大阪の文化・大阪の芸能を教えています。これから技芸員になろうという人に、大阪で生まれ育った文楽の周辺・背景を教える役目です。技芸を教えるのではありませんが、教え子には変わりません。彼らの芸に私の講義がどれだけ役立つのかわかりませんが、劇場で顔を合わしますと、「おはようございます」と挨拶してくれます。我が子のように応援したくなります。彼らが一人前になり、やがて文楽を支える人材になる日を心待ちにしています。また、近年は公演について意見を求められる委員も務めさ

せていただいており、観客の増減は関係者と同様毎回気になります。これからも文楽の継承・発展のために、微力ながら側面から協力したいと思っています。

関西在住のみなさん、ぜひ国立文楽劇場に足を運んでください。

（おぎたきよし・梅花女子大学教授）

文芸コーナー（漢詩・短歌・俳句・川柳）

漢詩三題

観一・9回（臥徳）高嶋　睦徳

一、遍路此の道

寒雨の深山に、詠歌流れ　　寒雨深山流詠歌
同行万里、懸河を渡る　　同行萬里渡懸河
無縁の石仏に、千年の涙　　無縁石佛千年涙
客子は時に停まりて、閼伽を汲む　　客子時停汲閼伽

［仄起式　下平声五歌韻・平成十九年十二月・第百二十四作］

［通解］

冷たい雨が降りそそぐ深山に般若心経の読経が流れ、お遍路さんは、四国八十八ヵ所霊場の長い険しい道程を弘法大師と共に行脚巡礼の旅を続けています。

途中行き倒れになった人々の無縁仏の石佛は雨に打たれて涙が流れているように見えてなりません。無縁仏に人は額ずき一瞬時が止まったように、合掌しています。

二、豐稔池の放流

古城の風格、驚風を巻き　　古城風格巻驚風
万丈の水煙、青翠の中　　萬丈水煙青翠中
飛瀑千年、臥龍覚め　　飛瀑千年臥龍覺
蜿蜿気に乗じて、天空に騁す　　蜿蜿乘氣騁天空

［平起式　上平声一東韻・平成二十年三月・第百三十七作］

［通解］

ヨーロッパの古城の風格を漂わせる斬新な構造物である豊稔池には、激しい風が巻き上がり、青々とした山に、水煙が高く舞い上がっています。

眠っていた龍が目覚め、潅漑用ダムの放流は、あたかも水を得た龍がくねくねと天空に向かってまっしぐらに昇っているようです。

三、大相撲

土俵の闘魂、威勢高く　　土俵闘魂威勢高
瞬時の勝利、万人号ぶ　　瞬時勝利萬人号
雄豪悍を鎮めて、気駘蕩　　雄豪鎮悍氣駘蕩
蹲踞悠然として、手刀を切る　　蹲踞悠然切手刀

［仄起式　下平声四豪韻・平成二十年九月・第百五十六作］

［通解］

土俵上での本番は、礼儀をわきまえた真剣勝負として相撲道に適（かな）うものであり気魄の漲（みなぎ）る瞬間の勝利の醍醐味は、観衆にも格別のものが伝わって来ます。

対戦後の勝負師のそれまでの厳（きび）しい表情を消した姿には、春風駘蕩の魅力があり懸賞金を受け取る手刀は、心に深く感じ感謝の念を込めて［心］の字を描いています。

（朝日新聞・天声人語・十九年十二月）

［作者］　香川県観音寺市　平和産業（農業）
［詩軒　露風舎］［吟道　臥風流］に所属

移ろい

緩やかに流されゆくがに思ひゐし今は淀める淵に佇(た)ちをり

族(うから)らの囲みし卓も古びたり孤(こ)に歩(ほ)を合はす日日にも馴れ來(く)

何となく立ち寄り度くなるブテックのシャッター降りて再(ふたた)びの春

三女・41回　河田　光子

ガンという奴

放射線も手術も癌は嘲笑い潜んでいたか夫の内に

少しずつ壊れゆく夫両の手で抱けばかすかに微笑むばかり

あの世などあるのだろうか促され夫の砕けた骨拾いおり

観一・1回　岩田美代子

世　相

デパートの割引セール今日もあり「定額給付金持ってきなさい」

若者のネットカフェ難民という悪しき時代ゆく夕日沈みぬ

それぞれが生きる孤独の今の世よ引きこもらずに出てきて欲しい

観一・9回　内海　善子

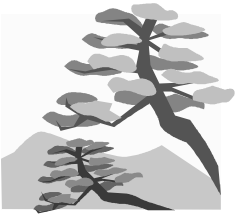
夢

仲々死なれん正月に尋ね来し孫達にワビルように九十二の父は言うなり

散髪行きたい突然父は訴えるデイの前日暖かき午後

昨日逝きし友が誘いに来たが断った後から行くきに先に行っといて

観一・19回　鈴木マチコ



ひな祭り

三女・27回　西原　ゆき

読返す百壱才の師の賀状

七宝のおはじき弾く春火燵

襞に日の当りあたらず山眠る

坪庭に陽を呼びいれて若楓

ゆるやかな人の流れや雛祭り

（引田町）

防風掘る

三女・30回　清水　正子
（雪解同人　俳人協会員）

村時雨魚籠引っ提げて駈けゆける

落葉降る西行像に陵（みささぎ）に

くれなゐをほのと兆（きざ）せる防風掘る

砂かずくおさなき葉なり防風掘る

爪先で立ちて子遍路献灯す

防風＝有明浜に生える刺身の「つま」などにする食用草

コスモス

三女・41回　藤田八重子

悼（とう）　長野美枝様

慎（つつ）ましき昭和の母や寒の梅

コスモスの風もろともに束ねけり

年寄りに長き老後や鰯雲

秋寂（さ）ぶや汲めど尽きせぬ宗祇水（そうぎすい）

菱の実や溜池今も恐ろしき

僧　宗祇……京の相国寺にお産れになった室町時代の方で西行法師と並んでの文人。松尾芭蕉より先輩

喜寿の春

三女・42回　田中千鶴子

おさらいの「梅は咲いたか」喜寿の春

花びら餅の紅のほんのり二年坂

花菖蒲水茎（みずくき）美しきおしな書き

コロコロコオンコロコロコロコ河鹿（かじか）鳴く

（三朝温泉にて）

シャンパンの栓とぶ遺影笑ってる

（亡くなった夫の写真）

夏帽子

三女・42回　森　晴美

歓声をあげて修羅（しゅら）引く夏帽子（近つ飛鳥博物館）

修羅＝大石や木材をのせて運ぶそり状の道具

撫牛の鼻先光る春近し（北野天満宮）

美術館巡る池の端（は）冬すみれ（大和文華館）

天草の殉教の碑や梅早し

寒玉子三輪の御杉に供えたり

花の昼

三女・42回　三好　昭美

車窓拭く遠近の山霾（よな）ぐもり

霾＝黄砂

近江まで各駅停車花の昼

飛花落花亀一列の甲羅干し

花日和鯛のあら炊きうす味に

君子蘭ひとかたまりの笑顔かな

初霜

観一・4回　冨士田浩子

初霜や白き野兎出てきそう

水仙の香に杖の歩を寄せにけり

社寺巡る夫(つま)にこよなき冬日和

紅(べに)さす手止めて鶯美声かな

花冷えに立ち往生の蕾かな

家族

観一・19回　河田みどり

花婿のシルクハットや夏来る

母の日の母に今年はこの花を

紅糸(こうし)もて夫(つま)のマフラー編む手凍(い)つ

家族のこと出来る喜び秋日和

東雲(しのめ)に男子誕生鯉幟

川柳風「幸せの自分史」

観一・11回　出口　修身

1　人生に　あと半分を　当てにして
2　古びたが　持たせにゃならぬ　このカラダ

という訳で、当てのないあと半分?を当てにして、生きている、いつのまにか?六十八歳。ここらで取り急ぎ、半生を振り返り、「自分史」を遺しおく次第。

3　今日生きた　益は何だろ　ねえお前
4　過ぎてから　わかる幸せ　今は何
5　愛しくて　やがて哀しき　人の生

四年前には右脚を十五針縫う皮膚癌。昨秋はまた腹を十三針縫う腫瘍を取り出し、それが「悪性線維性組織球腫」という珍しい癌で五十針、三十六日間の手術入院。

6　戦前と　判る名前で　やがて古希
7　墓石に　名があるだけの　三姉弟
8　遺児となり　戦後苦労の　親思う

幼時に三姉弟・父母を亡くし、先妻は三十八歳で無念の病没。養父母も最近逝って、沢山の命を預かった身。

9　六十年　君の名前が　今も出る
10　公園に　秘密基地あり　僕を待つ
11　遊ぼうぜ　テナガエビ語が　招いてる

生地も今は三豊市豊中町。観音寺に養子に来て、観小二年梅組に転入した。桜・梅・桃・杉・松・竹・菊・藤・萩・椿の十組の沢山の友達。

12　理科好きは　小学校で　決まるかも
13　トンボ追い　海で潜って　郷土愛
14　あの頃の　君が生きてる　故郷は

周りの自然も豊かだった。四年生の時に、理科の三好先生と雲辺寺山へ、行ったのが、植物との出会い。

車窓から見える七宝山の山並み、三架橋や琴弾公園の松林のそこここに思い出がある故郷だ。

１５　聞こえ来る　祭りの音や　父の声

１６　わが町に　ひばり来たのに　見に行かず

１７　図書館と　本屋が街の　避暑地かも

チョーサに乗って叩いた太鼓、行かなかった琴弾館のひばり公演、公園の図書館で読んだ、トムソーヤーの冒険だの江戸川乱歩。

１８　恋してる　心はいつも　十五歳

１９　運動場　あの娘がこちら　誰見てる

２０　好きな娘が　教室にいる　月曜日

中一からほんのり、中三からぐっと、高一では体が震える片思い。高二では月曜日が来るのが待ち遠しかった。

２１　読みたくて　布団の周り　本だらけ

２２　必死だが　自分が判らぬ　高校生

２３　模擬テスト　生きる力は　どこにある

しかし、何よりも入試という頑固な壁を越えて、大学に行かなくてはならない。勉強とは何かは考えずに、何かを探して賢治や辰雄、長塚節「路傍の石」や「次郎物語」を読んだ。

２４　哲学と　議論足りない　大学生

２５　大学は　自分の道を　探す旅

２６　政治家を　選ぶチカラだ　民主主義

大学でも与えられた勉強や読書はしたが、哲学や社会科学の勉強が足りなかった。恋も不十分だった。「チボー家の人々」や「魅せられたる魂」に影響された。

２７　初仕事　真珠・ハマチの　宇和海で

２８　いせえびの　幼生フィロソーマ　何食べる

２９　黒潮の　海の深さよ　青の濃さ

宇和島での水産試験場技師を二年間、主にイセエビとサザエの養殖を研究。その後赤潮の研究をしようと九大大学院の水産学科に行ったが、力不足金不足で中退し、宮崎県の高校の教員に。

３０　日が暮れて　話尽きない　ボクと君

３１　手紙書く　もらう幸せ　８０通

３２　君が好き　私貴方が　もっと好き

結局、運命の人は幼なじみの同級生。一年間の文通８０通を交換して、二十六歳で結婚し、宮崎市に住んだ。

３３　夜間部の　生徒に社会の　隅を見る

３４　議論して　力つけてく　職場会

３５　先生を　誰にするかを　考えろ

最初の年は、定時制夜間部の一年生担任。毎日三時間の授業の予習に追われる。生物観察や実験の準備、プリントのガリ切り。職員会議や教職員組合での自由な議論に、先輩から学ぶこと多し。

３６　傍にいて　いつも触っていたい人

３７　人の中　泳いで社会が　広くなる

３８　ダイヤいい　けど君の指　それ以上

洋裁と料理が上手で、面白い事が好きな妻だった。近所の注文で縫った服が好評で、知人も増えていった。暮れのボーナスでＯ・Ｎと彫った結婚指輪を買った。

３９　役割を　担って社会を　泳いでく

４０　発言が　民主社会を　支えてる

４１　生きる知恵　動いて学べ　若いうち

二年目から何と組合の分会長になり、勤務条件等について学校長等と団体交渉もすることに。

４２　足に合う　いい靴君と　ボクみたい

４３　寝る前の　花札遊びに　役増やし

４４　テレビ無きゃ　遊ぶ智慧も出　子も増える

花札も気分転換によくやった。休みには時にバスで霧島山に行った。

４５　好きなって　フシギだなあと　キッスする

４６　出産日　朝タクシーで　出かけ行き

４７　パパが好き　お産のママが　くれた文

昭和四十四年、四十六年と男の子が、二人生まれた。次男は里帰りして、善通寺国立病院で産んだ。

４８　子が寝たら　パパがお乳を　欲しがって

４９　ママの膝　順に討ち死に　耳掃除

５０　子も親も　一体だったね　あの頃は

親には何の財産も無く、すべて一からだったが、妻の

顔・子供の顔を見れば幸せだった。
妻は家族の耳掃除が好きで、よく膝に寝転ばせた。

５１　電話無い　分だけ手紙　書いたよね

５２　仲が良い　姉妹の手紙　二百通

５３　義母の文　千の蔵より　子は宝

私たちが観音寺から、遠く宮崎まで来たことや、当時はまだ電話が無かったこともあって、姉妹や兄嫁そして父母から、手紙をよく貰った。妻も手紙を沢山書いた。

５４　過去知って　現代変えて　未来来る

５５　アメリカは　戦後日本を　右に曲げ

５６　清張に　ノーベル賞を　上げてくれ

アメリカは戦後の日本で、レッドパージと戦犯復帰指令、更に再軍備で憲法違反を強要して、民主化の道を妨害したが、一九六〇年～松本清張は「日本の黒い霧」などで、それを告発した。

５７　聖書の手　仏のベトナム　焼き尽くし

５８　沖縄を　発つファントムの　意味重し

５９　戦闘機　落ちて指輪の　ジュラルミン

またアメリカは一九六〇年から十五年間も、ベトナムの近代化を武力で干渉し、沖縄から出撃してラオスにも二百万トンの爆弾を落としている。日本ではその抗議と反戦を支援して、墜落戦闘機体から指輪が作られた。

６０　ベトナムを　総括せずに　また転ぶ

６１　優しいな　ベトナム人は　テロをせず

６２　仏より　神が戦争　好きみたい

あれから三十四年、ベトナムは世界に何の迷惑も掛けず、迷惑を掛けたアメリカは、知らぬ顔で、相変わらずどこそこで戦争をしている。

６３　高校を　手紙で学ぶ　八百名

６４　レポートに　スクーリングに　学びの目

６５　日曜は　友に会える日　通信制

三年後に私は通信制の高校に転勤になった。全日制にも定時制にも行けない高校生のための課程だ。

６６　二十五を　過ぎたら乳がん　要注意

６７　風呂上り　ちょっとポーズの　ママと子と

６８　切り取りし　乳房に五月の　窓明かり

妻は三十歳の春に、左の乳がんと分かった。次男の授乳中に考えもしない、幸せの中の突然の宣告だった。

６９　借金で　住んでる夢の　マイホーム

７０　ヘンな顔　成長日記に　貼ってある

７１　十五キロ　パパはバイクで　お勤めに

６年間馴染んだ市内を離れて、昭和四十九年五月に、隣町の丘の上の団地に移った。子供は幼稚園へ入り、空き地に新しい家が増えていった。

７２　中古でも　ドライブ楽しい　四国まで

７３　束の間の　退院世界が　輝いて

７４　来世は　もっと早くに　逢いたいね

八年間の不安と闘病の末に、昭和五十五年六月妻は三十八歳三ヶ月で亡くなった。この事については、別に「愛妻百歌店・八百通の手紙」として資金が出来れば…、出版したい。

７５　再婚は　子供がいるから　いいと嫌

７６　嫌ならば　いつでも帰れ　義父ぽつり

７７　ありがとう　妻に何回　言ったかな

先妻が亡くなって一年後に、今の妻と見合い再婚した。上の子が六年生だった。料理が上手で、何事にも真面目、子供も可愛がってくれた。

７８　羽打ちの　バドミントンは　激スポだ

７９　理容科の　授業を手話で　やってます

８０　農業高　生徒自転車　七百台

再婚の翌年、県南部に転勤し、子供も中学を転校し再び借家住まい生活となる。この地で普通科・ろう学校・農業高校と移り、借家十一年で里山に再度新居を決意。

８１　出世より　親に嬉しい　読書好き

８２　逞しき　子の背目で追う　初詣で

８３　見慣れない　靴が嬉しい　子の帰省

子供たちも夫々に成長し、広島へ佐賀へ、また熊本へと、迷いながらも自分が選んだ道へ巣立っていった。

８４　社共から　なぜ社公かな　曲がり過去

８５　細川の　小選挙区制で　国曲がる

８６　連合に　代えて生活　どうですか

労働界は八十年代に入って、社公民路線に再編されて、細川・村山と政権を担ったが、米の自由化や消費税のアップ、小選挙区制の施行、政党助成金の新設と、日本の未来は開けず、再び橋本自民党政権復活。

８７　子は外車　親は軽乗る　車観

８８　「お義父さん」　娘ができて　オレも歳

８９　無事着いた　広島・岡山　子からＴＥＬ

子達は県外で働いて伴侶を得、年に二度帰って来るだけの、家族になった。

気をつけて元気で頑張れよ、と言うしかない。

９０　目覚ましの　様な仕事が　楽だなあ

９１　プリクラを　貼ったうちわで　扇(あお)がれる

９２　ハゲと呼ぶ　ならば五十に　なって来い

教員の仕事は当時はわりと自由で、生徒達とも親しめたし、教職員組合の仲間も多く、自分が成長できる環境だった。

９３　五十二で　入口に立つ　糖尿の

９４　寄付にクジ　付けたのオレも　売りたいな

９５　冷えていりゃ　俺どこのでも　美味いがナア

仕事も増えて、知らぬ間に無理をしていた。慌てて健康改善に取り組んだ。ストレスを減らし、食事改善と運動の励行で、何とか乗り越えた。

９６　元気だよ　君のお陰さ　妻に言う

９７　好きだった　還暦会で　言っている

９８　まあ一杯　生雲丹生牡蠣　生海鼠

還暦を祝う高校の同窓会が故郷で計画されて、四十二年振りに参加した。五百四十人近く居た同級生の懐かしい顔が揃い、肩を組んで歌った。しかし逢いたい人の何人かは来ておらず、亡くなった人も四十人近い。

９９　六十に　して惑い立つ　来てみれば

１００　六十の　日々が寿命の　計り時

１０１　九条の　お陰で生きた　六十年

退職して、自由な日々をどう生きるかを考えた。これからの生き方が、命の長さを決め、人生の充実度を決める。これすべて自分次第の責任と結果。

１０２　巾着に　賽銭残して　母は逝き

１０３　次お前　同居九年　父も逝き

１０４　亡くなって　生きてる間と　気がついた

信心と愛情深かった養母は、四国で八十一歳で亡くなった。また大工だった養父は、その後宮崎に来て９年、九十一歳で亡くなった。

１０５　その時の　ためにと毎日　励むこと

１０６　前屈し　自分の脚に　見惚れてる

１０７　丈夫な歯　豆と幸せ　噛みしめる

先ず体力作り。今の努力が十年後を決める。特に足腰の強化をと近くの神社の石段上りを日課にした。三十年間通う歯科医には、年二回点検に行く。

１０８　独仏中　露韓西伊の　外語順

１０９　未来では　一番若い　今日の俺

１１０　二十年　飽きない人を　探してる

もう一つは外国語。ＮＨＫラジオで今まで聞けなかったハングルやスペイン語を聞いた。そして、いい本・いい友・いい伴侶だね！

１１１　ケガしない　ためには夏の　過し方

１１２　上級の　ゲレンデ怖い　初すべり

１１３　銀世界　リフト着く間の　出会い友

修学旅行の引率で滑ったスキーの味が忘れられず、退職後にスキー用具を買って、先輩と九重山へ行った。蛇行が出来るようになって、上級コースを滑る最初は、決断と勇気が要った。広島北部のサイオト・瑞穂にも夜行バスツアーで行ったが、落差と距離に魂消た。

１１４　最高は　さあ行こうとも　聞こえるね

１１５　七千段　泰山登って　竜に会う

１１６　来てみれば　一人旅居た　中韓に

外国一人旅二週間にも韓国、中国に挑戦した。行って

みると、結構一人で来ている人もいた。これを「韓国・中国一人旅」二百四十頁の本にした。（千二百円）

１１７　ジイちゃんと　孫に言われりゃ　仕方ない

１１８　孫四つ　年に六日の　おジイちゃん

１１９　納豆の　玉子掛けご飯　好き四歳

六十一歳で初孫誕生。二歳から「ジーちゃん」と言い出し、五歳でトランプの神経衰弱や五十一を遊べるようになった。六歳の夏にページワンを教えたら、六時過ぎから二階に上がってきて、「やろうよ～」と起こされた。

１２０　酒瓶も　飲めば減るわと　妻も言う

１２１　飲んでると　飲まぬとおれぬ　身の弱さ

１２２　酒やめて　また飲み出して　中々ね

定年後は、夕食時にコップ半分だが、毎日飲んだ。楽しみでもあるが、ノドが一寸オカシイと、叔父もなった喉頭癌を心配する。

１２３　何で死ぬ　癌が時々　聞きに来る

１２４　闘うと　いうより耐えた　癌切除

１２５　肺の形　した灰皿が　置いてある

六十五歳近くになって、右足の脛に薄紫の皮膚癌が見つかり、切除して十五針縫った。

また六十七歳の秋には、へその左の腹筋内にこれまた癌が見つかり、切除に五週間入院した。

長男が喫煙するので、これも心配だ。

１２６　民主党　作って安泰　保守政治

１２７　大火事と　聞こえる国の　大赤字

１２８　自殺者が　日本嫌だと　三万人

小選挙区制とマスコミの劇場報道で、保守政治の漂流は日本を崩壊へと導いて行く。非正規雇用の増加、少子化と年金・医療制度のぐらつき、軍事費の増大と莫大な赤字。子・孫に未来はあるのか？

１２９　アレをしに　行きつつコレして　アレ忘れ

１３０　妻の手の　代わりにリモコン　握ってる

１３１　顔浮かぶ　名前浮かばぬ　あの俳優

最近は人や物の名前が出て来ない。木や草の名もすぐ

忘れる。これでは森林ガイドも出来ない。

１３２　マナー三　恋したい七　化粧する

１３３　化粧して　よっしゃ勝負と　気合入れ

１３４　済まないね　男はバカで　気が多い

年取っても色気は大切と思う。魅力ある人に出会うと元気が出る。

１３５　ピアノには　蓋があるから　弾きにくい

１３６　バイエルの　他に教本　あったんだ

１３７　遅くない　いやもう遅い　ピアノ弾く

三十年前に買って、調律だけのピアノに最近触れた。「メトード・ローズ」のピアノ一年生という、フランス式教則本を見つけた。弾いてみると、よく出来ている。弾いたり止めたり、酒と似ている。

１３８　人生を　ひばりの歌と　振り返る

１３９　いい時に　生まれてきたと　思いたい

１４０　昭和史の　十八巻を　読むトイレ

美空ひばりの声の豊かさと共に、見る人を愉しませる笑顔や動作に見惚れる。生を見なかったのが残念。

１４１　やっぱりね　平和がいいよ　生きている

１４２　武器持てば　やっつけろーの　声揃う

１４３　九条を　守ろう署名を　九の日に

昭和の戦後を一生懸命に生きてきて、何より自由と平和の有難さを、実感する。

しかしまだまだ武力に頼る勢力は大きく、日本の民主主義はもろい。

１４４　三権ポン　何で負けたの　最高裁

１４５　軍事費を　謝罪と援助に　当て居れば

１４６　改憲が　大股で来る　投票法

核の密約、軍事費増大と基地の拡充、改憲と進めば、アジアの被災国との緊張は一挙に高まる。温暖化の地球で、大赤字の日本で、バカはやめてくれ～。

１４７　死ぬ順は　家内が決めて　オレが先

１４８　今のとこ　家内がはるかに　元気です

１４９　もうかなり　夫離れは　出来ている

年取り、知人が亡くなり、近所の誰かが亡くなると、どっちが先に死ぬかの話になる。平均的にも最近の健康状況でも、やはり男の分が悪い。

１５０　妻の後　トイレは湿布の　ニオイする

１５１　もう七十　まだ七十か　言われたよ

１５２　まだ死ねぬ　パリ・ニューヨーク見ていない

世の中には年取っても元気な人がいる。半分運、半分心がけだろうが、広い世界を見て平和な世で死にたい。

１５３　トキドキね　手紙来るから　生きている

１５４　便りない　生きているのか　いないのか

１５５　今年こそ　友も年賀に　書いてある

手紙が来るのは嬉しいもの。自分は書かないのに、ポストは開けてみる。友の誕生日に書くのがいい。

１５６　湯たんぽの　代わり居なくて　湯たんぽし

１５７　病院に　来れば病気の　気持する

１５８　全身が　オレ生かすため　奮闘中

今の状況ではあと五年生きられるかも、心もとなくなってきたので、コレ以降は勝手な想像で。

１５９　米寿まで　生きてるならば　何をする

１６０　女の子　産めず今でも　悔やんでる

１６１　冥土まで　行くにも足腰　大切だ

年取れば、近くにわが娘がいればいいがと思う。ま、これも運というものか。

１６２　今朝もまだ　娑婆で目が覚め　幸せだ

１６３　生きさせて　貰っていると　言い出した

１６４　これからは　来世のために　修行する

動けるうちにやりたい事・やるべき事はやっておかねばとみんな言う。

１６５　いい景色　来れない君の　分も見る

１６６　夢に出て　おいでと写真　敷いて寝る

１６７　惚けたけど　有難うだけ　忘れない

長生きすれば一人にもなろう。ボケることもあろう。

１６８　死ぬ前に　よし十分だ　言いたいね

１６９　ムリせずに　死なせてくれと　一筆す

１７０　棺オケに　紙とエンピツ　入れてくれ

いざ死ぬと決まれば、本や日記、庭のツバキから貰った手紙まで気になるが、それも値打ちがあっての話。

１７１　百歳に　なれば女性に　囲まれる

１７２　長生きを　楽し～くさせる　友の数

１７３　好きなヒト　居るって何か　嬉しいな

１７４　ポスト見る　書いてないのに　来ないよね

１７５　いいツマを　得てこの上の　幸はなし

１７６　平和な世　でこそ新春　めでたけれ

１７７　最高を　維持するための　心がけ

最後まで読んで頂き有難う！並ぶ形もグ～。

いい人生も、自由と平和な世、いい政治あってのことと感じるこの頃です。

同窓会報告

三中四十回生、最後の同窓会を終えて

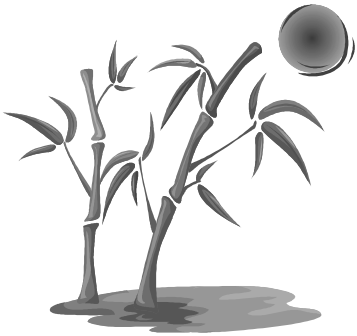
三中・40回　横山　照美

我々は、昭和十九年に三豊中学五年を卒業した。第一回の同窓会は、昭和二十四年・観音寺観光ホテルで行なった。それ以来、五十四年間に三十回、全国各地の同窓生のお世話で、楽しい思い出に残る同窓会が開催された。その後は東京・京阪神・山陽道・高松・三豊・観音寺の各地域で開催されることになった。三観地区は忘年会を兼ねて、毎年十二月五日に同窓会を実施していたが、寄る年波には勝てず平成二十年をもって、同窓会の幕を閉じることになった。

最終同窓会は、会員の希望もあり、記念すべき会でもあるから、気候の良い秋の観音寺・豊浜の例大祭の間を狙って十月十四日に決定し、開催した。

一、日時　平成二十年十月十四日午後二時半より
二、場所　観音寺町　『きくや』
三、参加者（十八名）
○京阪神組（三名）飯　豊人・合田英之・三好通雄
○山陽道組（二名）松浦良行・宮川　一
○三豊組　（七名）綾金二郎・安藤　章・今川文夫
　大久保　完・関　兼義・近井　進・原　矣
○観音寺組（六名）秋山孝雄・秋山隆之・内海復義
　小西芳隆・田中　覺・横山照美
◎物故者に黙祷　合田裕作君・安藤菊夫君
◎健常者…六八名（四七％）物故者…七八名（五三％）
◎写真撮影の少し前に綾　金二郎君・小西芳隆君帰る。
◎昔の小学校の学区制（三豊郡）一区から七区までの生存者六十八名中、軽重はあるものの現在約二十名の者が、病気で苦しんでいる。命の峠（八十五歳）を超え、人生の真の卒業と言われる卒寿に向かって、最後の頑張りを発揮したいと願っています。　擱筆。

三中　40 回生同窓会　　平成 20 年 10 月 14 日



三中　四十三・四十四回卒業生
平成二十一年同窓会報告

三中・44回　石原　敏夫

今年も三十三名の同窓が、一月十一日（日）十一時、観音寺グランドホテルに集まった。うち、県外からは六名の者が、わざわざこの会のために帰郷し、会を盛り上げて下さった。有り難いことである。

会は、恒例によって阿野勲・久保豊両氏の指揮による三中校歌の斉唱から始まる。「長瀾寄する燧灘、彩雲なびく巨鼇山・・・・・」と唄い進むに連れ同窓会ムードは一気に高まる。不思議なものである。多感な少年時代、共に過ごしたあの時の思い出とともに、校歌を通して育まれた三中生徒としての自覚と誇りがよみがえってくるのであろうか。その後、懇親に移ったが会は円卓を囲んでなごやかに行われた。

ところで、本年度の特色の一つは、八十歳という年齢を改めて感得させられる会となったことである。まず、会発足以来、世話人代表として格別のご尽力をいただいた相馬繁一氏が初めて欠席されたこと、さらに、数名の世話人から体調不良を訴え出られたことなどである。そこで、次年度以降の進め方を話題の一つとしたが、結論として「来年度は予定通り開催する」こととなった。しかし、この会のフィナーレを、いつ、どのような形で行うべきかということが、みんなの共通意識に上ったように思っている。

もう一つは、松尾秀昭氏の提言もあって、初めての試みとして出席者一人一人が「自分を語る」場を設けたことである。これまでは、自由な歓談でときを過ごしていたが、同窓会としてのいっそうの盛り上がりを期待してのことである。一人一人に与えられる時間は短かったが、凝縮したことばが語られ、心に残るひとときとなった。話の内容は、現況報告や往時の苦労話もあれば、さらには、自分流

の人生訓・処世術などもあり、様々であった。そうした語りを聞かせてもらいながら私が思ったことを列挙する。

○みんな老いたりとはいえ、自分なりの夢をもって日々精進している。それが健康維持の秘訣ではないかと感じ、学びたいものだと思った。

○戦中・戦後のどん底社会で成人した私たち。学力不足や職業選択等、苦労や悩みが多かった。しかし、反面、その時代でなければ培われ得なかった力を発揮して精一杯がんばってきた。今は満足し、充実感いっぱいである。幸せな時代だったと言えるのかも知れない。

○私たち世代だけが、体験的に身に付けている行き方観や日本人観を後輩たちにどう伝えるか苦悩している。全く同感である。困難なこととは思うがどうにかしたいものである。

会は例年以上に盛り上がり、予定の時刻を忘れさせられていた。迎えに来た家族に催促されてお開きとした。来年も、また元気に再会できることを楽しみにしている。

旧制三豊中学校第 43 回・44 回卒業生同窓会　H.21.1.11　於　観音寺グランドホテル

観一・三回生（昭和二十七年卒）同窓会

観一・3回　宮﨑美代子

喜寿が間近い第三回生同窓会が、平成二十年十月十九日（日）琴弾荘で開催された。出席者百十七名（内県外四十四名）ロビーでは抹茶の香りが漂う中、心和ませて話が弾んでいた。有明浜に向かって記念撮影し、会場に入った。

総会では、幹事高橋幸男さんが歓迎の挨拶で、かねてから最後の同窓会は、故郷の思い出を満喫したいという願いで祭の日を選んだことを話された。東京、京阪神、高松の代表者より活発なる近況報告があった。

真鍋昌平さんの乾杯の音頭で懇親会が始まった。「観一高思い出のメモリー」のスライドショー、高橋幸男さんの三味線演奏、カラオケ、スピーチ、一人芝居等、さすがはインテリ、拍手喝采だった。黒川悦夫さんの名解説のもと、皆がタイムスリップして見入ったコマ劇場は、半世紀経ったとは感じさせない。ＤＶＤに濃縮された「我ら浅春時代」は、トップに「卒業時の校門、校庭の楠木の匂いは今も変わらず、周囲に芳しい香りを漂わせています」に始まり、三女体育館建設資金カンパのため各町村を廻った移動劇、今も活動を続けている登山部…等、今は亡き恩師の思い出、ニックネームには久々感激した。

おしゃべりをする人、舞台で演出する人、カメラマンの中西さんは、名場面をキャッチ、会場は、笑い声と歓声であふれていた。

食事は、ちらしずし、田舎天ぷら、冷やしうどん、お祭り気分の男性に大人気だった冷やし甘酒などのふるまいがあった。「やっぱりうどんはええなあ。」「お祭りに来てよかったなあ。」と讃岐弁で郷土の料理に満足だった。

くじ引き大会では、地元でおぜぜと呼ばれている銭形せんべい、日の入り時期に美しい寛永通宝の焼き印の銘

菓観音寺、えびせんべい、おもちゃのちょうさなど、全員にはかつおあめを渡した。郷土色豊かな賞品でみんなは童心にかえった。

最後に校歌とふるさとを男女別に合唱した。

おしまいに、今までずっと続けて幹事をして下さった高橋幸男さんに、感謝の意をこめて花束を贈呈、同時に女子がクラッカーを放ったが三発以外は不発、会場は爆笑だった。

閉会は、川上洋子さんがお礼と、今後は同窓会という形でなくても、友との集いを大切にしたいという想いがあることを話された。

夜は二十五名が宿泊、参道に集ったちょうさのライトアップに魅了され思い思い見物し楽しんで帰った。夜は楽しく話が弾んだ。

翌朝ゴルフ組は、「八十才までがんばる。」とはりきって琴平カントリーへ向かった。

喜寿となった今、それぞれが生涯学習に励み、みんなとの交流にいそしんでいる。

最後に「喜寿を迎えた皆さんに贈る詩」を掲載いたします。

香川県吟剣詩舞道総連盟相談役　吉田剛穂（ごうすい）作（八十八歳）

三中34回卒（昭和十三年三月）三豊市高瀬町佐股在住

七十七齢今漸く臻（しちじゅうしちれいいまようやいた）る
往事を回看（おうじかいかん）すれば是（こ）れ青春（せいしゅん）
方（まさ）に知るべし此（し）れより心魂爽（しんこんさわ）かに
長生（ちょうせい）に努力（どりょく）すれば楽しみ最（もっと）も眞（しん）なり

七十七齢今漸臻
回看往事是青春
方知自此心魂爽
努力長生楽最眞

（上平声十一眞韻）

【解釈】今ようやく喜寿の年齢になりました。
振り返って自分の過去をみてみると、若さが満ち溢れていた。青春だったように思います。今からも、心のそこから晴れやかな気分を保って、健康で長生きする努力をすれば、とても楽しい人生だと思います。

【字句解釈】
臻る＝いたる
心魂爽かに＝心のそこから気分が晴れやか
楽しみ最も眞なり＝とても楽しいと思う

京阪神在住者一同

観一高三回生同窓会　第 11 回総会　　平成 20 年 10 月 19 日

第八回　亥の子会記

観一・5回　森口　郁子
大西佐恵子
中西美智子

♪ 日時　平成二十一年四月十一日（土）
受付　十一時～　宴会　十二時～十五時

♪ 場所　万葉荘（奈良市高畑町）

♪ 参加者　三十九名（男性十九名・女性二十名）

亥の子会報告　　**森口　郁子**

桜もすっかり咲き揃った春の一日、天候にも恵まれ予想以上に大勢が奈良に集いました。前日泊・後泊して、西は愛媛・香川・高知・岡山、東は東京・愛知から足を運んで下さいました。

受付後、賑やかに記念撮影し、ほぼ定刻、幹事を代表して藤村さんの開会宣言のあと牧野会長の挨拶、続いて前会長福田さんの乾杯の発声……。一瞬の間に十代にタイムスリップして司会の声も何処へやら、お互いの近況やら健康談義に花が咲き、カラオケや珍らしい体験談等々、和気藹々、あっと言う間の三時間でした。

今年は当番の大役を仰せつかり、気苦労もありましたが感動もありました。会長から全員に篆刻（テンコク）のミニ色紙（篆刻を始めた時に模刻した作品だそうです）をプレゼントして下さったこと、三年振りに顔を見せられた福田さんが闘病生活中だったにも拘らず、以前同様手塩にかけて栽培した瓢箪に長寿酒をご用意され、一同に一味も二味も違った美酒を、テーブルには季節の花を花器迄も手造

りされ会場に華やかさを添えられ癒しをもらったこと、お花達も幸せそうに夫々皆さんの懐に抱かれお土産になりました。

また、藤村さんの奥様のお心遣いで香川の味の甘酒を振舞って頂きノスタルジックな懐しさを覚え元気が湧いて来たことなど。お陰様で散策中に出合った鹿までニコニコ……、予め鹿との戯れのために用意した田舎の餌をあげると、また来てね……と挨拶してくれた様に思います。何はともあれ皆様の木目細い気遣いに幹事一同脱帽でした。

二次会報告

大西佐恵子

三時過ぎに散会となり、遠来のグループは二次旅行に出発したり、すぐに帰られる人もあり様々、時間のある方々を県庁舎屋上の展望台にお誘いし、道中浮見堂を右手に奈良公園を横切り、東大寺や美術館に赴く人達とも別れ、二十名足らずで庁舎屋上に昇りました。

見渡す限り明るい陽光に映る一面の緑の中、興福寺の五重塔が手の届きそうな所に聳え、東には「青丹よし、奈良の都」から移築されたといわれる東大寺の大屋根が望め、北は一条大路が広がり、西は生駒山から葛城山系が連らなる三六〇度の雄大なパノラマに皆さん大変喜ばれました。

夏日の様な日差しの中歩いて喉も渇き一休みと思って

も流石に人出が多く、やっと見つけた喫茶店で特大のブランデーグラスに入ったミックスジュースやアイスコーヒーに度肝を抜かれながら小休止してお土産の奈良漬を買ったりして、来年も元気に大阪でお目にかかりましょうと……。名残惜しい一日が過ぎてしまいました。

産地のひょうたんが色よく育つのを楽しみにしております。

亥の子会に出席して

中西美智子

今思うと座席の向こう三軒両隣りの方々との会話に終ってしまいました。あの人もこの人もと思っていましたのにチャンスがつかめず残念至極。四季の歌と聞いて飛び込んだカラオケ初体験、郁子さんの素晴らしい唄声にうっとり、自分が歌うのを忘れた程でした。

福田さんの丹精込めて作られたひょうたん、遠くから出席なさった良ちゃん（前谷さん）へ感謝の意を込めてプレゼントされました。それが何と幸運な事に私に廻って参りました。

同窓会が終りひょうたん酒の旨さを語る夫と共に福田

第8回亥の子会　於 奈良・万葉荘　平成 21 年4月 11 日

案内状 100 通　出席 39 名　欠席 24 名

平成 21 年度 第8回亥の子会出席者

	氏名（男性）	住所	出身		氏名（女性）	旧姓	住所	出身
1	秋山　照和	愛媛県	観音寺	1	秋山　勝美	合田	観音寺市	和田
2	大矢根博臣	名古屋市	仁尾	2	石川　繁子	合田	奈良市	紀伊
3	太田　義男	岡山市	豊浜	3	石川八千代	真鍋	宝塚市	紀伊
4	大平　俊平	大阪市	粟井	4	大西佐恵子	安藤	大和郡山市	一の谷
5	高橋　　啓	京都市	財田大野	5	神谷　繁子	橋本	高松市	一の谷
6	長船　　正	大阪市	観音寺	6	合田　房子	磯野	明石市	木の郷
7	鴨田　英作	仁尾町	仁尾	7	坂田きよこ	三井	東京町田	観音寺
8	曽根　　崇	多度津町	仁尾	8	白川　裕子	白川	東京中野	豊浜
9	高橋　清治	神戸市	一の谷	9	曽根　節子	喜田	河内長野市	仁尾
10	床田　弘幸	岡山市	観音寺	10	鳥取　和子	浅田	西宮市	一の谷
11	福田　定秋	奈良市	大野原	11	中谷　明美	山下	大阪市	観音寺
12	藤村　喜系	生駒郡	観音寺	12	福田　幸子	清水	高松市	大野原
13	藤川　　猛	三豊市	高瀬	13	森岡　和美	中野	京都府	高室
14	前谷　良典	観音寺市	観音寺	14	森口　郁子	藤田	奈良市	一の谷
15	牧野　孝明	豊中市	柞田	15	盛山多枝子	合田	大阪市	大野原
16	平山　　武	名古屋市	観音寺	16	西山千恵子	藪下	高槻市	山本
17	三崎雄一郎	京都市	仁尾	17	山地　佳子	中橋	神戸市	仁尾
18	守谷　　弘	八尾市	大野原	18	中西美智子	横山	大阪市	観音寺
19	矢野　　勲	吹田市	豊中	19	星川　寿子	斉藤	橿原市	観音寺
				20	和田　昌子	井上	高知市	観音寺

平成二十一年関西観八会総会
― 吉野山紀行 ―

観一・8回　世話人代表　永田　寛

四月十五日午後、観音寺・高松・福岡県からの六人を含む大阪方面からの観八会会員二十四人は、大阪阿部野橋発十三時十分の吉野行き特急一号車に乗った。関西観八会の今年度総会出席のためである。

当日は好天気だが、前々夜から前日にかけての雨風による落花が気に掛かりながらも、久しぶりの顔合わせで、電車内は話が弾む。

途中京都方面からのメンバーと橿原神宮駅で合流し、十四時二十五分、終点吉野駅着。駅前には奈良県内などからの先着組が五、六人。

矢野、畠中、元木の三君は総会会場（宿泊所）の芳雲館に先行し、三宅・脇君らは東京組の到着を待つために残り、他の二十人ほどはゆっくりと山上に向かう。大きな荷物を持つ数人はロープウエーに乗ったが、ほとんどは七曲りの坂を上ってロープウエー山上駅付近へ。三日前ならば桜花に囲まれているはずだが、残念ながら一面新緑となっている。

山上駅からは土産物店が並ぶ道。シーズンなので、歩行者天国となっている。残り桜は所々にちらちら見えるが桜見物からはすでに過ぎている。

しかし、出掛ける人・帰る人で結構大勢の人出。

観八会の一行も吉野駅前を出るときは大人数だったが、山上に着いた頃にはいくつかのグループに分かれ、それにつづく土産物店街を進むうちにさらに分かれていった。

土産物店街は予想外に長く、後で地図を調べて見ると約一キロメートルあった。二・六キロメートルといわれる天神橋筋商店街には及ばないが…。

途中「黒門」、「仁王門」を経て蔵王堂に至る。黒門は修験本宗総本山金峰山寺の総門で、本堂蔵王堂は室町時

代の建築で仁王門ともに国宝に指定されていると聞く。金峰山寺は修験道の開祖といわれる役行者（えんのぎょうじゃ）が千三百年前に蔵王権現を感得して開いたと伝えられている。

以後、天武天皇を始め多くの天皇や秀吉、秀頼などの寄進を受けこの頃より庶民の山上参りが盛んになった。明治七年の神仏判然令では神社に区分されるなど苦難の年月があったが、明治十九年には、仏堂に復帰した。

土産物店の間に、太閤秀吉が「一目千本」と感嘆した花見の本陣と伝えられる吉水神社の案内柱があった。

左への急な坂を下り、再び坂を上ったところに神社がある。その向こうに三日前なら一面の桜色がみられたであろうところには、輝く新緑の景色があった、わずか三日の違いが悔やまれる。

宿泊先の芳雲館は土産物店の終わるところから右前方への急な坂道の上の方にある。

土産物店の終わるところが中千本のバス終点。そこから右前方に急な坂道があり、その両側は旅館街。急な坂道をえっちらおっちら上り切る少し手前に目的地「芳雲館」があった。滋賀県組の木下・小林・田尾君らは車ですでに到着していた。

「芳雲館」からは桜満開の千本桜が望めるはずだったが、やはり一面の新緑。谷向うの後醍醐天皇陵の近くに雲居の桜であろうか数本の残り桜が見える。後は奥千本に期待するだけ。

今春の吉野山総会は総勢三十六名。おいおい全員がそろって六時から和室大広間で総会。矢野君の司会進行で、亡くなった方への黙祷が終わるとともに、ふすまの向こうから謡曲が聞こえてきた。後で聞くと観世流の「吉野天人」だった。内容は都の人が吉野の桜を見物に出かける話でこの人を観八会の人にモジッタものであった。レコードかと思った人もいたが、聞き覚えのある声だ。謡の中に「観八」の言葉が入ったので、脇君だと知れた。この一年間に「なくなった観八会員はいないのに黙祷とは」と思ったが、脇君がそっと抜け出す仕掛けだった。

後はいつものように世話人代表、本部代表の挨拶の後、乾杯して宴会。

宴会の途中で、関西観八会初参加者と遠方からの参加者に一言ずつ話してもらった。

宴会に続いてカラオケ。聞き惚れるような歌もあった。最後は、一昨年から「高校三年生」に代わって定番となった「六甲おろし」でお開き。

つづいて、寝室六室の一つにほとんど全員が集まり、二（三？）次会。周りには少しは気遣いながらも深夜まで談笑が続いた。

翌十六日は、「もしかすると桜の花が…」という期待を抱いてホテル近くからバスで奥千本口へ。

奥千本口バス停近くにある金峯神社にお参りし、そこからは歩いて下った人も数人いたが、大部分は、急な坂道を更に西行庵に向かい、乗用車が通れる程度の幅の道を二、三十分上ったところに「西行庵〇・二キロメートル」の標識。細い道を歩いていくと前方に桜色がやっと見えてきた。そこには、かの西行が結んだといわれる庵が再現されている。奥千本にきた甲斐があり、桜花の写真もとることができた。

また、吉野の桜は樹高があり、近くからだと見上げねばならず、谷向うに一面の桜を遠くから見るのが見方であると勝手な解釈をし、吉野の桜には近づかない方がよいとも思った。

西行庵からは別の細道を通って下山。

高城山展望台近くの桜は満開で、そこへのアプローチは急坂なるも息を切らしながら上った甲斐があった。

次いで、平安時代からある延喜式の水分（みくまり）神社を拝観した。この神社は水分―流水の配分を司る神社であったが、みくまりから訛っていってみこもり（御子守）へと信仰の形が変わって行き、かの秀吉もお参りして秀頼を授かったといわれている。

続いて、佐藤忠信が主君義経を落ち延びさせるために奮戦して討ち死にしたといわれる花矢倉へと降りていっ

た。

花矢倉からは上千本、中千本には、桜はなかったが、蔵王堂を中心にした絶景が眺められた。

右手の谷向こうに緑の桜木を見ながら、途中左手に後醍醐天皇の皇子大塔の宮（護良親王）の顕徳碑が立つ桜展示園を横目で見て、ときに葉桜並木をくぐって荷物を預けてある昨夜のホテルへと向う。途中、千利休が作ったと言われる竹林院の群芳園を見学したグループもあった。

朝乗ったバス停の横を通ると長い行列。一時間半待ちとのこと。我々同様、桜を求めて奥千本にということだろう。下りの道で大勢が登ってくるのに出会ったのも道理だ。バスをあきらめて徒歩でという人が多かったのだろう。

ホテルで、畠中君から、通信、写真の編集、ホームページの運用など、関西観八会の運営に対してカンパの提案があり、出席メンバーからカンパをいただいた。

荷物を引き取って昼食場所、蔵王堂近くの柿の葉寿司「やっこ」へ三々五々。

食事のあと、斉藤君から定番の健康講座、今回は…。

今回の総会を取り仕切った矢野君はここで、「今年度総会としての行事は一応終了」と宣言してほっとした表情。本当にご苦労さまでした。

昼食後吉野駅へ。往路で素通りしたメンバーは蔵王堂を見物したり、ご近所・友人へのくずもち・よもぎ餅、吉野葛を買い求め、七曲りの下りをものとせず降りていった。

吉野駅での電車を待つ間もソフトクリームを買い、頬張って童心に帰っていた。

吉野駅からの近鉄電車内も話題が尽きなかったようで、余韻を残しながら再会を約した。

「関西観八Ｈ／Ｐ」に、写真を載せていますのでご覧ください。開き方は、「観一高京阪神支部」を検索し、リンクより「関西観八会」を開き画面左の「総会の記録」から「四月十五、十六日」の写真を開いてください。

平成 21 年度関西観八会総会　於　吉野　芳雲館

観一・九回生（昭和三十三年卒）同窓会

恩師五名をご招待
卒後五十周年記念同窓会

観一・9回　西庄　俊三

―八月一日、琴弾荘に集う。―

観一・第九回卒同窓会が、平成二十年八月一日、観音寺市琴弾公園内にある琴弾荘で開催された。卒年に因み、観一・三三会と称し、毎年八月一日に開催することが決まっている。

今年は、卒後五十年という節目の同窓会であり、特に恩師の先生方にも呼びかけ五名の恩師に出席いただいた。住所判明の卒業生三八四名全員に案内状を送付し八十六名が出席した。節目の同窓会ということで昨年より三十四名も出席者が多かった。

当日は、午後六時より懇親会の開始であるが、早朝、午前八時三十分より、ゴルフ愛好者によるゴルフコンペが、琴平カントリークラブで行われ、五組二十名が炎天の下熱戦を展開した。

私も、大阪から午前十一時半に観音寺に帰り、墓参、昼食を済ませ、午後二時半に琴弾荘に。三時頃より続々と出席者が集まり、六時の開始前から控えになっている喫茶室で三々五々と同窓会が始まっていた。ゴルフ組も四時頃に戻りその席に合流。

懇親会は、別掲のプログラムどおり、午後六時より、大平正芳記念館、加地淑久館長の講演「大平正芳（三中24回）元総理の話」で幕開け。実直な性格で多くの人に親しまれ又、支えてもらったこと。読書家で生涯に一万冊以上の本を読んだことなど。縁戚につながる加地君より熱っぽく講演された。

集合写真（注、この写真は、二〇〇八年十二月一日付、四国新聞「あの日あの時」の記念として掲載された。）撮

影のあと、物故者への黙祷、幹事の挨拶があり、本日お招きした恩師五名「近藤藤雄先生（理科）、請川昇先生（国語）、近井安雄先生（理科）、近井正敏先生（理科）、臼杵貢先生（数学）」の紹介と各先生からのご挨拶を頂戴した。九十歳は過ぎたと思われる各恩師の矍鑠（カクシャク）たる姿に接し一同感無量。請川昇先生からは、五つの「ず」を使ってのご挨拶。

あ＝あせらず、あわてず。

い＝いたわりの心を忘れず。

う＝うそを使わず。

え＝えにしを忘れず。

お＝恩を忘れず、恩を売らず。

さすが国語の先生。卒後五十年を経過したが挨拶の一言一句が深く心に染みた。

懇親会に移り、京阪神支部長、守谷公男君の音頭で乾杯。続いて本日の演劇は、正登美子（9回卒）さんのシバオケ・バラエティショウ。これには同級生の肝入りにより、善通寺シバオケ同好会所属の方々の応援があり、特に「番場の忠太郎（瞼の母）」が印象に残る。同窓会の席で同級生のこのような熱演を見ることは、五十年前の学生時代に戻った気分をほうふつとさせた。熱演のあと、岡下衆議院議員（大阪十七区選出）の挨拶があり、「健康な体でお互いに寿命を延ばしていきましょう。」と老齢の入口にさしかかった参加者に語りかけた。あとはゴルフの表彰があり、高校時代の思い出の映像をスクリーンに写し出し高校時代を忍ぶ。以降は毎年のことながら、積もる話に花を咲かせる者、恩師との歓談並びに写真撮影をする者ありで三時間は本当にアッという間に過ぎた。最後に校歌斉唱で初日は幕。あとも各部屋において夜更けまで歓談に花が咲いた。明けて二日目は有志十五名が母校に参集。同級生の大山皓、元観一高校長の案内で、百周年記念館と資料館を見学した。

最後になりましたが、当日の記念同窓会のために、学

年幹事である、高嶋睦徳君より、「五十周年同窓会に寄す」として、漢詩を詠んでくれたので紹介しておきたい。

五十周年 同窓会に寄す

作者　臥徳　高嶋　睦徳

琴弾高臥して、正に煌煌　琴弾高臥正煌煌
眼下の銭形、自ずから祥を放つ　眼下銭形自放祥
卒寿の恩師は、白髪を忘れ　卒寿恩師忘白髪
古稀の朋友は、懐郷に洳る　古稀朋友洳懐郷

［平起式　下平声七陽韻・平成二十年八月・第百五十四作］

［通解］

琴弾は世俗を離れ堂々と横たわり、眼下の銭形砂絵『寛永通宝』も幸あれと祈ってくれています。

九十歳を過ぎた恩師の方々も白髪になったことも忘れて初々しく輝き、七十歳になった同級生達はスクリーンの映像を見ながら、時空を超えて五十年前の溌剌とした高校生に蘇（よみがえ）っています。

観一・三三会　同窓会プログラム

受付開始　十六時三十分～
総合司会　宇賀　康雄　菅　美枝子　十八時〇〇分～

Ⅰ．講　演　『大平正芳　元総理の話』
大平正芳記念館　館長　……　加地　淑久

Ⅱ．同窓会
1．集合写真撮影　…　関　正　荻田　泰助
2．物故者へ黙祷、伝達事項等　……　司　会　者
3．幹事挨拶　……　大西　敏章
4．恩師のお言葉
請川先生　臼杵先生　近藤（藤）先生
近井（正）先生　近井先生（五十音順）
5．乾　杯　……　守谷　公男
6．シバオケ　バラエティショウ　正　登美子
（紹介　菅　美枝子　舞台裏支援　福田昭子）
7．国会報告　……　衆議院議員　岡下　信子
8．ゴルフ表彰　……　大西　照一
9．高校時代　思い出の映像、カラオケなど
……　司　会　者
10．校歌斉唱　……　大山　皓
11．閉会・中締め　……　安藤　政弘

展　示　池澤　正（絵画）　荻田　泰助（布作品）
宇賀　康雄（凧）
石川　美子　及び　中尾富士子（盆石）と
高嶋　睦徳（漢詩）

観一高　第9回卒同窓会　於　琴弾荘　平成20年8月1日

大西照一　川原和明　加地淑久　三好　勲　中川　叡　永田清一　仁尾賢二　三井英世　柏原繁太郎　大西敏博　田岡敬造　合田房雄

請川雄三　三谷史子　石部　勝　坂田幸子　福田乃武子　荻田淳子　大西　勝　藤田喬久　竹広　猛　筒井　博　田中頼彦　安藤十三男　佐藤威智雄

萩田泰助　星川佳代子　斉藤ハルミ　石川トシミ　小林純子　鈴木サカエ　五味隆子　浅野マサエ　石川美子　菅美枝子　池澤　正　大西和孝　森川光典　開田博　福田昭子　正登美子

上野温子　金子将恵　岡田博子　安藤千津子　藤田順子　谷生広泰　久保恭宏　高城孝臣　石川栄美子　大喜多勇　大西敏章　藤原　浩　白川興一　浮田俊太郎　久保一正　高木真作　宇賀康雄

松本滋美　西庄俊三　近藤孝子　近井正敏先生　近藤藤雄先生　近井安雄先生　請川　昇先生　臼杵　貢先生　高橋　進　守谷公男　安藤政弘　黒田和子　高嶋睦徳　関　正

中原玲子　三宅須子　友枝フジ子　大西寿美　紀伊弘子　喜多弥生　岡下信子　大倉和子　合田　繁　塩田益棯　大山　晧　井下愛子　大西公子

観一・三六会の同窓会

観一・12回　三好　正則

三六会（昭和36年卒）の同窓会は、総会については三年毎に開かれています。

総会とは別に観音寺・関西共それぞれ年に三～四回は連絡網で誘い合ってミニ同窓会を開いています。

台湾・韓国等海外旅行も観音寺・関西組が現地で合流する形で行っており、いつも盛会です。

アラ還（還暦）を過ぎアラ古（古希）目前で〝食べる・飲む・喋る・ときめく事が出来る内は生きている証・元気な証〟をモットーに集まっています。

昨年十一月二十二日の太閤園での京阪神支部総会は当番幹事ということで、昔にかえり「もみじ」「高校三年生」を中島征夫君のアコーディオン、牧良彦君のクラリネット伴奏で合唱しようと企画、九月二十日にかんぽの宿奈良で合宿、総会当日は観音寺からも女性三人が応援に駆けつけてくれ、総勢三十一名で無事終了。

出来栄えは合宿の成果もあり（？）、合格点だと自賛していますが如何でしたか？

十一月二十五日に奈良県桜井市穴師の里でみかん狩り。安藤健二君が退職後に管理を任されているみかん山は、今話題になっている巻向遺跡の近くで、邪馬台国卑弥呼の墓と言われている箸墓古墳も有ります。

安藤君の手入れのお陰で非常に美味しいみかんを沢山頂いて、後はバーベキューと秋の一日を皆で満喫しました。

今年は四月三日に夙川堤の花見を実施、直前の寒波の影響で予想が外れ満開とはいかず、七分咲き位でしたが、日本桜百選に入っている名所だけに非常に良い花見になりました。

松の緑と両岸に並ぶ桜並木のコントラスト、夙川に張り

出した桜を上から眺める花見、他の桜名所とは違った花見が出来ました。

ＪＲさくら夙川駅～阪急苦楽園口～阪急夙川駅まで散策して距離二キロメートルちょっと、二時間前後、大阪梅田にも近く、交通便利でお勧めの花見コースと思います。

五月三十一日には門真市民文化会館（ルミエールホール）で行われた吹奏楽団・大阪団の第八回定期演奏会「音祭り」を聞きに十三名で出かけました。

大阪団には十二回卒の牧良彦君が入団しており、昨年に続いての応援です。

今年は新インフルエンザの影響で開催も危ぶまれていたそうですが、市民会館一杯の観客で、楽団の皆さんも昨年より尚一層張り切って演奏され、感動しました。

第一部クラシックステージ・第二部企画ステージ「世界一周旅行」と曲目も非常に楽しい演奏会でした。

牧君も若い女性・主婦・会社員の男性達に囲まれて頑張ってクラリネットをやっています。

還暦を過ぎても趣味で楽団に入り頑張っている姿には感銘を覚えました。

大阪団では団員募集を行っていますので我と思われる方はチャレンジしては如何ですか。

来年の大阪団第九回定期演奏会「音祭り」は四月十八日（日）・門真市民文化会館で行われる予定です。

三六会一同、日々のんびりマイペースで歳相応の生活をエンジョイして、せめて平均寿命位までは惚けずに過ごしたいと願望しています。

滑床渓谷紀行

観一・16回　近藤　秀範・垣見　博子

卒業後の交わりは卒業時のクラス仲間でする事が多いと思いますが、二年九組のクラスを中心にして他のクラスの方も加わり活動しています。三年次は男子クラスや女子クラスと分かれていたり、入試中心の学校生活であり、二年生の時のほうが、クラブ活動を含めて自由に学校生活をエンジョイしていた記憶が鮮明だからです。

メンバーは東京、大阪、香川、他とバラバラですが、e-メールで毎日意見が飛び交っています。話題は高校の思い出、職場、健康、子供、老後、政治・社会、株等多岐にわたります。

担任は数学の中村健三先生。地元観音寺でご夫妻も一緒に喫茶店回りをしたり、季節行事でお酒を飲んだり、和やかな交わりを持たせてもらっています。

昨年、同級の新田タヱ子さんが、天皇陛下より保健関連で褒章を受賞されました。それを記念して、西伊予の勤務先の病院や滑床渓谷方面を訪ねました。東京、大阪から馳せ参じる者、四十年ぶりに会った人、夜遅くまで懐かしい話しに花が咲きました。

私たち年代は来年から年金が満額支給されます。そろそろリタイアされる方も多くなりますので、この交流がもっと身近なものになっていくことを願っています。

今年は秋に高知へ一緒に行く予定です。

滑床渓谷・森の国ホテルにて

白川洋一　槇　寿男
柴川　博　三宅　哲
佐久間順三　福田（西田）道子
大西和明　新田（大平）タヱ子
池島俊昭　垣見博子
中西　豊　加藤（勝田）恵子
石井（香川）正乃　近藤秀範
大広精一

なかよし倶楽部

観一・22回　秋山　茂之

観一を卒業後、京都に住まいして三十八年が経ちました。

京都という立地のせいか、四国からも関東からもいろんな友人が立ち寄ってくれ、そのつど交友を深めてまいりました。

十年ほど前からは、数名が声を掛け合い、京都での不定期なプチ同窓会が、始まりました。回を重ねていくうちに、あの人にもこの人にもお会いしたいなぁと膨らんでゆき、六年前に第一回なかよし倶楽部の発足となりました。

京都、岡山、神戸、広島に続き、昨年十二月六、七日には大阪の国際会議場十二Ｆグラントックで第五回なかよし倶楽部を開催いたしました。

今回は百三十余名に案内を送り七十名の参加申し込みを受けましたが、諸般の事情により当日の出席者は五十六名で二次会からの参加がプラス一名となりました。そしてその模様を収めたＤＶＤビデオとフォトＣＤを出席者や関係者等約百五十名に発送しました。

なかよし倶楽部は、二十二回卒の友達リンクです。参加者が会いたい方をお誘いするという方式で、いわば参加者は即世話役でもあります。次回も詳細が決まりしだい、ご案内致します。

二十二回の皆さん！ご都合がつくときは、ぜひ参加して下さい。

気持ちはいつまでもあの頃のまま若いつもりでも、身体は・・・と感じる今日このごろ。お互いに自愛しましょう。

第5回なかよし倶楽部（観一 22 回）　平成 21 年 12 月6日

於　大阪国際会議場 12F　グラントック

観一高同窓会東京支部『燧』（第34号）ご案内

巻頭言……鈴木岩男
平成二十年度同窓会東京支部総会報告……田中雅人
特集　「母校創立百十周年」
連載特集「先輩こんにちは」　松本民子氏を訪ねて
外国／グアテマラに関する座談会
……近藤敦子、稲田直樹、川上秀夫、高井哲夫
頑張っている同窓生紹介　……女優・渡邊美智代さん
先輩を語る座談会　……岸井成格（特別参加、毎日新聞）、
高橋達、月原茂皓、安藤政弘＝司会
「テレビの森の中で」（第４回）　……白川文造
同窓会報告（各回）
連載「ちょっと良い話」「新刊のご案内」ほか

［問い合わせ先］観一高同窓会東京支部（学苑社内）
電話　〇三（三二六三）三八一七＝学苑社

あとがき

同窓会本部では、来年の母校創立百十周年に備えて多くの同窓生のご協力により記念事業の推進に励んでいます。

同窓会誌「巨鼇十三号」は昨年に続いて「母校創立百十周年を目指して」と題する特集を組みました。

本部、三宅会長より記念事業の進行状況のご報告を、また資料館部会の活動については支部代表として参画している脇剛司副会長が報告を寄せてくれています。

また、創立記念に因んで本年は「母校の思い出」などを四名の同窓生が投稿して下さいました。

昨秋大変残念なことは、三中四十回生の学士院会員藤田廣志氏とアメリカでＮＡＳＡにも貢献していた観一十三回の近藤正治氏のご逝去です。夫々追悼文を掲載しました。

本年のエッセイは中々多彩です。古本屋三十年の中尾隆夫氏は「与謝蕪村」の活躍についてスポットを当ててくれました。

同窓会報告では、幾つかの年次は本年五月以降流行した新型インフルエンザの影響で予定していた同期会を中止したとのことで残念ながら投稿は例年より減りました。

また、本年五月～六月京都・東京・大阪の順で開催された岩倉寿画伯の個展には、多くの同窓生が鑑賞し本誌でもその印象記を掲載しました。本号の表紙絵は今回も同画伯の「茗荷」の絵で飾ることが出来ました。

発刊に際して支部を始め、各地の同窓の方々にもご協力を賜りました事を心より感謝申し上げます。そしてどうか今後とも同窓会支部と本誌に対して一層のご支援ご協力を賜りますよう心からお願い申し上げます。

二〇〇九年九月　巨鼇編集部

同窓生の皆様へ

観一高では百十周年の記念事業の一環として、資料館の整備充実を進めています。従来観一高卒業生の出版した著作物等を先輩文庫として収集してまいりましたがこの度、百周年記念館に専用本棚が完成しました。これを期に「先輩文庫」を一層充実させていきたいと考えております。

つきましては著作物を出されている場合には、本校に寄贈していただけるようお願い申し上げます。寄贈された書籍については、大切に保管すると同時に、会報などで著者や本の紹介なども行っていく予定です。

また観一高で戦後に使用されていた教科書類がほとんど残されていません。この機会に収集保管していきたいと思います。高校時代にご使用の教科書がございましたら併せてご寄贈をお願いします。

寄贈先　観音寺第一高等学校同窓会本部

〒七六八―〇〇六九　観音寺市茂木町四丁目二―三十八

または観一高京阪神支部へお送りいただくか、十一月十四日の支部総会にお持ち頂いても結構です。